

久宝寺遺跡

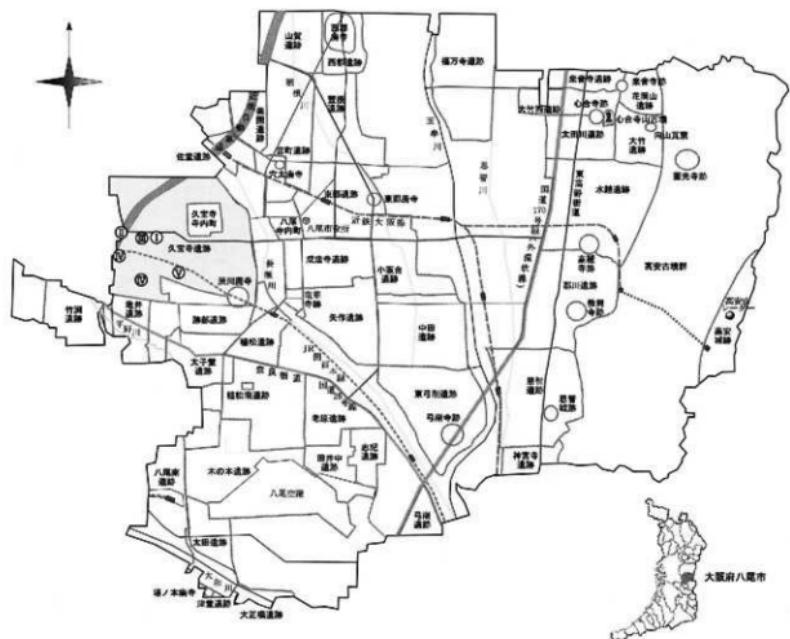
- I 久宝寺遺跡(第13次調査)
- II 久宝寺遺跡(第14次調査)
- III 久宝寺遺跡(第18次調査)
- IV 久宝寺遺跡(第27次調査)
- V 久宝寺遺跡(第59次調査)

2009年

財團法人 八尾市文化財調査研究会

久宝寺遺跡

- I 久宝寺遺跡(第13次調査)
- II 久宝寺遺跡(第14次調査)
- III 久宝寺遺跡(第18次調査)
- IV 久宝寺遺跡(第27次調査)
- V 久宝寺遺跡(第59次調査)

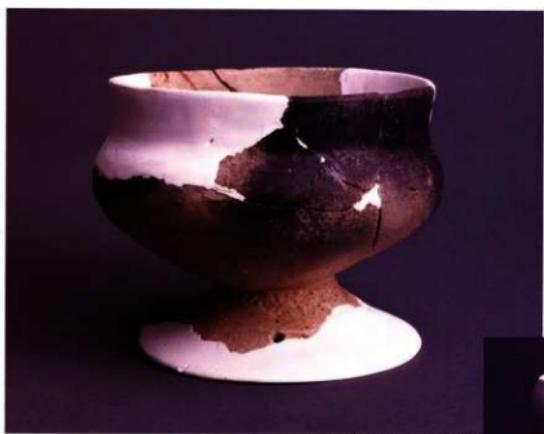


2009年

財團法人 八尾市文化財調査研究会



久宝寺遺跡第13次 理形付木製品



久宝寺遺跡第18次 台付短頭壺



把手付鉢

はしがき

八尾市は大阪府の東部に位置し、旧大和川が形成した河内平野の中心部にあたります。本市は古くから人々の生活の場として栄えていた地域であり、現在でも先人が残した貴重な文化遺産が数多く残っています。

近年、都市開発に伴い各種土木工事が実施され、貴重な埋蔵文化財が破壊され消滅する恐れがあります。文化財は現代に生きる私たちだけでなく、子々孫々まで伝え残さなければならないものです。そこでそれらに対して事前の発掘調査を実施し、記録保存を行い、先人が残してくれた貴重な文化財を後世に伝承することが我々の責務であると認識する次第であります。

本書は、平成3・4・6・11・16年度に行いました民間の開発に伴う発掘調査の成果を収録したものであります。第13次調査で出土した環形付木製品は、類例が少なく非常に珍しいものです。第14次調査では古墳時代前期の竪穴住居が見つかり、この地で生活を営んでいることが明らかになりました。第18次調査では朝鮮半島と係わりがある土器が出土し、全国的にも注目を集めました。第27次調査では、四国や北陸地方から持ち運ばれた土器が出土していることから、当遺跡では古来より他地域と活発な往来があったことが判明しました。第59次調査では、古墳時代中期の集落や、飛鳥時代の集落が見つかっています。

本書が学術研究の資料として、また文化財保護への啓発に広く活用されることを願うものであります。

最後になりましたが、この発掘調査が、関係諸機関及び地元の皆様の多大なる御理解と御協力によって進めることができましたことに深く感謝の意を表します。今後とも文化財保護に一層の御指導・御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成21年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 岩崎 健二

序

1. 本書は、財団法人八尾市文化財調査研究会が平成3・4・6・11・16年度に実施した、民間の開発に伴う発掘調査の成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成20年11月をもって終了した。
1. 本書に収録した報告は、下記の目次のとおりである。
1. 本書に収録した各調査報告の文責は、I・IV・Vは西村公助、II・IIIは坪田真一である。全体の構成・編集は西村が行った。
1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2,500分の1(平成8年7月発行)をもとに作成した。
1. 本書で用いた図に付す高さの基準は東京湾標準潮位(T.P.)で示し、方位は国土座標第VI座標系の座標北を示している。
1. 遺物実測図は、断面の表示によって下記のように分類した。
　弥生土器・土師器・瓦器-白・須恵器・陶磁器-黒、木器・瓦・石-斜線
1. 色については『新版 標準土色帖』1996 農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
1. 出土遺物掲載番号のゴシック体算用数字は、土器および土製品を表す。数字の前のWは木製品(自然木・植物の種なども含む)、Sは石製品(加工のない石も含む)である。
1. 現地調査および本書作成にあたっては、八尾市教育委員会文化財課ならびに、財団法人八尾市文化財調査研究会職員の協力を得た。
1. 各調査に際しては、写真・カラースライド・実測図を、後世への記録として多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

目 次

巻頭図版

はしがき

序

| | |
|--------------------------|-----|
| I 久宝寺遺跡第13次調査(KH91-13) | 1 |
| II 久宝寺遺跡第14次調査(KH92-14) | 35 |
| III 久宝寺遺跡第18次調査(KH94-18) | 75 |
| IV 久宝寺遺跡第27次調査(KH99-27) | 103 |
| V 久宝寺遺跡第59次調査(KH2004-59) | 151 |

報告書抄録

I 久宝寺遺跡第13次調査 (KH91-13)

例　言

1. 本書は、大阪府八尾市神武町2番35号で実施した設計棟他建設に伴う久宝寺遺跡第13次調査(KH91-13)の発掘調査報告書である。
1. 本調査は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が佛クボタから委託を受けて実施したものである。
1. 調査は当調査研究会　西村公助が担当した。
1. 現地調査は平成3年12月16日に着手し、平成4年1月23日に終了した。調査面積は約500m²である。
1. 現地調査には嶋村綾子、中西明美、林 成光の参加を得た。(敬称略、五十音順)
1. 内業整理は下記が参加し、現地調査終了後に着手して平成20年8月31日をもって終了した。(敬称略、五十音順)
遺物復元－佐藤哲也、松井三千子
遺物実測－岩沢玲子、中西、西岡千恵子、樋口 薫、古川晴久
図面レイアウト　トレースー市森千恵子、西村
遺物写真撮影－木村健明、西村
1. 本書の執筆及び編集は西村が行った。

凡　例

1. 古墳時代初頭～前期の遺物の器種分類や時期などは、原田昌則1993「Ⅱ久宝寺遺跡(第1次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告37 (財)八尾市文化財調査研究会に準じる。

本文目次

| | |
|---------------------|----|
| 第1章 はじめに..... | 1 |
| 第2章 調査概要..... | 3 |
| 第1節 調査の方法と経過 | 3 |
| 第2節 層序 | 4 |
| 第3節 検出遺構と出土遺物 | 4 |
| 第3章 まとめ..... | 33 |

挿図目次

| | |
|---|----|
| 第1図 調査地周辺図..... | 2 |
| 第2図 調査区設定図および地区割図..... | 3 |
| 第3図 西壁地層断面図..... | 4 |
| 第4図 第1～3面平面図..... | 5 |
| 第5図 S E201・S K201平・断面図..... | 6 |
| 第6図 S E201・S K201出土遺物実測図..... | 7 |
| 第7図 N R201平・断面図..... | 10 |
| 第8図 N R201出土遺物実測図①..... | 11 |
| 第9図 N R201出土遺物実測図②..... | 12 |
| 第10図 N R201出土遺物実測図③..... | 13 |
| 第11図 N R201出土遺物実測図④..... | 14 |
| 第12図 N R201出土遺物実測図⑤..... | 15 |
| 第13図 N R201出土遺物実測図⑥..... | 16 |
| 第14図 S I301平・断面図..... | 23 |
| 第15図 S I302平・断面図..... | 24 |
| 第16図 S E301平・断面図..... | 25 |
| 第17図 S I301・302、S E301、S K301・303・304・309出土遺物実測図..... | 27 |
| 第18図 S K313平・断面図..... | 28 |
| 第19図 S K313・316、S D307、5層出土遺物実測図 | 30 |

表目次

| | |
|------------------|---|
| 表1 第1面溝一覧表..... | 6 |
| 表2 第2面土坑一覧表..... | 7 |
| 表3 第2面小穴一覧表..... | 7 |

| | | |
|-----|------------------|----|
| 表4 | 出土遺物観察表(1)..... | 8 |
| 表5 | 出土遺物観察表(2)..... | 16 |
| 表6 | 出土遺物観察表(3)..... | 17 |
| 表7 | 出土遺物観察表(4)..... | 18 |
| 表8 | 出土遺物観察表(5)..... | 19 |
| 表9 | 出土遺物観察表(6)..... | 20 |
| 表10 | 出土遺物観察表(7)..... | 21 |
| 表11 | 出土遺物観察表(8)..... | 22 |
| 表12 | 出土遺物観察表(9)..... | 24 |
| 表13 | 出土遺物観察表(10)..... | 26 |
| 表14 | 第3面土坑一覧表..... | 29 |
| 表15 | 第3面小穴一覧表..... | 29 |
| 表16 | 第3面溝一覧表(1)..... | 29 |
| 表17 | 第3面溝一覧表(2)..... | 31 |
| 表18 | 出土遺物観察表(11)..... | 31 |
| 表19 | 出土遺物観察表(12)..... | 32 |

図 版 目 次

- 図版1 調査地周辺(西から) 調査前(南から)
- 図版2 北区第1面全景(北から) 南区第1面全景(北から)
- 図版3 北区第2面全景(北から) 南区第2面全景(北から)
- 図版4 北区第3面全景(北から) 南区第3面全景(北から)
- 図版5 S E 201(南から) S K201(南から)
- 図版6 N R 201(東から) N R 201遺物出土状況(南から) N R 201掘削状況(北から)
- 図版7 N R 201環形付木製品出土状況(西から) 環形付木製品出土状況(西から)
- 図版8 S I 301(北西から) S I 302(北西から)
- 図版9 S E 301(西から) S E 301遺物出土状況(西から)
- 図版10 第3面掘削状況(南から) S K313(南から)
- 図版11 S K201、N R 201出土遺物
- 図版12 N R 201出土遺物
- 図版13 N R 201出土遺物
- 図版14 N R 201出土遺物
- 図版15 N R 201出土遺物
- 図版16 N R 201出土遺物
- 図版17 S I 302、S E 301、S K309、S K313、5層出土遺物

第1章 はじめに

久宝寺遺跡は、八尾市の西部に位置し、河内平野を北西方向に貫流する長瀬川と平野川に挟まれた沖積地に立地する。本遺跡は、現在の行政区画では、北久宝寺・久宝寺・西久宝寺・南久宝寺・神武町・北龜井町・龍華町・渋川町に存在し、東西約1.8km、南北約1.7kmがその遺跡の範囲である。

久宝寺遺跡周辺には、東に渋川廃寺、南東に跡部遺跡、南西に龜井遺跡、北に佐堂遺跡、西に大阪市の加美遺跡が隣接している。

本遺跡の発見の契機は、1935年(昭和10年)に久宝寺五丁目で行われた道路工事中に、弥生～古墳時代の土器および丸木船の残片などが出土したことによる(吉岡1988)。しかしその後、発掘調査は実施されることなく、本遺跡の実態は十分把握できていなかった。

本遺跡における本格的な埋蔵文化財の調査は、1973～1974年(昭和48～49年)に実施した近畿自動車道の計画に伴う試掘調査である。この調査では弥生時代～中世に至る遺構を確認した。その後、試掘結果をもとに、(財)大阪文化財センター(現(財)大阪府文化財センター 以下センター)が、昭和55～61年まで近畿自動車道建設に伴う発掘調査(久宝寺遺跡 北地区・久宝寺遺跡 南地区・龜井北遺跡)を実施した。その結果、弥生時代～近代までの遺構および遺物が多数見つかり、集落を営んでいたことが判明した。なかでも特筆に値する遺物としては、久宝寺遺跡南地区で出土した古墳時代前期の準構造船(一瀬他1987)があげられ、全国的に注目を集める遺跡となった。

この調査以降、本遺跡内では大阪府教育委員会(以下府教委)、センター、八尾市教育委員会(以下市教委)、(財)八尾市文化財調査研究会(以下研究会)の各関係機関によって数多くの発掘調査が行なわれている。

今回報告する研究会第13次調査地の西側約100～150m地点では、研究会第18次調査(KH94-18)、同第32次調査(KH2000-32)が行われている。第18次調査では古墳時代初頭に比定できる台脚付短頭壺や把手付鉢が出土した。これらは朝鮮半島の土器に似ており、同半島との交流を示す資料として注目されている(本書Ⅲ)。また、第32次調査では古墳時代初頭～前期の堅穴住居が検出され、居住域の存在が明らかになった(森本2001)。

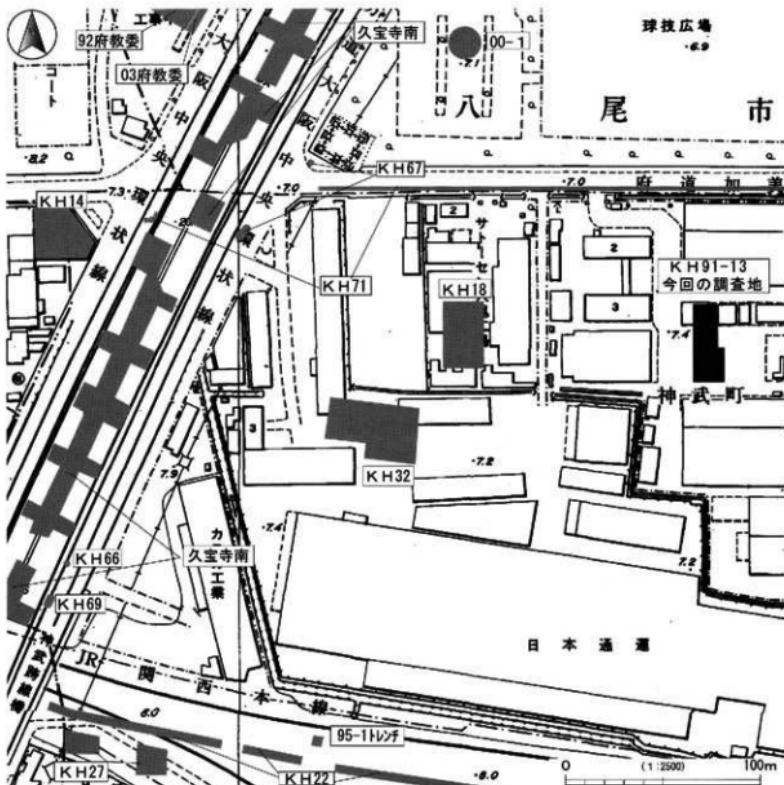
北西側約100m地点の研究会第71次調査(KH2006-71)では、13区の第5層から布留式古相の土器が出土しており、14区では遺構を検出している(樋口2007)。また、北西側約200m地点ではセンターが下水道に伴う調査を行っており、生産域を検出している(亀井他2007)。

東側約350m地点の研究会第6次調査(KH90-6)では、布留式古相の堅穴住居が検出され、さらに庄内式古相の井戸も検出している(原田1993)。また、南に隣接する研究会第35次調査(KH2000-35)でも、古墳時代初頭～前期の土坑などが検出され(森本2002)、古墳時代初頭～前期の居住域の存在が明らかになっている。

参考文献

- ・吉岡 哲 1988『考古編 第二章』『八尾市史(前近代)』本文編 八尾市役所
- ・寺川史郎他 1987『久宝寺北(その1～3)近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告』(財)大阪文化財センター
- ・松岡良憲他 1987『久宝寺南(その1)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター

- ・一瀬和夫他 1987『久宝寺南（その2）』（財）大阪文化財センター
- ・服部文章他 1986『龜井北（その1）』（財）大阪文化財センター
- ・奥 和之他 1986『龜井北（その2）』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
- ・原田昌則 1993「III 久宝寺遺跡第6次調査（KH90-6）」（財）八尾市文化財調査研究会報告37（財）八尾市文化財調査研究会
- ・森本めぐみ 2001「3. 久宝寺遺跡第32次調査（KH99-32）」平成12年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告（財）八尾市文化財調査研究会
- ・森本めぐみ 2002「I. 久宝寺遺跡第35次調査（KH2000-35）」『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告3』八尾市教育委員会（財）八尾市文化財調査研究会
- ・龜井 龍也 2007『八尾市 久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書VII-寝屋川流域下水道竜華水みらいセンター水処理施設等建設事業に伴う発掘調査他』（財）大阪府文化財センター調査報告書 第156集 財團法人大阪府文化財センター
- ・樋口 薫 2007『久宝寺遺跡第71次調査』大阪府工業用水道改良事業配水管工事Φ400（八尾中央線分岐）に伴う埋蔵文化財発掘調査（財）八尾市文化財調査研究会報告107（財）八尾市文化財調査研究会



第1図 調査地周辺図

第2章 調査概要

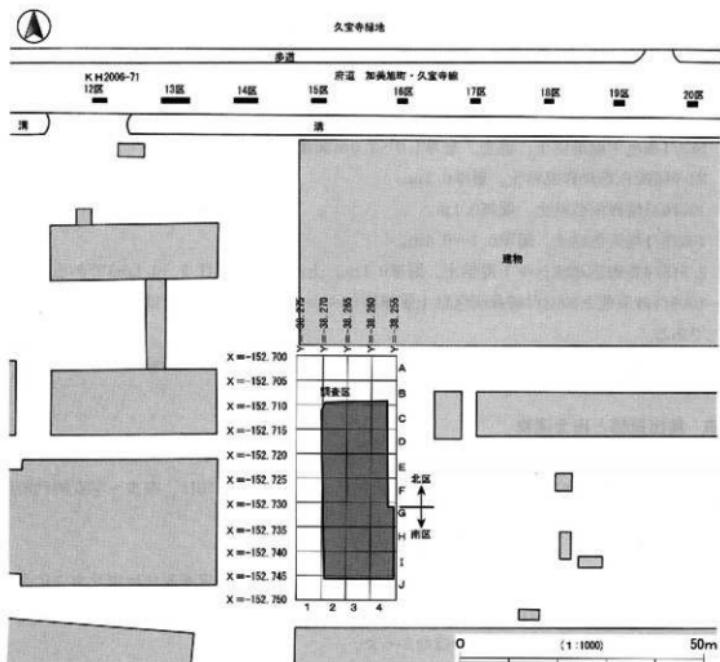
第1節 調査の方法と経過

今回の調査は、設計棟他建設に伴うもので、建物基礎部分に南北に長い調査区を設定した。調査は、掘削土の置き場所が狭いことから、南北に分割して行った。北部を北区、南部を南区と呼称する。

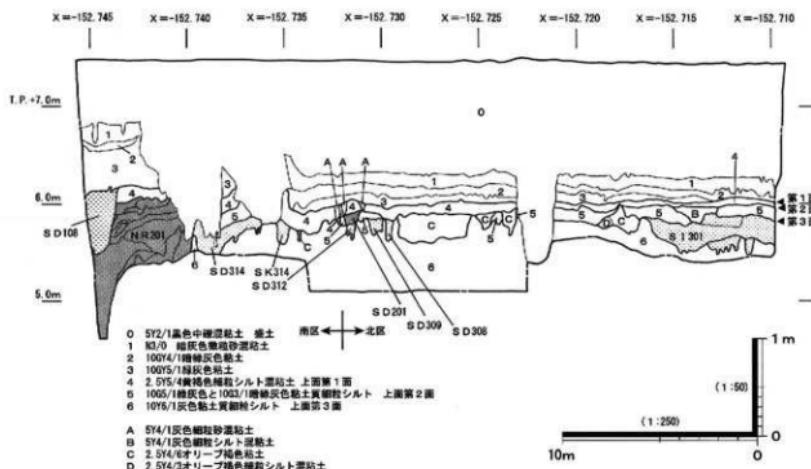
調査は、市教委の埋蔵文化財調査指示書に従い、現地表下1.4m前後までの地層を機械で掘削し、以下0.4mの厚みの地層については人力で掘削を行った。

調査においては、国土座標第VI座標系を基準とし地区割りを設定した。調査地の北西隅を調査基準点(X=-152.700 Y=-38.275)とし、東西20m、南北50mの範囲を5mメッシュで40地区に区画する方法を採用した。地区の呼称は、北西隅を起点として、1区画の南西隅の交点を優先させ、東西方向を算用数字(西から1~4)、南北方向をアルファベット(北からA~J)で示し、1 A~4 J地区と表記した。

調査の結果、第1面では奈良～鎌倉時代と近世、第2面では古墳時代前期、第3面では古墳時



第2図 調査区設定図および地区割図



第3図 西壁地層断面図

代初頭～前期の遺構をそれぞれ検出した。遺物の出土量はコンテナ(縦0.6m×横0.4m×深さ0.2m)26箱である。

第2節 層序

- 0層 5Y2/1黒色中礫混粘土。盛土。層厚1.0~2.0m前後。
- 1層 N3/0暗灰色微粒砂混粘土。層厚0.2m。
- 2層 10GY4/1暗緑灰色粘土。層厚0.1m。
- 3層 10GY5/1緑灰色粘土。層厚0.1~0.4m。
- 4層 2.5Y5/4黄褐色細粒シルト混粘土。層厚0.1m。上面は第1面(T.P.+6.1m)である。
- 5層 10G5/1緑灰色と10G3/1暗緑灰色粘土質細粒シルト。層厚0.1m。上面は第2面(T.P.+6.0m)である。
- 6層 10Y6/1灰色粘土質細粒シルト。層厚0.8m以上。上面は第3面(T.P.+5.6~5.7m)である。

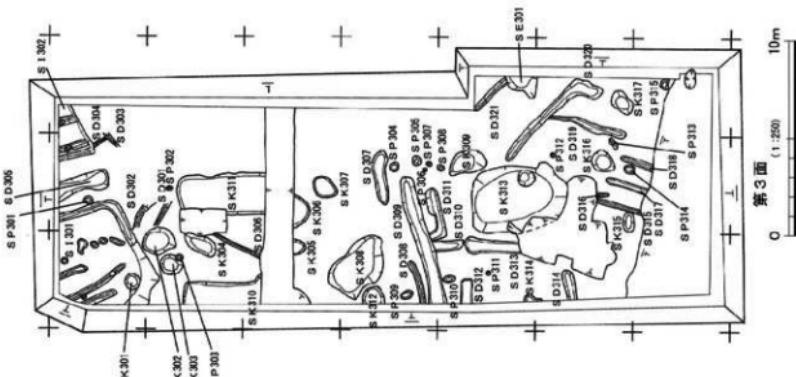
第3節 検出遺構と出土遺物

第1面

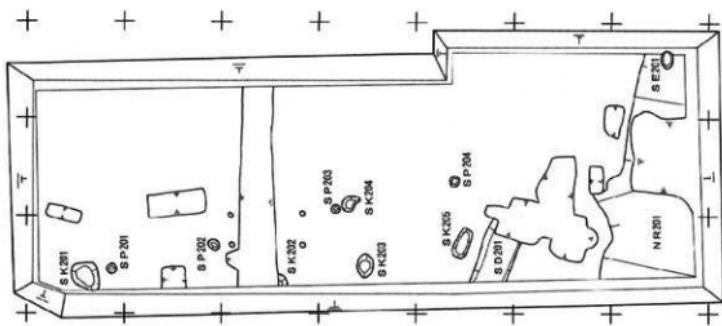
4層上面で、近世の井戸1基(S E101)、鎌倉時代の溝1条(S D101)、奈良～平安時代の溝7条(S D102～108)を検出した。

S E101

2・3 H・I地区で検出した。1層上面から切り込む井戸である。平面形状は南北方向に長い梢円形で、長径4.8m、短径4.3mを測る。断面形状は逆台形で、深さ1.5mを測る。埋土は灰色細砂混粘土である。井戸内からの出土遺物はなかった。



第1回 第1~3章



第2面

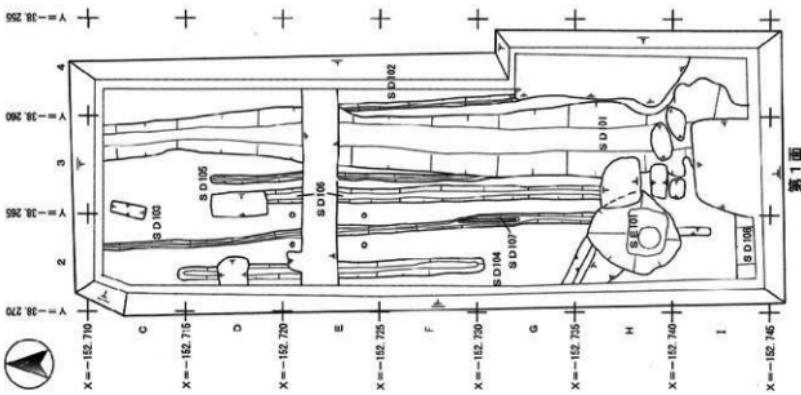


表1 第1面溝一覧表

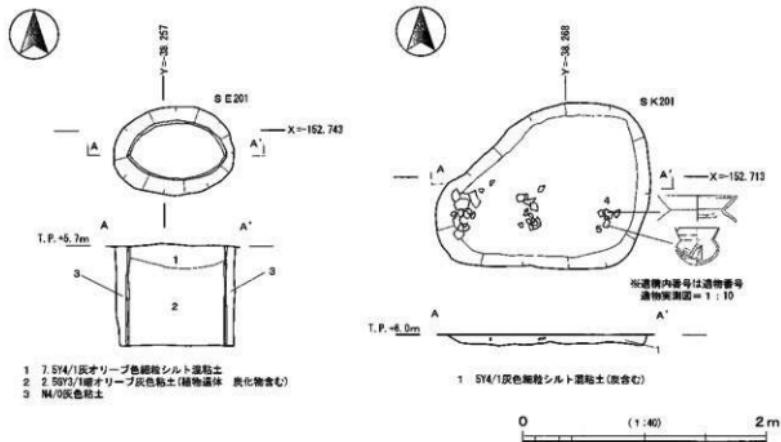
| 遺構番号 | 地区 | 平面形状 | 幅(m) | 断面形状 | 深さ(m) | 埋土 | 出土物 |
|--------|------------|---|---------|------|-------|----------------|----------------|
| S D101 | 3・4 C ~ I | 2層上面から切り込む 南北 方向に伸びる | 2.0~4.0 | 逆台形 | 0.3 | N4/0灰色細粒シルト混粘土 | 土師器、須恵器、瓦器、陶磁器 |
| S D102 | 4 E ~ G | 4層上面から切り込む 南北 方向に伸びる 岸の北部はS D101に切られる | 0.4 | 直状形 | 0.03 | N4/0灰色細粒砂混粘土 | 土師器、須恵器、瓦器 |
| S D103 | 2・3 C ~ II | 4層上面から切り込む 南北 方向に伸びる S D107と合流する | 0.3~0.4 | 逆台形 | 0.2 | N4/0灰色細粒砂混粘土 | 土師器、須恵器、瓦器 |
| S D104 | 2 C ~ G | 4層上面から切り込む 南北 方向に伸びる | 0.8 | 逆台形 | 0.1 | N4/0灰色細粒砂混粘土 | 土師器、須恵器、瓦器 |
| S D105 | 3 D ~ G | 4層上面から切り込む 南北 方向に伸びる | 0.4 | 逆台形 | 0.4 | N4/0灰色細粒砂混粘土 | なし |
| S D106 | 3 D ~ H | 4層上面から切り込む 南北 方向に伸びる | 0.7~0.8 | 逆台形 | 0.2 | N4/0灰色細粒砂混粘土 | 土師器、須恵器、瓦器 |
| S D107 | 2・3 F ~ G | 4層上面から切り込む 南北 方向に伸びる 岸部と北部は S D103と合流する | 0.1~0.2 | 直状形 | 0.1 | N4/0灰色細粒砂混粘土 | 土師器、須恵器、瓦器 |
| S D108 | 2・3 I | 4層上面から切り込む 東西 方向に直線に伸びる | 1.7以上 | 逆台形 | 0.6以上 | N4/0灰色細粒砂混粘土 | なし |

SD 101~108

SD 101は2層上面から切り込む溝で、直線に伸びる。鎌倉時代の土師器、須恵器、瓦器、陶磁器の破片が出土した。SD 102~108は4層上面から切り込む溝で、SD 102~107は南北に、SD 108は直線に伸びる。SD 102~104・106・107からは奈良~平安時代の土師器、須恵器、瓦器の破片が出土した。なお、検出した各溝の詳細については表1にまとめた。

第2面

5層上面で、古墳時代前期の井戸1基(S E201)・土坑5基(S K201~205)・小穴4個(S P201~204)・溝1条(S D201)・河川1条(N R201)を検出した。



第5図 S E201・S K201 平・断面図

S E 201

4 I 地区で検出した。上面はN R201で切られており本来の平面形状は不明である。検出した平面形状は梢円形で、長径0.9m・短径0.55mを測る。掘形の中央には、半裁して刺り抜いた板を井戸枠として置いていた。この板は、腐食が激しく取り上げることができなかつた。断面形状は長方形で、深さ0.8mを測る。井戸枠内の埋土は、上から7.5Y4/2灰オリーブ色細粒シルト混粘土、2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘土（植物遺体、炭化物含む）で、掘形の埋土はN4/0灰色粘土である。井戸内からは古式土師器が出土した。このうち図化したもののは1である。1は甕で、内面はヘラケズリ、外面はハケナデを施す。出土遺物から、造構の時期は古墳時代前期の布留式古～中相に比定できる。

S K201～205

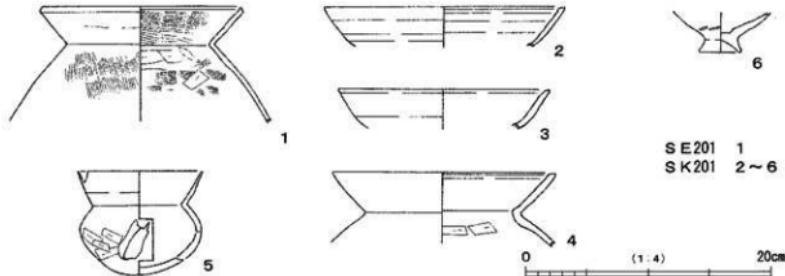
各土坑の平面形状は円形および梢円形を呈す。断面形状は逆台形を呈し、深さ0.07～0.2mを測り、比較的浅い。各土坑の検出状況からは規模や方向などの規則性は見受けられなかつた。

表2 第2面土坑一覧表

| 造構番号 | 地区 | 平面形状 | 長径 (m) | 短径 (m) | 高さ (m) | 断面形状 | 深さ (m) | 埋土 | 出土遺物 |
|--------|-----|------------|-----------|-----------|-----------|------|-----------|--------------------------|-------|
| S K201 | 2 C | 東西方向に長い梢円形 | 1.7 | 1.4 | - | 逆台形 | 0.1 | 5Y4/1灰色細粒シルト混粘土(灰含 む) | 古式土師器 |
| S K202 | 2 E | 円形か？ | - | - | 0.5以 上 | 逆台形 | 0.2以 上 | 5Y4/1灰色細粒シルト混粘土 | なし |
| S K203 | 2 F | 南北方向に長い梢円形 | 1.15 | 0.8 | - | 逆台形 | 0.1 | 5Y4/1灰色細粒シルト混粘土 | なし |
| S K204 | 3 F | 南北方向に長い梢円形 | 0.9 | 0.8 | - | 逆台形 | 0.1 | 5Y4/1灰色細粒シルト混粘土 | なし |
| S K205 | 2 G | 東西方向に長い梢円形 | 1.6 | 1.0 | - | 逆台形 | 0.07 | 5Y4/1灰色細粒シルト混粘土 | なし |

表3 第2面小穴一覧表

| 造構番号 | 地区 | 平面形状 | 長径 (m) | 短径 (m) | 高さ (m) | 断面形状 | 深さ (m) | 埋土 | 出土遺物 |
|--------|-----|------|-----------|-----------|-----------|------|-----------|-------------------|-------|
| S P201 | 2 C | 円形 | - | - | 0.5 | 逆台形 | 0.15 | 7.5GY5/1緑灰色細粒砂混粘土 | 古式土師器 |
| S P202 | 2 D | 梢円形 | 0.7 | 0.5 | - | 逆台形 | 0.15 | 7.5GY5/1緑灰色細粒砂混粘土 | 古式土師器 |
| S P203 | 3 F | 円形 | - | - | 0.4 | 逆台形 | 0.15 | 7.5GY5/1緑灰色細粒砂混粘土 | 古式土師器 |
| S P204 | 3 G | 円形 | - | - | 0.5 | 逆台形 | 0.3 | 7.5GY5/1緑灰色細粒砂混粘土 | 古式土師器 |



第6図 S E201・S K201 出土遺物実測図

表4 出土遺物観察表(1)

| 遺物番号 図版番号 | 通構 | 器種 | 径量(cm) | 形態・調整 等 | 色調 | 施土 | 備成 | 備考 |
|-------------------|----------------|----------------|---|-------------------|--------------------------------|----|----|----|
| 1 S E201 | 古式土師器 甕 | 口径14.2 | 口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部はつまみ出しがある。口縁部内面はヘコナデ、外面はヨコナデを施し、粘土模合痕がある。体部の内面はヘコナデのちヘラケズリを施し、指ナデがある。外面はヘコナデを施す。 | 2.5Y2/1 黒色 | 1~2mmの砂粒含む。 | 良好 | | |
| 2 S K201 | 古式土師器 甕 | 口径17.4 | 口縁部は内湾する。口縁部は内外面ともにヨコナデを施す。 | 7.5YR7/4 にぶい褐色 | 1~2mmの砂粒含む。 | 良好 | | |
| 3 S K201 | 古式土師器 甕 | 口径15.2 | 口縁部は内湾する。口縁部は内外面ともにヨコナデを施す。 | 2.5Y6/2 灰黄色 | 1~2mmの砂粒含む。 | 良好 | | |
| 4 S K201 | 古式土師器 甕 | 口径16.2 | 口縁部は内湾する縁部は肥厚し、面を形成する。口縁部は内外面ともにヨコナデを施す。体部は内面ヘラケズリ、外面ナデを施す。 | 5YR8/3 外淡褐色 | 1~2mmの砂粒含む。 | 良好 | | |
| 5 S K201 11 | 古式土師器 小型丸底壺 | 口径9.0 高さ7.6 | 体部は球形である。口縁部は「く」の字に屈曲し、やや内湾しながら外上方に伸びる。口縁部は内外面ともにヨコナデを施す。体部は内面ナデ、外面上位ナデ、下位ヘラケズリを施す。口縁部の一部を打ち欠いている。体部下位は打ち欠き孔があつていている。体部の外面上には部分的に黒斑がある。 | 7.5YR5/4 にぶい褐色 | 1~2mmの砂粒含む。 (角石岩を多く含む生御西藏底) | 良好 | | |
| 6 S K201 11 | 古式土師器 製塩土器 | 底径2.8 | 底部は上部底である。体部の内面はナデ、外表面はタキキ目を施す。器部は内外面ともにナデを施す。 | 2.5YR6/3 にぶい褐色 | 1~2mmの砂粒含む。 | 良好 | | |

各土坑のうち、S K201からは古式土師器が出土した。このうち図化したものは、2~6である。2~4は甕で、口縁部は内湾する。5は小型丸底壺、6は製塩土器である。5は口縁部の一部を打ち欠き、また、体部下位は打ち欠き孔がある。出土遺物から遭構の時期は古墳時代前期の布留式古~中相に比定できる。なお、検出した各土坑の詳細については表2にまとめた。

S P201~204

各小穴は調査区の西部で検出した。小穴の平面形状は椭円形と円形を呈す。断面形状は逆台形で、深さ0.15~0.2mを測り、比較的浅い。S P201~204の間隔は5.5mあいており、一列に並んでいることから、柵等の構築物の可能性が考えられる。

S P201~204からは古式土師器の破片が出土したが、図化できるものはなかった。なお、検出した各小穴の詳細については表3にまとめた。

S D201

2G・H地区で検出した。東西方向に伸びるもので、幅1.8m・深さ0.1mを測る。埋土は5Y4/3暗オリーブ色細粒シルト混粘土である。内部からは古式土師器の破片が出土したが、図化できるものはなかった。

N R201

2・3H・I・4I地区で検出した。東西方向の流路を持つ。検出幅は6.0m以上を測り、深さは最深部で1.4mを測る。本来の幅は河川の南肩が調査区外のため不明である。埋土は12層を確認した。大きく上下2層に分けることが可能で、上部は流水堆積を示す細粒~粗粒シルトと粘土の互層、下部は湿地状の堆積を示す粘土層であった。2・3I地区の⑨層内からは、古墳時代初頭庄内式~同前期布留式の古式土師器および木製品が出土した。このうち図化したものは7~89である。また、黒漆を塗った環形付木製品(W1)が出土した。

7~14は壺である。7は加飾する壺で、口縁部の内外面には部分的に赤色顔料を塗布している。9は体部の外面から叩き割り、孔があけられている。11は口縁部の内面に放射状のヘラミガキを施す。11と12は丁寧にヘラミガキを施している。13は長胴の体部をもつ壺で、外面は粘土紐の接合の痕跡が見られ、粗雑に作られている。二次焼成を受け、表部は著しく磨耗し、全体的に赤~白色系の明るい色を呈している。製塙土器である可能性が高い。15は小型器台か台付壺、16は台付壺になると思われる。

17~50は壺である。18~24の体部外面には太筋のタタキが施され、V様式系の壺である。23は底部に貫通する孔が1ヶ所あり、瓶の可能性が考えられる。

25・27~48は生駒山地西麓産の河内型庄内式壺である。27の底部は突出する平底である。28の底部は平底である。29の底部は丸みのある平底である。30の底部は丸みのある尖り底で、底部の中央には平らな部分がわずかに残る。31の底部は丸みをもつ尖り底である。47の体部の上位には焼成後の穿孔がある。49・50は布留式古相に比定できる布留式壺である。

51~68は高杯である。51~56の杯部は平坦で、口縁部は外上方へ直線に伸びる。57は布留式古相の高杯で、裾部の内面には布目の痕跡が明瞭に残っていた。58・59の杯部は平坦で、口縁部は二段に屈曲し外上方へ直線に伸びる。60・61は椀形。60~63は低脚である。68の裾内面にはヘラ状工具による記号文がある。58~63は庄内式新相に、64は布留式中相に比定できる。

69~77は鉢である。69の体部内面は横方向のヘラミガキを丁寧に施した後、放射状に施す。71・73~76は体部の外面にヘラケズリを施す。77は突出する上げ底で、縱長の器形である。

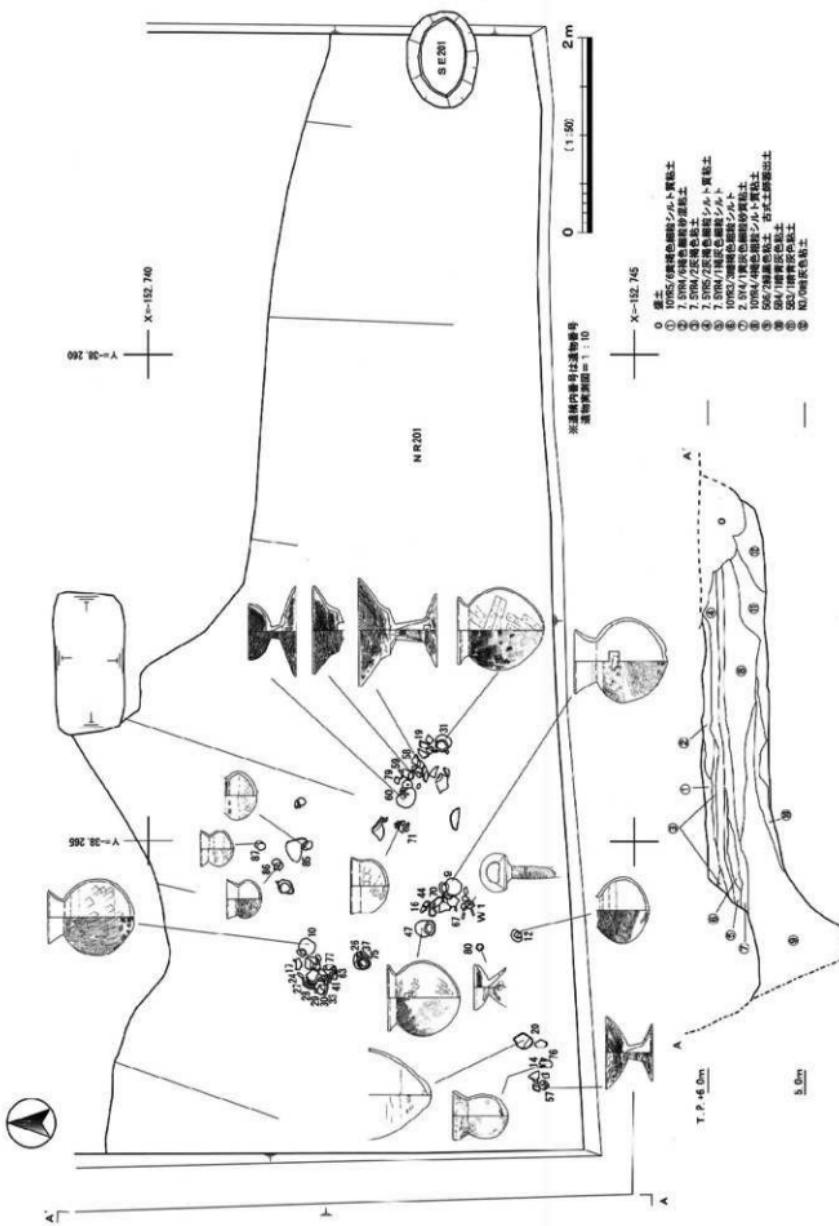
78~82は器台である。78の口縁端面と、受部の外面には文様を加飾する。81・82は鼓形器台で、類例には久宝寺遺跡南地区(その1)Bトレンチ K4号墓から出土した小型鼓形器台がある(若林1999)。この小型鼓形器台は近畿地方で製作された近畿製鼓形器台ではないかと報告されている(市村1999)。

83~89は小型丸底壺である。83は口径より体部最大径が下回り、体部外面の下位にはヘラケズリを施す。布留式中相に比定できる。86と87は口径と体部最大径がほぼ同じである。外面の下位はヘラケズリを施す。89は口径より体部最大径が上回る。

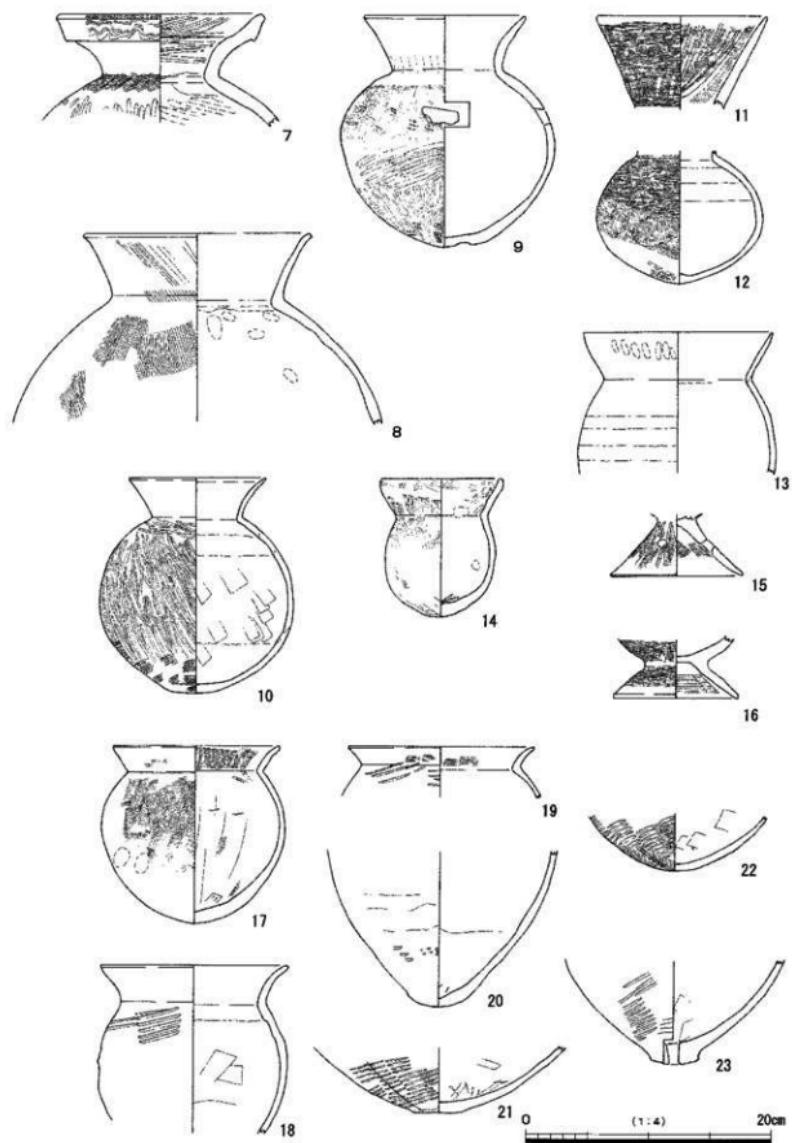
W1は環形付木製品である。土器が集中して出土した21地区から、柄の先端を西に向いた状態で出土した。出土した高さはT.P.+5.0mである。W1は1本の材を削り精巧に作られ、環状部と柄には黒漆が塗られている。

参考文献

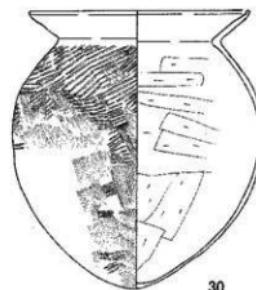
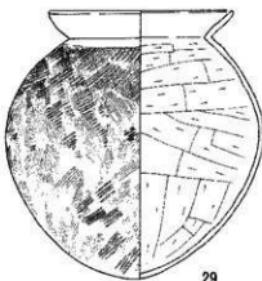
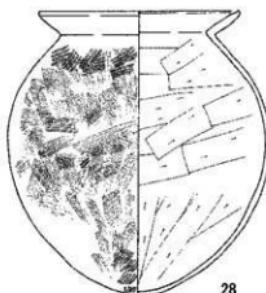
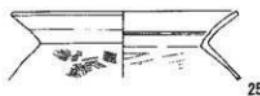
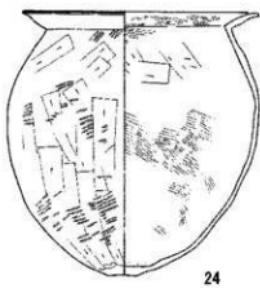
- ・若林邦彦 1999 「第II章 土器・土製品」『河内平野遺跡群の動態VII』近畿自動車道天理吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 一南遺跡群 弥生時代後期~古墳時代前期編一 大阪府教育委員会 財團法人大阪府文化財調査研究センター
- ・市村慎太郎 1999 「第VII章 第3節 久宝寺遺跡出土鼓形器台の意義」『河内平野遺跡群の動態VII』近畿自動車道天理~吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 一南遺跡群 弥生時代後期~古墳時代前期一 一石器・木製品・金属器・動植物遺体・考察編一 大阪府教育委員会 財團法人大阪府文化財調査研究センター



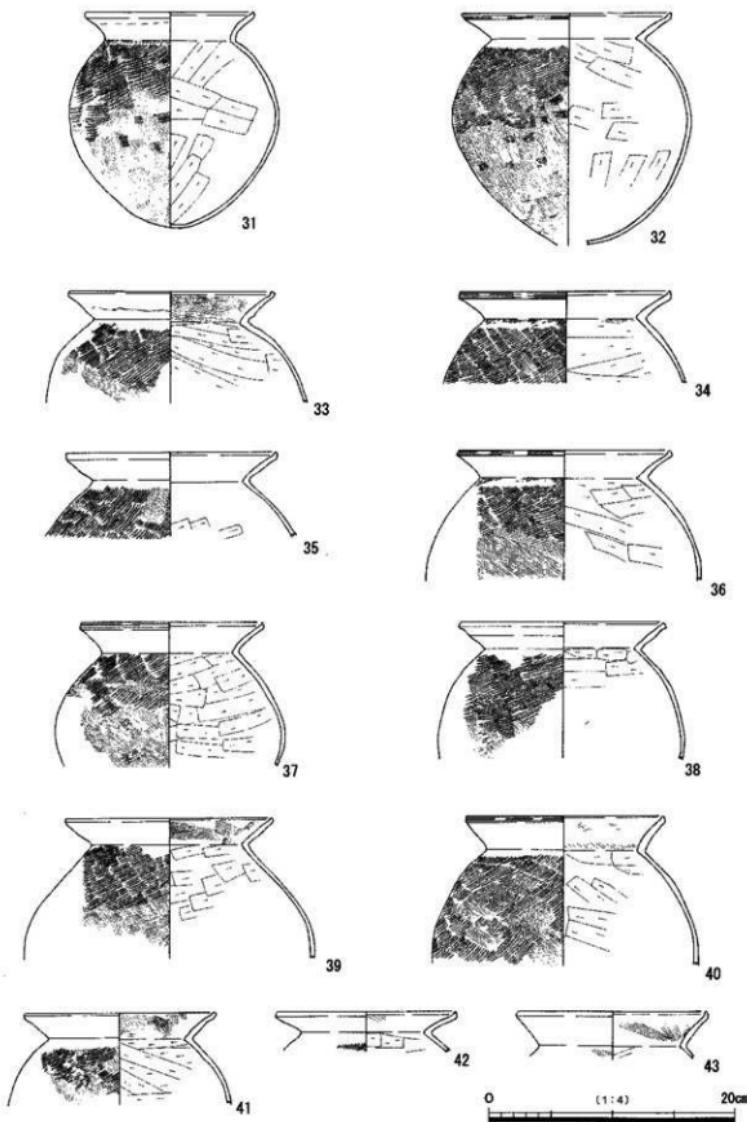
第7図 NR201平・断面図



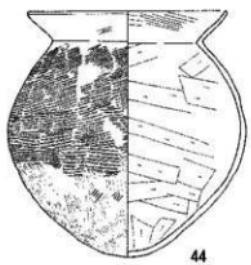
第8図 NR201出土遺物実測図①



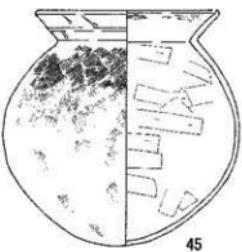
第9図 NR201出土遺物実測図②



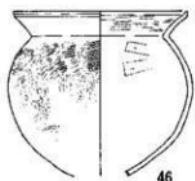
第10図 NR201出土遺物実測図③



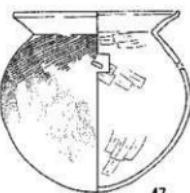
44



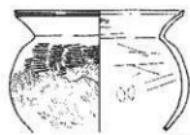
45



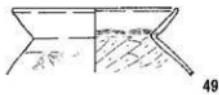
46



47



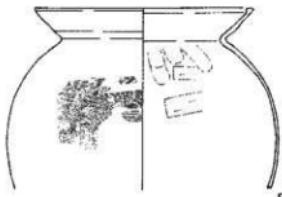
48



49



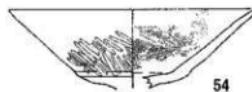
51



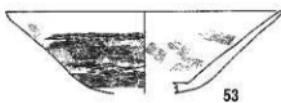
50



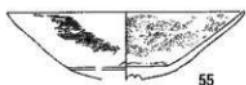
52



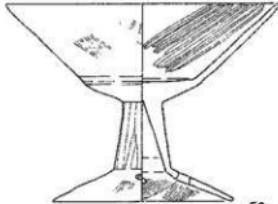
54



53



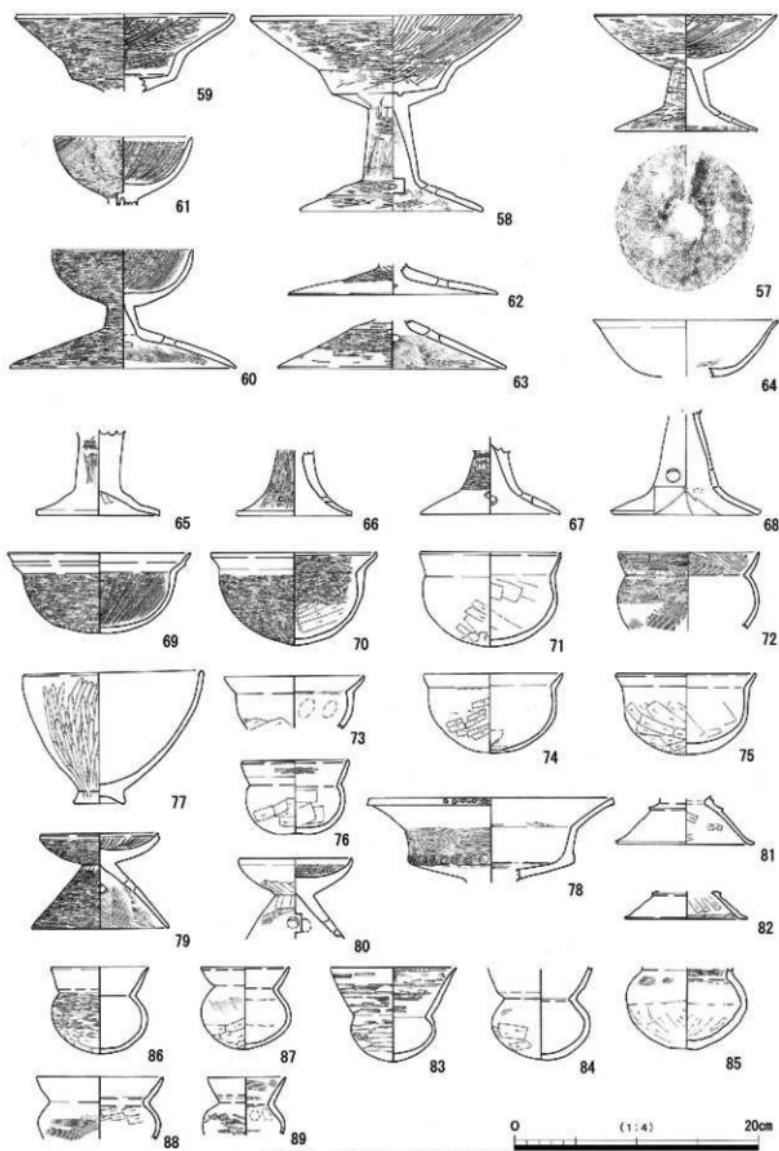
55



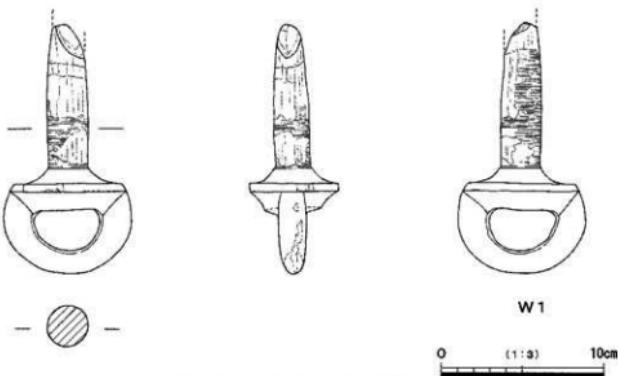
56

0 (1:4) 20cm

第11図 NR201出土遺物実測図④



第12図 NR201出土遺物実測図⑤



第13図 NR 201 出土遺物実測図⑥

表5 出土遺物観察表(2)

| 遺物番号 図版番号 | 遺構 | 器種 | 法量 (cm) | 形態・調整 等 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|--------------|--------|-----------------------|-----------------------------------|---|-------------------|-----------------|----|----|
| 7 11 | NR 201 | 古式土師器 蓋 | 口径16.2 | 外反する口縁部で、縫部は上方へつまみだし、平底な面を形成する。口縁部の内側はヘラミガキ、外側はヨコナデを施す。体部の内面はナデで、指壓圧痕や、粘土接合痕が見られる。口縫部にキザミ、口縁端面と体部上位に波状文を施す。口縫部の内外面には斜めに赤色顔料を塗布している。 | 10WR7/3 にぶい黄褐色 | 1~5mm程度の砂粒を含む。 | 良好 | |
| 8 | NR 201 | 古式土師器 破 | 口径18.0 | 「く」の字に前曲し直立ぎみに外反する口縁部。口縁部の内面はヨコナデ、外側はハケナデのちヨコナデを施す。体部の内面はナデで、指壓圧痕が見られる。外側はハケナデを施す。 | 5YR7/4 にぶい橙色 | 1~3mm程度の砂粒を含む。 | 良好 | |
| 9 11 | NR 201 | 古式土師器 蓋 | 口径12.9 高さ18.9 体部最大 径17.3 | 底部は平底で、体部は球形である。口縫部は外反する。口縫部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はナデ、外側の上半はタマリのち縫方向ハケナデ、下半タタキのちヘラミガキを施す。体部中位に穿孔、外縫下位には黒斑がある。 | 10YR5/4 にぶい黄褐色 | 2mm以下の砂粒を少量含む。 | 良好 | |
| 10 11 | NR 201 | 古式土師器 蓋 | 口径11.0 高さ17.5 体部最大 径15.7 | 底部は平底である。球形の体部で、口縫部は「く」の字に粗曲し、外反する。口縫部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面は板状工具によるナデ、外側の上半はヘラミガキ、下半はタタキのちヘラミガキを施す。体部の内外面には粘土接合痕がある。外縫下位には黒斑がある。 | 7.5YR6/6 橙色 | 2mm以下の砂粒を少量含む。 | 良好 | |
| 11 | NR 201 | 古式土師器 蓋 | 口径14.0 | 外上方へ直線的に伸びる口縫部。口縫部の内面はハケナデのち放射状ヘラミガキ、外側はヨコナデのち縫方向のヘラミガキを施す。口縫部の内外面には黒斑がある。 | 10YR5/1 褐色 | 4mm以下の砂粒を少量含む。 | 良好 | |
| 12 | NR 201 | 古式土師器 蓋 | 体部最大 径13.4 | やや尖りぎみに丸く終わる底部。体部は扁平な球形である。体部の内面はナデ、外側はヘラミガキを施す。体部の内外面には粘土接合痕がある。体部の内面には煤が付着している。体部の外側には墨斑がある。 | 10YR6/6 明黄褐色 | 2mm以下の砂粒を極少量含む。 | 良好 | |
| 13 | NR 201 | 古式土師器 蓋 | 口径15.4 | 縫長の体部から屈曲し外反する口縫部である。口縫部の内外面はナデを施し、粘土接合痕がある。 | 10YR6/2 灰黄褐色 | 3mm以下の砂粒を含む。 | 良好 | |
| 14 11 | NR 201 | 古式土師器 小型長颈壺 蓋 | 口径9.8 高さ11.2 | 口縫部の内面はナデ、外側の上半はハケナデを施す。体部の内面はナデ、外側の上半はハケナデ、下半はヘラミガキを施す。体部内面に指壓圧痕やヘラミガキによる痕跡がある。外縫下位には黒斑がある。 | 10WR4/2 灰黄褐色 | 1~2mm程度の砂粒を含む。 | 良好 | |
| 15 | NR 201 | 古式土師器 小型器か 台付壺? | 底径10.6 | 台部は「ハ」の字を開く。底部の内面はハケナデ、外側はハケナデのちヘラミガキを施す。3方向のスカシ孔を施す。内面には墨斑がある。 | 7.5YR7/4 にぶい橙色 | 1.5mmの砂粒を含む。 | 良好 | |
| 16 11 | NR 201 | 古式土師器 合付壺? | 底径10.1 | 「ハ」の字に開く。台部。体部の内面はナデ、外側はヘラミガキを施す。底部の内面はナデで、外側はヘラミガキを施す。体部の外側には指壓圧痕や粘土接合痕がある。 | 10WR7/6 明 褐色 | 3mm以下の砂粒を少量含む。 | 良好 | |

表6 出土遺物観察表(3)

| 遺物番号 図版番号 | 遺構 | 器種 | 法量(cm) | 形態・調整等 | 色調 | 粘土 | 焼成 | 備考 |
|--------------|-------|------------|---|---|---------------------|---|----|----|
| 17 11 | NR201 | 古式土師器 甕 | 口径13.6 高14.5 体部最大 径14.8 | 球形に近い体部から口縁部は扁曲し外反する。口縁部の内面はSYR7/6 面はハケナデ、外面はハケナデのちヨコナデを施す。体部側面 の内面下位はハケナデのちナデ、下位はハラケズリ、外面 はハケナデのちナデを施す。外筋の下位には指輪圧痕がある。 口縁部と体部の外面上には底が付着。 | 7.5YR7/6 黄褐色 | 2.5mm以下の 砂粒を少量 含む。 | 良好 | |
| 18 | NR201 | 古式土師器 甕 | 口径15.2 | 口縁部の内外面にはヨコナデを施す。体部の内面はヘラによ るナデを施し、粘土接合痕がある。外面上全体に右上がり の太いタキを施す。 | SYR7/2 明褐色 | 1~2mmの 砂粒を含む。 | 良好 | |
| 19 | NR201 | 古式土師器 甕 | 口径14.8 | 「く」の字に屈曲し外反する口縁部。口縁部の内外面はハケ ナデを施す。体部の内面はナデ、外面は右上がりの太いタキを 施す。底部と体部の外底には底が付着。 | 10YR5/6 黄褐色 | 2mm以下の 砂粒を少量 含む。 | 良好 | |
| 20 | NR201 | 古式土師器 甕 | 底径5.0 | 底部は突出する平底である。本部の内面はナデ、外面はタ キのちナデを施す。体部の内外面には粘土接合痕がある。内 面の底にはヘラ状工具による圧痕がある。体部の内 面は焦げる。外面上には底が付着。 | 5YR7/4 にぶい褐色 | 1~2mm程 度の砂粒を 含む。 | 良好 | |
| 21 | NR201 | 古式土師器 甕 | 底径3.7 | 底部は突出する平底である。本部の内面は板ナデを施す。 ヘラ状工具による圧痕がある。外面上右上がりのタキを施 し、ヘラ状工具による絶対方向の圧痕がある。底部の内外 面上には黒斑がある。 | 10YR5/3 にぶい黃褐色 | 2mm以下の 砂粒を少 量含む。4mm の大砂粒有 り。 | 良好 | |
| 22 | NR201 | 古式土師器 甕 | 底径2.5 | 底部はわずかに突出する平底である。体部の内面は板ナ デ、外面上は右上がりのタキのちもハケナデを施す。体 部外面上には底が付着。 | 10YR5/2 黑褐色 | 2mmの砂 粒を含む。 | 良好 | |
| 23 12 | NR201 | 古式土師器 甕 | 底径3.8 | 底部は突出する平底である。底座中央に「1」ヶ所貫通する孔 がある。底部の内面はハナデ、外面上は右上がりのタキを 施す。体部の内面には黒斑がある。体部内面は焦げる。 | 7.5YR6/3 にぶい褐色 | 1~2mmの 砂粒を含む。 | 良好 | |
| 24 12 | NR201 | 古式土師器 甕 | 口径19.0 高21.6 体部最大 径20.2 底径2.5 | 底部は突出する平底である。体部は腰長で、中位に腹部最 大径がある。体部は「く」の字に屈曲し、外反する。口 縁部の内面はハケナデのちヨコナデ、外面上はヨコナデを 施す。体部の内面はハケナデのちラケズリ、外面上は右上 がりのタキのちラケズリを施す。内面の底面は焦げる。 外面上には底が付着。 | 7.5YR7/6 褐色 | 2mm程度の 砂粒を含む。 | 良好 | |
| 25 | NR201 | 古式土師器 甕 | 口径18.2 | 口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。口縁部の内外面は ヨコナデを施す。体部の内面はラケズリ、外面上はタキの ちハケナデを施す。口縁部と体部の外面上には全体に底が付 着する。内面のハバは細いものと細いものがある。体部内 面は焦げる。 | 5Y6/2 灰オリーブ 色 | 1~2mmの 砂粒を含む。 (角閃石を多 く含む生駒 西麓産) | 良好 | |
| 26 | NR201 | 古式土師器 甕 | 口径14.4 | 口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。口縁部の内外面は ヨコナデを施す。体部の内外面はラケズリのちハケナデ内 面を施す。内面のハバは粗いものと細いものがある。体部内 面は焦げる。口縁部と体部の外面上には全体に底が付着。 | 10YR4/6 褐色 | 2mm以下の 砂粒を少 量含む。 | 良好 | |
| 27 12 | NR201 | 古式土師器 甕 | 口径15.1 高20.2 体部最大 径18.9 底径1.5 | 底部は突出する平底である。体部最大径は中位にある。口 縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。口縁部は「く」に つまみ出し、面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを 施す。体部の内面はラケズリ、外面上は右上がりのタキの ちハケナデを施す。底部の内面は焦げる。体部の外面上には 底が付着。 | 10YR2/2 黒褐色 | 4mm以下の 砂粒を含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産) | 良好 | |
| 28 12 | NR201 | 古式土師器 甕 | 口径16.0 高23.2 体部最大 径21.2 底径1.2 | 底部は平底で、体部は球形に近いや腰長の器形である。 口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部丸みのある 腰形である。口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部 は上方につまみ出し、面を形成する。口縁部の内外面はヨ コナデを施す。体部の内面はラケズリ、外面上は右上 がりのタキのちハケナデを施す。体部の内面は焦げる。 外面上には底が付着。 | 10YR3/3 暗褐色 | 4mm以下の 砂粒を含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産) | 良好 | |
| 29 12 | NR201 | 古式土師器 甕 | 口径14.8 高21.9 体部最大 径20.9 底径1.0 | 底部は丸みのある尖り底で、底部の中央には平らな部分が わずかに残る。体部は矮足の器形で、体部最大径は中位に ある。口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は上 方につまみ出し、面を形成する。口縁部の内外面はヨコナ デを施す。体部の内面はラケズリ、外面上は右上 がりのタキのちハケナデを施す。体部の内面は焦げる。 外面上には底が付着。 | 10YR3/3 暗褐色 | 4mm以下の 砂粒を含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産) | 良好 | |
| 30 12 | NR201 | 古式土師器 甕 | 口径17.8 高22.7 体部最大 径24.0 底径1.2 | 底部は丸みのある尖り底で、底部の中央には平らな部分が わずかに残る。体部は矮足の器形で、体部最大径は中位に ある。口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は上 方につまみ出し、面を形成する。口縁部の内外面はヨコナ デを施す。体部の内面はラケズリ、外面上は右上 がりのタキのちハケナデを施す。体部の内面は焦げる。 外面上には底が付着。 | 10YR3/3 暗褐色 | 4mm以下の 砂粒を含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産) | 良好 | |

表7 出土遺物観察表(4)

| 遺物番号 団版番号 | 遺構 | 種類 | 法量 (cm) | 形態・調整等 | 色調 | 釉土 | 焼成 | 備考 |
|--------------|-------|------------|----------------------------------|---|-------------------|---|------------------------------|----|
| 31 | NR201 | 古式土師器 甕 | 口径13.5 高17.6 体部最大 径16.9 | 底部は丸みをもつ尖り底である。体部は中位がやや張り出 す球形である。口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部 端部は上方につまみ出し、面を形成する。口縁部の内外面 はヨコナデを施す。外面に粒状鉢底がある。体部の内外面 はヘラケズリ、外面部の上位はタタキのちハケナデ、下位は ハケナデを施す。体部の外底から下位には煤が付着。 | 10YR3/3 暗褐色 | 5mm以下の 砂粒を多 く含む (角閃石を多 く含む生陶 器質) | 良好 (硬く 焼き 縮ま る。) | |
| 12 | | | | | | | | |
| 32 | NR201 | 古式土師器 甕 | 口径16.8 体部最大 径19.3 | 底部は丸みをもつ尖り底である。体部は中位がやや張り出 す球形である。口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部 端部は上方につまみ出し、面を形成する。口縁部の内外面 はヨコナデを施す。体部の内外面はヘラケズリ、下位前方内 はヘラケズリを施す。外面は右上がりのタタキのちハケナ デを施す。体部の外底から下位には煤が付着。 | 10YR3/3 暗褐色 | 5mm以下の 砂粒を少 量含む (角閃石を多く 含む生陶 器質) | 良好 (硬く 焼き 縮ま る。) | |
| 33 | NR201 | 古式土師器 甕 | 口径16.3 | 口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は上方につ まみ出し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施 す。外面部の内外面は斜接合板の痕跡がある。体部の内外面 は右上がりのタタキのちハケナデを施す。体部の 外面部には煤が付着。 | 7.5YR4/2 暗褐色 | 6mm以下の 砂粒を含 む。(角閃石 を多く含む 生陶器質) | 良好 (硬く 焼き 縮ま る。) | |
| 34 | NR201 | 古式土師器 甕 | 口径16.9 | 口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は上方につ まみ出し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施 す。体部の内外面はハケナデのうち前方のヘラケズリ、外面 は右上がりのタタキのちハケナデを施す。体部と体部の 外面部には煤が付着。 | 10YR3/3 暗褐色 | 2mm以下の 砂粒を含 む。(角閃石 を多く含む 生陶器質) | 良好 (硬く 焼き 縮ま る。) | |
| 35 | NR201 | 古式土師器 甕 | 口径16.8 | 口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は上方につ まみ出し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施 す。体部の内外面はヘラケズリ、外面はタタキのちハケナ デを施す。体部の外面部には煤が付着。 | 10YR3/2 暗褐色 | 3mm以下の 砂粒を含 む。(角閃石 を多く含む 生陶器質) | 良好 (硬く 焼き 縮ま る。) | |
| 36 | NR201 | 古式土師器 甕 | 口径16.9 | 口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は上方につ まみ出し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施 す。体部の内外面は横方のヘラケズリ、外面はタタキのち ハケナデを施す。体部の外面部には煤が付着。 | 10YR3/3 暗褐色 | 2mm以下の 砂粒を含 む。(角閃石 を多く含む 生陶器質) | 良好 (硬く 焼き 縮ま る。) | |
| 37 | NR201 | 古式土師器 甕 | 口径14.6 体部最大 径18.3 | 体部は中位に最大径があるやや機長の球形である。口縁部 は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は上方につまみ出 す球形である。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部内 はヘラケズリ、外面部タタキのちハケナデ。口縁部と体部の 外面部には煤が付着。 | 10YR3/3 暗褐色 | 1~3mmの 砂粒を含 む。(角閃石 を多く含む 生陶器質) | 良好 (硬く 焼き 縮ま る。) | |
| 38 | NR201 | 古式土師器 甕 | 口径16.4 | 口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は上方につ まみ出し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施 す。体部の内外面はヘラミガキ、外面はタタキのちハケナ デを施す。口縁部と体部の外面部には煤が付着。 | 10YR3/3 暗褐色 | 2mm以下の 砂粒を含 む。(角閃石 を多く含む 生陶器質) | 良好 (硬く 焼き 縮ま る。) | |
| 39 | NR201 | 古式土師器 甕 | 口径16.7 | 口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は上方につ まみ出し面を形成する。二種類の内外面はハケナデ、外面は ヨコナデを施す。体部の内外面はヘラケズリ、外面上半は右 上がりのタタキのちハケナデ、下半はハケナデを施す。口 縁部と体部の外面部には煤が付着。 | 10YR3/1 暗褐色 | 6mm以下の 砂粒を含 む。(角閃石 を多く含む 生陶器質) | 良好 (硬く 焼き 縮ま る。) | |
| 40 | NR201 | 古式土師器 甕 | 口径15.8 | 口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は上方につ まみ出し面を形成する。ヨコ部の外側はナグ、内面はハ ケナデのちヨコナデを施す。体部の外側は右上がりのタタ キのちハケナデ、内面はヘラケズリを施す。口縁部と体部 の外面部には煤が付着。 | 10YR3/2 暗褐色 | 3mm以下の 砂粒を含 む。(角閃石 を多く含む 生陶器質) | 良好 (硬く 焼き 縮ま る。) | |
| 41 | NR201 | 古式土師器 甕 | 口径15.4 | 口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は上方につ まみ出し面を形成する。ヨコ部の内面はハケナデ、外側は ヨコナデを施す。ヨコ部の外側はヘラケズリ、外側は右上 がりのタタキのちハケナデを施す。体部の外側はヘラケズリ、 外側は右上がりのタタキのちハケナデを施す。体部の外側には 煤が付着。山根および体部の平底形状は橢円形である。 | 7.5YR6/3 にぶい褐色 | 3mm以下の 砂粒を含 む。(角閃石 を多く含む 生陶器質) | 良好 (硬く 焼き 縮ま る。) | |
| 13 | | | | | | | | |
| 42 | NR201 | 古式土師器 甕 | 口径14.6 | 口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は上方につ まみ出し面を形成する。口縁部の内面はハケナデのちヨコ ナデ、外側はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外側 はヨコナデを施す。体部の外側はヘラケズリ。口縁部と体 部の外面部には煤が付着。 | 10YR3/1 暗褐色 | 1mm以下の 砂粒を含 む。(角閃石 を多く含む 生陶器質) | 良好 (硬く 焼き 縮ま る。) | |
| 43 | NR201 | 古式土師器 甕 | 口径15.2 | 口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は上方につ まみ出し面を形成する。口縁部の内面はハケナデ、外側は ヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外側はハケナ デを施す。口縁部と体部の外面部には煤が付着。 | 10YR4/6 褐色 | 1mm程度の 砂粒を含 む。(角閃石 を多く含む 生陶器質) | 良好 (硬く 焼き 縮ま る。) | |

表8 出土遺物観察表(5)

| 遺物番号 図版番号 | 遺構 | 器種 | 量 (cm) | 形態・調整 等 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|--------------|-------|------------|-----------------------------------|--|---------------------|---|------------------------------|----|
| 44 13 | NR201 | 古式土器 甕 | 口径16.0 高さ20.1 体部最大 径19.2 | 底部は丸いをもつ尖り底である。全体は中位がやや傾り出 す球形である。口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。縫隙部には直線状 のくぼみがある。口縁部の内面にはハケナデのちヨコナダ を施す。体部の内面はヘラケズリ、外面は右上がりのタタキ のちハケナデ、下半はハケナデによりほとんどタタキ が消されている。口縁～体部の外面には煤が付着している。 | 6Y7/3 淡黄色 | 1～1.5mm程 度の砂粒を 含む。(角閃 石を多く含む 生陶西端 部) | 良好 (硬く 脆き 感有 る。) | |
| 45 13 | NR201 | 古式土器 甕 | 口径14.6 高さ19.2 体部最大 径19.1 | 底部は丸いをもつ尖り出す球形である。口縁部は「く」の字に 屈曲し、外反する。縫隙部は上方へつまみ出し、面を形成する。縫隙部の内面はハケナデの色 らヨコナダを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面は右上 がりのタタキのちハケナデを施す。下半はハケナデにより ほとんどタタキが消されている。口縁部の外面にはヘラ 状工具である底筋がある。本部の内面下部は無げる。口縁～ 体部の外面には煤が付着。 | 10YR8/3 にぶい黄橙 | 1～2mm程 度の砂粒を 含む。(角閃 石を多く含 む生陶西端 部) | 良好 (硬く 脆き 感有 る。) | |
| 46 13 | NR201 | 古式土器 甕 | 口径14.0 高さ19.2 体部最大 径14.8 | 体部は中位からり出す球形である。口縁部は「く」の字に 屈曲し、外反する。縫隙部は上方へつまみ出し、面を形成する。 縫隙部には直線状のくぼみがある。口縁部の内面はハケナデのちヨコナダ を施す。外面ヨコナダを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面は右上 がりのタタキのちハケナデを施す。下半はハケナデにより ほとんどタタキが消されている。体部の外面には底筋がある。 体部の外面には煤が付着している。 | 5Y6/2 灰オリーブ 色 | 1～2mm程 度の砂粒を 含む。(角閃 石を多く含 む生陶西端 部) | 良好 (硬く 脆き 感有 る。) | |
| 47 13 | NR201 | 古式土器 甕 | 口径13.2 高さ14.8 体部最大 径15.4 | 底部は丸く終わる。体部は中位が張り出す球形である。口縁部は「く」の字に 屈曲し、外反する。縫隙部は上方へつまみ出し、面を形成する。縫隙部の内面はヨコナダを施す。 体部の内面はヘラケズリ、外面は右上がりのタタキのちハ ケナデを施す。下半はハケナデによりほとんどタタキ が消されている。体部の上部には焼成後の跡がある。 口縁～体部の外面には煤が付着。 | 10YR3/3 暗褐色 | 4mm以下 の砂粒を少 量含む。(角閃 石を多く含 む生陶西端 部) | 良好 (硬く 脆き 感有 る。) | |
| 48 13 | NR201 | 古式土器 甕 | 口径13.6 | 体部は中位からり出す球形である。口縁部は「く」の字に 屈曲し、外反する。縫隙部は上方へつまみ出し、面を形成する。縫隙部の内面はヨコナダを施す。 体部の内面はヘラケズリ、外面はヨコナダを施す。体部の内面は ヘラケズリを施し、指腹底筋である。外面は右上がりのタ タキのちハケナデを施し、粘土接合の底筋がある。口縁～ 体部の外面には煤が付着。 | 2.5Y5/2 暗灰黄色 | 1～2mm の砂粒を多く 含む。(角閃 石を多く含 む生陶西端 部) | 良好 (硬く 脆き 感有 る。) | |
| 49 | NR201 | 古式土器 甕 | 口径13.4 | 口縁部は「く」の字に屈曲し、内側ぎみに外上方へ伸びる。 縫隙部は内上方へつまみ出し、丸く終わる。口縁部の内面は ハケナデのちヨコナダ、外面はヨコナダを施す。体部の内面は ヘラケズリを施し、粘土接合の底筋である。口縁～ 体部の外面には煤が付着。 | 10YR3/3 暗褐色 | 3mm以下 の砂粒を多く 含む。 | 良好 | |
| 50 | NR201 | 古式土器 甕 | 口径17.6 | 口縁部は丸く終わる。内側ぎみに外上方へ伸びる。 縫隙部は内上方へつまみ出し、丸く終わる。口縁部の内面は ハケナデのちヨコナダ、外面はヨコナダを施す。体部の内面は ヘラケズリを施し、粘土接合の底筋である。口縁～ 体部の外面には煤が付着。 | 5YR8/4 暗橙色 | 2mm程度 の砂粒を含む | 良好 | |
| 51 | NR201 | 古式土器 高杯 | 口径21.2 | 杯部は平坦である。口縁部は外上方へ直線に伸び、縫隙部は丸く 終わる。杯部および縫隙部の内面はヘラミガキ、外 面はハケナデのちナダを施す。口縁部の内面はヘラケズリ を施し、体部上位は、ヨコナダを施す。 | 7.5YR7/8 暗褐色 | 1mm程度 の砂粒を含む。 | 良好 | |
| 52 | NR201 | 古式土器 高杯 | 口径17.4 | 杯部は平坦である。口縁部は外上方へ直線に伸びる。縫隙部は丸く 終わる。杯部および縫隙部の内面はヘラミガキ、外 面はハケナデのちナダを施す。口縁部の内面はヘラケズリ を施す。 | 5YR6/6 褐色 | 1～2mmの 砂粒を含む。 | 良好 | |
| 53 | NR201 | 古式土器 高杯 | 口径22.4 | 杯部は平坦である。口縁部は外上方へ直線に伸びる。縫隙部は丸く 終わる。杯部および縫隙部の内面はヘラミガキ、外 面はハケナデのちナダを施す。口縁部の内面はヘラケズリ を施す。 | 10YR6/6 明黄褐色 | 3mm以下 の砂粒を少 量含む。 | 良好 | |
| 54 | NR201 | 古式土器 高杯 | 口径20.2 | 杯部は平坦である。口縁部は外上方へ直線に伸びる。縫隙部は丸く 終わる。杯部および縫隙部の内面はヘラミガキ、外 面はハケナデのちナダを施す。口縁部の内面はヘラケズリ を施す。 | 7.5YR7/3 にぶい褐色 | 1mm程度 の砂粒を含 む。 | 良好 | |
| 55 | NR201 | 古式土器 高杯 | 口径19.2 | 杯部は平坦である。口縁部は外上方へ直線に伸びる。縫隙部は丸く 終わる。杯部および縫隙部の内面はヘラミガキ、外 面はヘラミガキを施す。 | 7.5YR6/6 褐色 | 1～3mm程 度の砂粒を 含む。 | 良好 | |
| 56 13 | NR201 | 古式土器 高杯 | 口径22.2 高さ16.1 縫隙14.4 | 脚部は直線的に外下方に広がる筒状である。脚部は脚部か ら舌曲し「し」の字に丸く、縫隙部は丸く終わる。杯部は明黄褐色 平底で、縫隙部は外上方へ直線に伸びる。縫隙部は丸く 終わる。杯部と縫隙部の内面は放射状にヘラミガ キ、外面はハケナデのちヨコナダを施す。柱状部の内面は ナダ、外面は縫隙部のヘラミガキを施す。縫隙部にはハ ケナデ、外面はハケナデのちナダを施す。縫隙部には4方向の スカシ孔がある。縫隙部の外匝には部分的に黒斑がある。 | 10YR6/6 明黄褐色 | 2mm以下 の砂粒を少 量含む。 | 良好 | |

表9 出土遺物觀察表(6)

| 遺物番号 図版番号 | 遺構 | 器種 | 法量 (cm) | 形態・調査 等 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|--------------|-------|-------------|----------------------------|---|-----------------|--------------------------------|----|----|
| 57 14 | NR201 | 古式土師器 高杯 | 口径14.9 器高9.5 幅径11.5 | 脚部は直線的に外下方に広がる筒状である。腹部は脚部から屈曲し「ハ」の字にひらき、端部は尖りぎみに丸く終わる。杯部は平底で、口縁部は外上方へ直線に伸びる。端部は尖りぎみで終わる。外部と口縁部の内外面はハケナデのち放射状のヘラミガキ。外腹はハケナデのちヘラミガキを施す。脚部の内面ナデ、外腹はハケナデのちヘラミガキを施す。脚部の内面は白目を押し付いたものもハケナデ、外腹はハケナデのちヘラミガキを施す。脚部には3方向のスカシ孔がある。内外面には倒角的黒斑がある。 | 10R5/6 水色 | 1 ~ 2 mm 程度の砂粒を含む。 | 良好 | |
| 58 14 | NR201 | 古式土師器 高杯 | 口径21.9 器高16.0 幅径14.7 | 脚部は直線的に外下方に広がる筒状である。腹部は脚部から屈曲し「ハ」の字にひらき、端部は尖りぎみに丸く終わる。杯部は平底で、口縁部は二段に内側へ外上方へ直線に伸びる。端部は円形を形成する。杯部と口縁部の内面はヘラミガキのち放射状のヘラミガキ。外腹はハケナデのちヘラミガキを施す。脚部の内面はユビナゲを施し、しづり目がある。外面はハジミガキのちハケを施す。脚部の内面はハケナデ、外腹はハジミガキを施す。杯部の中央に円孔があり所で開けられている。脚部の外腹には凹痕文を1条施す。脚部には4方向のスカシ孔がある。口縁と脚部の内外面には部分的に黒斑がある。 | 2.5Y R6/8 褐色 | 1 mm 程度の砂粒を含む。 | 良好 | |
| 59 | NR201 | 古式土師器 高杯 | 口径17.6 | 杯部は平底で、口縁部は二段に内側へ外上方へ直線に伸びる。端部は上方からまみ出し山面を形成する。杯部と口縁部の内面は横方向のヘラミガキのち放射状のヘラミガキ、外腹は横方向のヘラミガキを施す。 | 10R6/6 明黄褐色 | 1 mm 以下の砂粒を含む。 | 良好 | |
| 60 14 | NR201 | 古式土師器 高杯 | 口径11.4 器高9.6 幅径18.2 | 脚部は直線的に尖く外下方に広がる筒状である。腹部は脚部から屈曲し「ハ」の字にひらき、端部は丸く終わる。杯部は尖りぎみに丸く終わる。脚部の内面は横方向のヘラミガキのち放射状のヘラミガキ、外腹は横方向のヘラミガキを施す。脚部の内面はナデ、外腹はヘラミガキを施す。脚部の内面はハケナデ、外腹はヘラミガキを施す。脚部には4方向のスカシ孔がある。 | 10R6/6 明黄褐色 | 3.5mm以下の砂粒を含む。 | 良好 | |
| 61 | NR201 | 古式土師器 高杯 | 口径11.2 | 脚部は直線的に尖く外下方に広がる筒状である。腹部は横形状で、山縫部に内側して伸びる。端部は尖りぎみに丸く終わる。杯部の内面は横方向のヘラミガキのち放射状のヘラミガキを施す。脚部の内面はナデ、外腹はヘラミガキを施す。 | 10W7/4 黄褐色 | 1 mm 以下の砂粒を含む。 | 良好 | |
| 62 | NR201 | 古式土師器 高杯 | 口径17.1 | 脚部は脚部から屈曲し「ハ」の字にひらき、端部は尖りぎみに丸く終わる。脚部の内面はユビナゲ、外腹は横方向のヘラミガキがある。脚部には4方向のスカシ孔がある。 | 10R5/6 黃褐色 | 4 mm 以下の砂粒を含む。 | 良好 | |
| 63 | NR201 | 古式土師器 高杯 | 口径18.5 | 脚部は脚部から屈曲し「ハ」の字にひらき、端部は尖りぎみに丸く終わる。脚部の内面はハケナデ、外腹はハケナデのちヘラミガキを施す。脚部には4方向のスカシ孔がある。 | 10W6/6 明黄褐色 | 2 mm 以下の砂粒を含む。 | 良好 | |
| 64 | NR201 | 古式土師器 高杯 | 口径16.2 | 杯部は平底である。口縁部は内側して伸び、端部はやや外反する。杯部と口縁部の内面はハケナデのちユビナゲ、外腹はハジミガキを施す。脚部には4方向のスカシ孔がある。 | 5W8/4 黃褐色 | 2 mm 程度の砂粒を含む。 | 良好 | |
| 65 | NR201 | 古式土師器 高杯 | 口径10.0 | 脚部は円筒形で、脚部は「ハ」の字にひらき、端部は上につまみ出し山面を形成する。脚部の外腹はヨコナゲを施す。脚部の内面にはヘラミガキを施す。脚部には4方向のスカシ孔がある。 | 10R5/6 黃褐色 | 3 mm 以下の砂粒を少量含む。 | 良好 | |
| 66 | NR201 | 古式土師器 高杯 | 口径9.5 | 脚部は直線的に外下方に広がる筒状である。腹部は脚部からゆるやかに山面がりながら「ハ」の字にひらき、端部は上方につまみ出し山面を形成する。脚部の内面はユビナゲ、外腹はハケナデを施す。脚部の内面はユビナデ、外腹は横方向のヘラミガキを施す。脚部には3方向のスカシ孔がある。 | 10W8/3 淡黃褐色 | 1 mm 程度の砂粒を含む。 | 良好 | |
| 67 | NR201 | 古式土師器 高杯 | 口径11.3 | 脚部は直線的に外下方に広がる筒状である。腹部は脚部から屈曲し「ハ」の字にひらき、端部は尖りぎみに丸く終わる。脚部の内面はヨコナゲを施す。脚部の内面はユビナゲのち放射状のヘラミガキを施す。脚部には4方向のスカシ孔がある。脚部には部分的に黒斑がある。 | 10W5/4 黃褐色 | 3 mm 以下の砂粒を少量含む。 | 良好 | |
| 68 14 | NR201 | 古式土師器 高杯 | 口径11.8 | 脚部は直線的に外下方に広がる筒状である。腹部は脚部から屈曲し「ハ」の字にひらき、端部は山面を形成する。脚部と脚部の内外面はユビナゲを施す。脚部の内面にはヘラミガキを施す。脚部には4方向のスカシ孔がある。 | 2.5YR3 淡黄色 | 1 mm 程度の砂粒を含む。(内凹石を多く含む生産西麓用。) | 良好 | |

表10 出土遺物観察表(7)

| 遺物番号 図版番号 | 遺様 | 器種 | 法量 (cm) | 形態・調整等 | 色調 | 粘土 | 構成 | 備考 |
|--------------|-------|---------------|---------------------------|---|-----------------|-----------------------------------|----|----|
| 69 14 | NR201 | 古式土師器 鉢 | 口径14.8 器高6.5 | 体部は内溝する。口縁部は2段に屈曲し外反する。端部は7.5YR7/6 尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。體部の内面と口 縁部の内面には部分的に黒斑がある。 | 7.5YR7/6 赤褐色 | 3 mm以下の 砂粒を少量 含む | 良好 | |
| 70 14 | NR201 | 古式土師器 鉢 | 口径13.6 器高7.6 | 体部は内溝する。口縁部は上方へつまみ出し面を形成する。口縁部の内面はヘラミガキ、外 面はヨコナデを施す。体部の内面下部はヘラミガキ、上位色 は横方向のヘラミガキ。外面はヘラケズリの横方向のヘ ラミガキを施す。体部の外底には部分的に赤色頃料?を塗 覆している。 | 7.5YR5/4 赤褐色 | 1 mm程度の 砂粒を含む | 良好 | |
| 71 14 | NR201 | 古式土師器 鉢 | 口径11.6 器高7.7 | 体部は内溝する。口縁部は直角に内溝して伸びる。端部は7.5YR6/6 内側へ丸く終わる。口縁部の内面はヨコナデ。體部 の内面はヘラナダ、外縁の上位はユビナダ、下位はヘラケ ズリを施す。 | 7.5YR6/6 黄褐色 | 3 mm以下の 砂粒を少量 含む | 良好 | |
| 72 | NR201 | 古式土師器 鉢 | 口径11.4 | 体部は内溝する。口縁部は屈曲し内溝して伸びる。端部は10YR5/6 尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内面はハケナダ、外縁 は横方向のヘラミガキを施す。体部の内面はユビナダ、外 縁の上位は横方向のヘラミガキ、下位はハケナダを施す。 | 10YR5/6 黄褐色 | 1 mm程度の 砂粒を含む | 良好 | |
| 73 | NR201 | 古式土師器 鉢 | 口径11.3 | 体部は内溝する。口縁部は直角に内溝して伸びる。端部は10YR5/6 上方につまみ出し尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内面は明黄褐色 はヨコナデを施す。体部の内面はユビナダを施し、粘土接 合の痕跡がある。外縁の下位はヘラケズリ、上位はユビナ ダを施す。 | 10YR5/6 明黄褐色 | 2 mm以下の 砂粒を少量 含む | 良好 | |
| 74 | NR201 | 古式土師器 鉢 | 口径11.2 器高6.4 | 体部は内溝する。口縁部は屈曲し外反して伸びる。端部は7.5YR5/2 尖りぎみに丸く終わる。口縁部の外縁はヨコナデで直角 す。體部の内面はユビナダ、外縁はヘラケズリを施す。体 部の外縁には粘土接合の痕跡、内面にはヘラ状工具による 痕跡がある。 | 7.5YR5/2 灰褐色 | 5 mm以下の 砂粒を含む | 良好 | |
| 75 | NR201 | 古式土師器 鉢 | 口径11.0 器高6.6 | 体部は内溝する。口縁部は屈曲し外反して伸びる。端部は10YR5/2 上方につまみ出し尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内面は明黄褐色 はヨコナデを施す。体部の内面は板状工具によるナダ、外 縁にはヘラケズリを施す。 | 10YR5/2 明黄褐色 | 2 mm以下の 白色砂粒(長 石?)を少量 含む | 良好 | |
| 76 | NR201 | 古式土師器 鉢 | 口径8.6 器高6.0 | 体部は内溝する。口縁部は直角に内溝して伸びる。端部は10YR6/6 上方へつまみ出し尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内面は明黄褐色 はヘラミガキを施す。体部の内面はハラナダ、外縁はヘラ ケズリを施す。 | 10YR6/6 明黄褐色 | 4 mm以下の 砂粒を含む | 良好 | |
| 77 15 | NR201 | 古式土師器 鉢 | 口径14.3 器高10.7 底径4.0 | 底部は突出する上げ底である。体部へ口縁部は内溝し、端 部は丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。體部 の内面はユビナダ、外縁はヘラミガキを施す。底部の外 縁はユビナダを施す。 | 5YR7/4 赤褐色 | 2 mm以下の 砂粒を小量 含む | 良好 | |
| 78 15 | NR201 | 古式土師器 器台 | 口径19.8 高さ1.8 | 受部は平坦である。口縁部は2段に屈曲し、直線的に外上 方へ伸びる。端部は上下につまみ出し面を形成する。受部 の内外面はヨコナデを施す。山腹部の内外面はハラナダの ちヨコナデを施す。端面には円形竹管文を押した円形浮文を等間隔に施す。 受部の外縁には円形竹管文を押した円形浮文を等間隔に施す。 口縁部の内外面には部分的に黒斑がある。 | 10YR7/4 黄褐色 | 2 mm以下の 砂粒を含む | 良好 | |
| 79 15 | NR201 | 古式土師器 器台 | 口径9.4 高さ1.6 底径11.0 | 端部は「ハ」の字にひらく。端縁部は丸く終わる。受部は 平坦で、口縁部は上方へつまみ出し面を形成する。受部の内面は 横方向のヘラミガキの放射状のヘラミガキ、外縁 は横方向のヘラミガキを施す。口縁部の内外面はヨコナデ を施し、端面には同様文を施す。端部の内面はユビナダ、 外縁はヘラケズリ、下位はヘラミガキを施す。端部には4方向のスカ シ孔がある。端部の外縁には部分的に黒斑がある。 | 10YR6/6 明黄褐色 | 3 mm以下の 砂粒を少量 含む | 良好 | |
| 80 | NR201 | 古式土師器 器台 | 口径9.2 | 端部は「ハ」の字にひらく。受部は平坦で、口縁部は上方 へつまみ出し面を形成する。受部の内面は横方向のヘラミ ガキの放射状のヘラミガキ、外縁はヘラケズリを施す。 口縁部の内外面はヨコナデを施す。端部の内面はユビナダ、 外縁はヘラケズリ、下位はヘラミガキを施す。端部には5方向のスカ シ孔がある。端部の外縁には部分的に黒斑がある。 | 2.5Y7/3 淡黄色 | 1 mm程度の 砂粒を含む | 良好 | |
| 81 15 | NR201 | 古式土師器 波形器台 | 口径11.0 | 端部は斜めの柱状部から突起部を有したのち「ハ」の字に ひらく。端縁部は外上方へつまみ出し面を形成する。また、 底盤部は斜面を形成している。端部の内面はヘラケズ リ、外縁はヨコナデを施す。外縁には部分的に黒斑がある。 | 10YR7/2 黄褐色 | 1 ~ 2 mm程 度の砂粒を含む | 良好 | |
| 82 15 | NR201 | 古式土師器 波形器台 | 口径9.8 | 端部は突起を形成したのち「ハ」の字にひらく。端部は外 上方へつまみ出し丸く終わる。底盤部は平底面を形成してい る。端部の内面はヘラケズリ、外縁はヨコナデを施す。外 縁には部分的に黒斑がある。 | 10YR5/2 淡黄色 | 1 mm程度の 砂粒を少量 含む | 良好 | |

表11 出土遺物観察表(8)

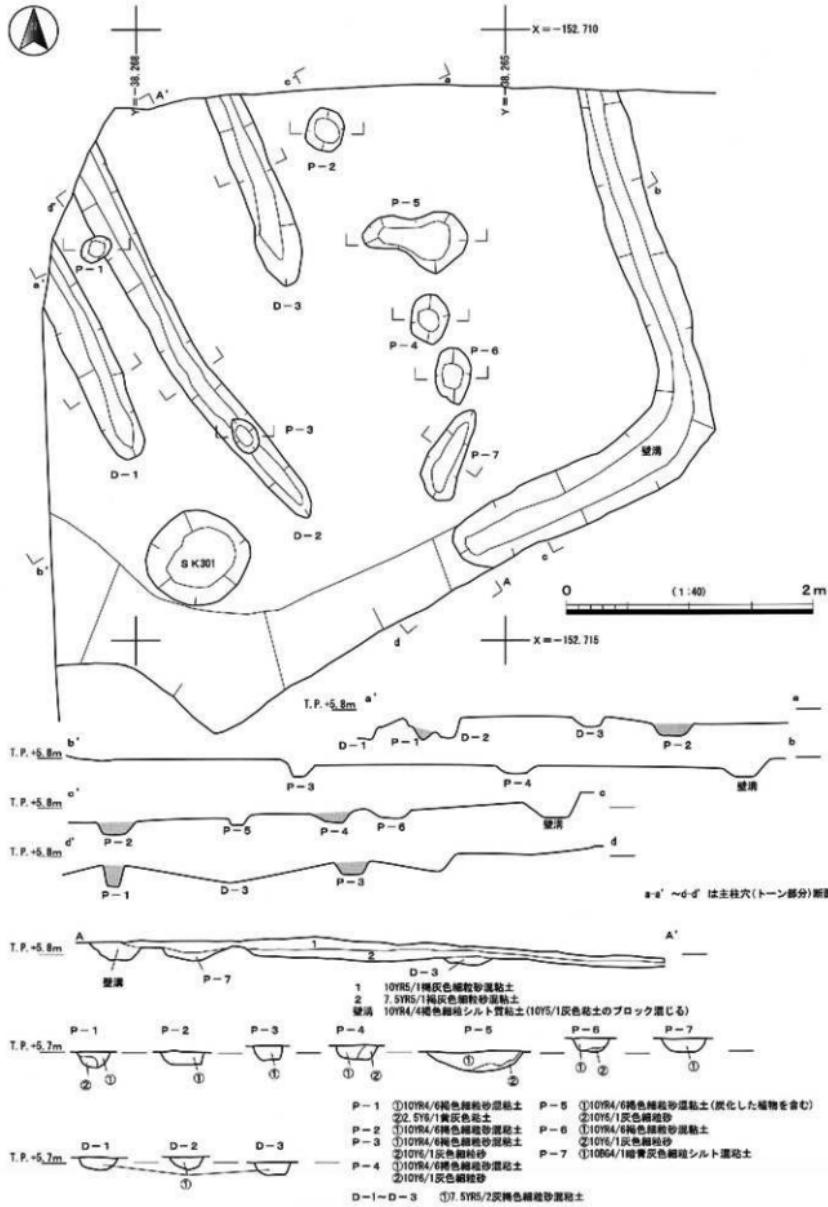
| 遺物番号 図版番号 | 遺構 | 種類 | 法量(cm) | 形態・調整等 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|--------------|-------|----------------|---------------------------------|--|-------------------|-----------------------|----|----|
| 83 15 | NR201 | 古式土師器 小型丸底壺 | 口径10.2 器高7.6 体部最大 径8.8 | 体部は横長の球形である。口縁部は黒曲し直線的に外上方に伸びる。腹部は尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内面はハケナダのちヘラミガキ、外腹はヘラミガキを施す。体部の内面はナゲ、外腹の上位はヘラミガキ、下位はヘラケズリを施す。口縁部および体部の内外面には部分的に墨斑がある。 | 5YR7/3 にぶい褐色 | 1mm程度の 砂粒含む。 | 良好 | |
| 84 | NR201 | 古式土師器 小型丸底壺 | 体部最大 径8.0 | 体部は横長の球形である。口縁部は黒曲し内湾ぎみに外上方に伸びる。口縁部の内面はヨコナダを施す。体部の内面はユビナゲ、外腹の上位はハケナダ、下位はヘラケズリを施す。 | 7.5YR7/3 にぶい褐色 | 1mm程度の 砂粒含む。 | 良好 | |
| 85 | NR201 | 古式土師器 小窓丸底壺 | 体部最大 径9.8 | 体部は横長の球形である。口縁部の内面はハケナダを施す。体部の内面はナゲ、外腹の上位はハケナダ、下位はヘラケズリを施す。体部の内面には粘土被覆の痕跡がある。 | 10VR6/3 にぶい黄褐色 | 2mm以下の 砂粒含む。 | 良好 | |
| 86 15 | NR201 | 古式土師器 小型丸底壺 | 口径8.0 器高7.1 体部最大 径7.9 | 体部は横長の球形である。口縁部は黒曲し直線的に外上方に伸びる。腹部は尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内面はヨコナダを施す。体部の内面はユビナゲ、外腹の上位は色ハケナダのちヘラミガキ、下位はヘラケズリを施す。体部の外腹には部分的に墨斑がある。 | 10YR6/4 にぶい黄褐色 | 2mm以下の 砂粒含む。 | 良好 | |
| 87 15 | NR201 | 古式土師器 小型丸底壺 | 口径7.2 器高6.7 体部最大 径7.3 | 体部は横長の球形である。口縁部は黒曲し内湾ぎみに外上方に伸びる。腹部は尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内面はヨコナダを施す。体部の内面はナゲ、外腹の上位はハケナダ色、下位はヘラケズリを施す。体部の外腹には部分的に墨斑がある。 | 10TR7/4 にぶい黄褐色 | 2mm以下の 砂粒を少量含む。 | 良好 | |
| 88 | NR201 | 古式土師器 小型丸底壺 | 口径10.3 体部最大 径10.0 | 体部は横長の球形である。口縁部は黒曲し内湾ぎみに外上方に伸びる。腹部は尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナダを施す。体部の内面はユビナゲ、外腹はハケナダを施す。体部の内面には部分的に墨斑がある。 | 7.5YR6/2 灰褐色 | 2mmの砂 粒を少量化 する。 | 良好 | |
| 89 | NR201 | 古式土師器 小型丸底壺 | 口径6.4 体部最大 径6.7 | 体部は横長の球形である。口縁部は黒曲し直線的に外上方に伸びる。腹部は尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内面はハケナダ、外腹はヨコナダを施す。体部の内面はユビナゲ色を施し、粘土被覆の痕跡がある。体部の外腹はヘラケズリのちヘラミガキを施す。体部へ口縁部の内外面には部分的に墨斑がある。 | 10YR7/3 にぶい黄褐色 | 1mm程度の 砂粒含む。 | 良好 | |
| W1 16 | NR201 | 変形付木製 器 | 長さ15.5 厚さ5.5 幅7.9 | 1本の材を削り作る。丸棒状の柄の一方に深状部がある。墨色 深状部は横円に削られ、墨瘤を残している。柄の中央部には系状の纖維を書きつけた痕跡があり、この部分にも墨瘤を残している。纖維を書きつける前の部分より先は白木のままである。柄の先端部分は焼け抜けている。 | | | | |

第3面

6層上面で古墳時代初頭～前期の堅穴住居2棟(S I 301・302)・井戸1基(S E 301)・土坑17基(S K 301～317)・小穴15個(S P 301～315)・溝21条(S D 301～321)を検出した。

S I 301

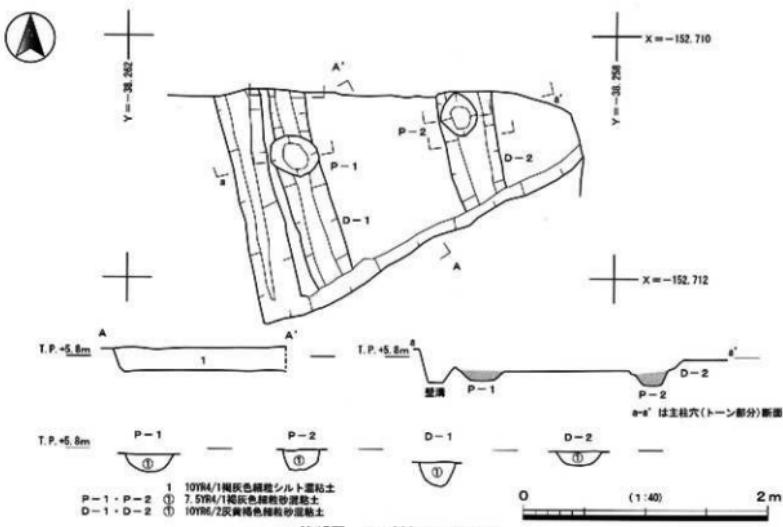
2・3C・D地区で検出した。住居の北西部は調査区外に至る。検出した南北幅は5.2m、東西幅は5.5mを測る。平面の形状は、隅丸の方形になると思われるが、南東部は西へ張り出す形状である。深さは0.2mを測り、埋土は10YR5/1褐灰色細粒砂混粘土、7.5YR5/1褐灰色細粒砂混粘土である。住居の主軸は、南北軸を基準にするとN-22°-Wである。床面では、小穴7個(P-1～P-7)と溝3条(D-1～D-3)を検出した。P-1～P-4は柱穴で、径0.25～0.34m、深さは0.1～0.12mを測る。柱間は1.8～2.0mを測りほぼ正方形に配置する平面形状である。住居北東部のP-2とP-4の間で検出したP-5は長径0.8m、短径0.3m、深さ0.15mを測る。埋土には炭化した植物を含んでいることから、炉になる可能性が高い。壁溝は東部と南部で検出し、南部



第14図 S I 301 平・断面図

表12 出土遺物観察表(9)

| 遺物番号 図版番号 | 遺構 | 器種 | 法量(cm) | 形態・調査等 | 色調 | 粘土 | 構成 | 備考 |
|----------------------|------------|----|-------------------------|---|-------------------|------------------------------|----|----|
| 90 S I 301 P-5 | 古式土師器 壺 | | 底径1.1 | 底部は尖りぎみの平底で、体部は球形である。体部の内外面はユビナゲを施す。 | 7.5YR7/3 にぶい橙色 | 2 mm以下の砂粒を含む | 良好 | |
| 91 S I 301 | 古式土師器 壺 | | 口径25.8 体部最大 径26.0 | 体部は桿長の壺形で、最大径は上位にある。口縁部は「く」字に彎曲し外反する。施部は上部にしまみ出し面を形成黄褐色する。口縁部の内外面はヨコナゲを施す。体部の内面はヘラナデ、外表面は右上がりのタタキのちヨコナゲとヘラミガキを施す。底部の外表面は右上がりのタタキを施す。体部の外表面の上位には黒斑がある。 | 10YR7/8 | 6 mm以下の砂粒を多量に含む。 | 良好 | |
| 92 S I 301 | 古式土師器 壺 | | 口径13.6 | 口縁部は「く」字に彎曲し外反する。施部は右上がりぎみに丸10YR3/3終わる。口縁部の内面はヨコナゲを施す。外表面は右上がりのタタキのちヨコナゲを施す。体部の内面はヘラケズリ、外表面は右上がりのタタキを施す。体部の外表面には塗が付着している。 | 10YR3/3 | 2 mm以下の砂粒を含む。(内閃石を多く含む生駒西麓産) | 良好 | |
| 93 S I 301 | 古式土師器 壺 | | 底径3.0 | 底部は突出する平底である。底部の内面はユビナゲ、外表面は右上がりのタタキを施す。 | 7.5YR5/2 灰褐色 | 1 mm程度の砂粒を含む | 良好 | |
| 94 S I 302 | 古式土師器 壺 | | 口径18.0 | 口縁部は外反する。施部は上方へつまみ出し丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナゲを施す。内面に波状文を施す。 | 10YR8/3 浅黄褐色 | 1 mm程度の砂粒を含む | 良好 | |
| 95 S I 302 P-1 | 古式土師器 壺 | | 底径7.1 | 底部は突出する平底である。体部の内面はヘラナデ、外表面はヨコナゲを施す。施部は右上がりのタタキを施す。底部の外表面はヨコナゲを施す。体部の内面には部分的に黒斑がある。 | 2.5YR7/4 淡赤褐色 | 1 mm以下の砂粒を少量含む | 良好 | |
| 96 S I 302 P-1 | 古式土師器 壺 | | 底径5.4 | 底部は突出する平底である。体部の内面はヘラナデ、外表面は右上がりのタタキを施す。底部の外表面はヨコナゲを施す。 | 10YR4/4 褐色 | 7 mm以下の砂粒を含む | 良好 | |
| 97 S I 302 D-1 | 古式土師器 鉢 | | 口径14.8 | 体部は内湾し外上方へ伸びる。口縁部は2段に彎曲し外反する。施部は尖りぎみに丸く終わる。内外表面はヘラミガキを施すと思われるが、表部が摩耗しており、調整は不利感である。 | 10YR7/8 黄褐色 | 4 mm以下の砂粒を含む | 良好 | |
| 17 | | | | | | | | |



第15図 S I 302 平・断面図

の途中で途切れている。壁溝の幅は0.3~0.5m、深さは0.14mを測り、埋土は10YR4/4褐色細粒シルト質粘土(10Y5/1灰色粘土のブロック混じる)である。住居の埋土からは古式土師器が少量出土した。このうち図化したものは90~93である。90は壺で、底部は尖りぎみの平底で、体部は球形である。91は外面に太筋のタタキを施すことからV様式系の壺になると思われる。92は庄内式壺で、口縁部は丸く終わっていることと、太筋のタタキを施すこと、また復元すると体部上位に最大径があることなどの特徴から庄内式古相に比定できる。角閃石を多く含む生駒西麓産の胎土である。93は底部が突出するV様式系の壺である。出土遺物から遺構の時期は古墳時代初頭の庄内式古相に比定できる。

S 1302

3・4 C地区で検出した。住居の北東部は調査区外に至る。検出した南北幅は2.0m、東西幅は2.3mを測る。平面の形状は方形になるとと思われる。深さは0.2mを測り、埋土は10YR4/1褐色細粒シルト混粘土である。南北軸を基準にすると主軸はN-22°-Wである。床面では小穴2個(P-1~P-2)と溝2条(D-1~D-2)を検出した。P-1とP-2は柱穴で、径0.3~0.4m、深さは0.14~0.16mを測る。柱間は1.9mを測る。壁溝は西部で検出した。壁溝の幅は0.3~0.4m、深さは0.3mで、埋土は7.5YR4/1褐色細粒砂混粘土である。住居の埋土からは古式土師器が少量出土した。このうち図化したものは94~97である。94は壺で、口縁部内面に波状文を施す。95~96は底部が突出するV様式系の壺である。97は2段に屈曲し外反する鉢と思われ、他地域からの搬入品の可能性がある。出土遺物から遺構の時期は古墳時代初頭の庄内式古相に比定できる。

S E301

4 G・H地区で検出した。SD321を切り、遺構の東側は調査区外に至る。検出した平面形状は不定形で、長径1.6mを測る。断面形状は南部に段をもつ逆台形で、深さ1.0mを測る。埋土は上から7.5Y6/2灰オリーブ色細粒砂混粘土、10Y6/2オリーブ灰色細粒シルト混粘土、N3/0暗灰色粘土で、N3/0暗灰色粘土層内からは古式土師器が出土した。出土遺物のうち図化したものは98~101である。98は複合口縁壺で、口縁部の外面に波状文と刺突文を施す。99~101は壺である。99は体部の外面中~下位に煤が付着し、内面の下~中位には炭化物(米?)が付着している。口縁部外面から体部上位にかけて吹きこぼれが見られる。煤、焦げの付着状況から、浮き置きで加熱し

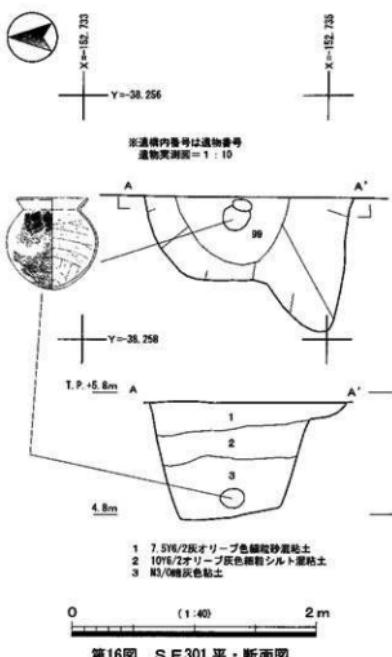


表13 出土遺物観察表(10)

| 遺物番号 図版番号 | 遺構 | 器種 | 法量(cm) | 形態・調査等 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|--------------|--------|----------------|------------------------------------|--|-----------------|---|-------------------------------|----|
| 98 17 | S E301 | 古式土師器 複合口縁壺 | | 口縁部は二段に外反する。口縁部の内面はヘラミガキ、外面は波状文と刻文文を施す。 | 7.5YR7/6 褐色 | 1mm以下の 砂粒を含む。 | 良好 | |
| 99 17 | S E301 | 古式土師器 甕 | 口径13.7 高さ18.65 体部最大 径18.2 | 底部は丸みのある尖り底である。体部最大径は中位にある。口縁部は「く」の字に起屈し外反する。端部は上方に灰黄褐色 つまみ出し、底部に形成する。口縁部の外表面はヨコナデ文を施す。体部の内面はヘラケヅリ、外表面は上位は右上がりの タカキのちハケナデ、下位はハケナデを施す。体部の外表面 中位には縦が、体部の内面下～中位には炭化物（木？）が 付着している。 | 10YR6/2 灰黄褐色 | 4mm以下の 砂粒を含む。 (角閃石 を多く含む 生野西藻塚) | 良好 (硬く 焼き を終ま る。) | |
| 100 | S E301 | 古式土師器 甕 | 口径13.4 | 口縁部はゆるやかに折れ曲がり内湾して伸びる。端部は内側に肥厚し面を形成する。口縁部の外表面はヨコナデ文を施す。体部の内面はヘラケヅリ、外表面はナデを施す。体部の 外表面には縦が付着している。 | 10YR3/3 灰褐色 | 2mm以下の 砂粒を多量 に含む。 | 良好 | |
| 101 | S E301 | 古式土師器 甕 | 口径13.4 高さ18.2 | 体部は球形である。口縁部はゆるやかに折れ曲がり内湾して伸びる。端部は内側に肥厚し面を形成する。口縁部の内面は黒褐色 外面はヨコナデ文を施す。体部の内面はヘラケヅリ、外表面は ハケナデを施す。体部の内面には粘土質の痕跡がある。 体部の外表面には縦が付着している。 | 10YR3/2 黒褐色 | 2mm以下の 砂粒を多量 に含む。 | 良好 | |

た可能性が高い。また、炭化物が付着している状況から、内面を洗わずに廃棄した可能性が考えられる¹⁰。100と101は布留甕で、体部の外表面中位に縦が付着している。出土遺物から遺構の時期は古墳時代前期の布留式期古相に比定できる。

註1 99の表面観察においては、北陸学院大学小林正史教授からご教示いただいた。記して感謝いたします。

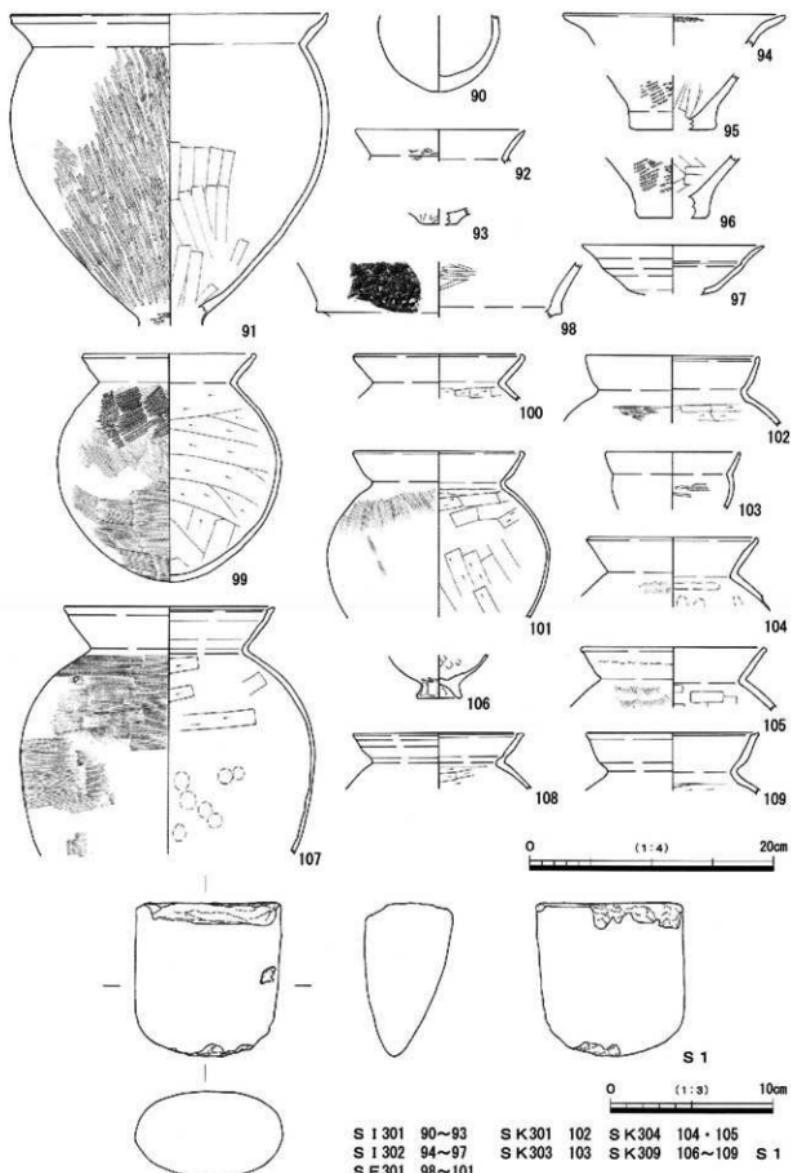
S K301～317

各土坑の平面形状は円形、橢円形、不定形を呈し、断面形状は逆台形である。埋土はS K301～312、314、315、317が單一で、313は3層、316は5層である。各土坑の平面形状、規模、配置などの規則性は見受けられず遺構の性格は不明である。S K301～306・308・309・311～314・316・317からは古式土師器が出土した。出土遺物のうち団化したものはS K301の102、S K303の103、S K304の104・105、S K309の106～109・S 1、S K313の110～126、S K316の127である。

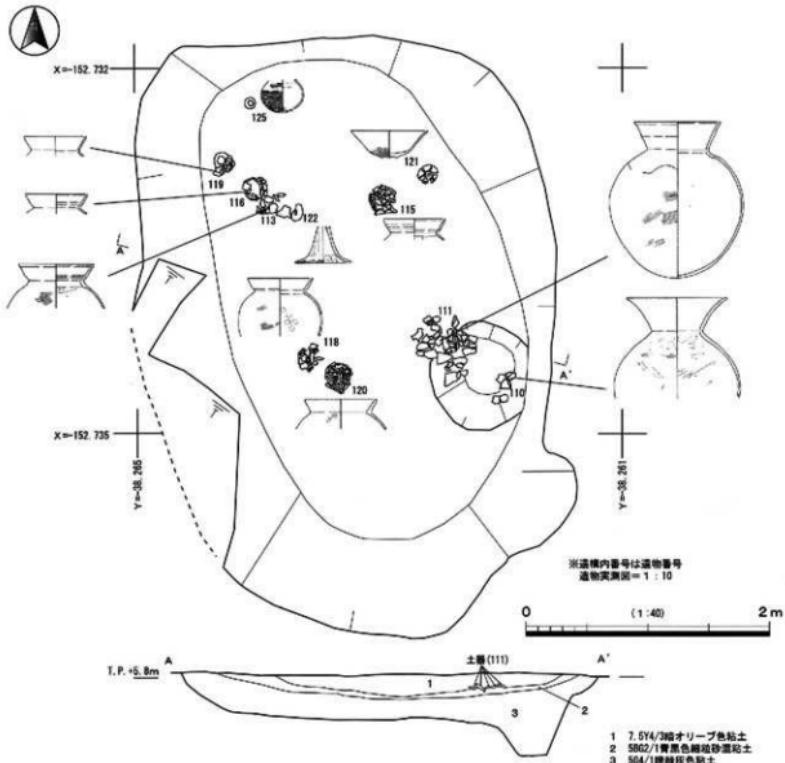
102・104・105は布留式の甕、103は布留式の鉢である。103～105は布留式古相に比定できる。106は製塙土器で、器壁は非常に薄く二次焼成を受ける。布留式に比定。107～109は布留式古相～中相の甕で、口縁端部は肥厚し面を形成する。S 1は磨製大型蛤刃石斧で、刃部は両刃である。110・111は布留式古相～中相の直口壺である。112は布留式古相の山陰系の複合口縁壺である。113～119は布留式古相～中相の甕。121～123は布留式中相の高杯である。124～126は布留式の小型丸底甕で、125には穿孔がある。124は布留式中相に比定できる。127は布留式古相～中相に比定できる甕である。なお、検出した各土坑の詳細については表14にまとめた。

S P301～315

各小穴の平面形状は円形・橢円形・不定形に分けられ、径0.15～0.65mを測る。断面形状はS K303・314が皿状を呈す他は逆台形である。深さは0.05～0.45mを測り、埋土は單一であった。建物を構成するものではなく、また、規模や方向などの規則性は見られない。S P302・304・305・308～315からは古式土師器が出土したが、団化できるものはなかった。なお検出した各小穴の詳細については表15にまとめた。



第17図 SI301・302、SE301、SK301・303・304・309出土遺物実測図



第18図 S K313平・断面図

S D301~321

平面形状は直線に伸びるもの、L字に曲がるものがある。断面形状は逆台形と皿状を呈す。埋土は單一であった。各溝は平面形状、規模、配置などに規則性は見られなかった。

S D301~306・308・309・311~314・316・317からは古式土師器が出土した。出土遺物のうち図化したものはS D307の128である。128は布留式の複合口縁壺である。なお、検出した各溝の詳細については表16・17にまとめた。

遺構に伴わない出土遺物

5層からは古式土師器が出土した。遺物のうち図化したものは129・130である。

129は古式土師器のV様式系壺である。130は古式土師器の高杯で、布留式に比定できる。

表14 第3面土坑一覧表

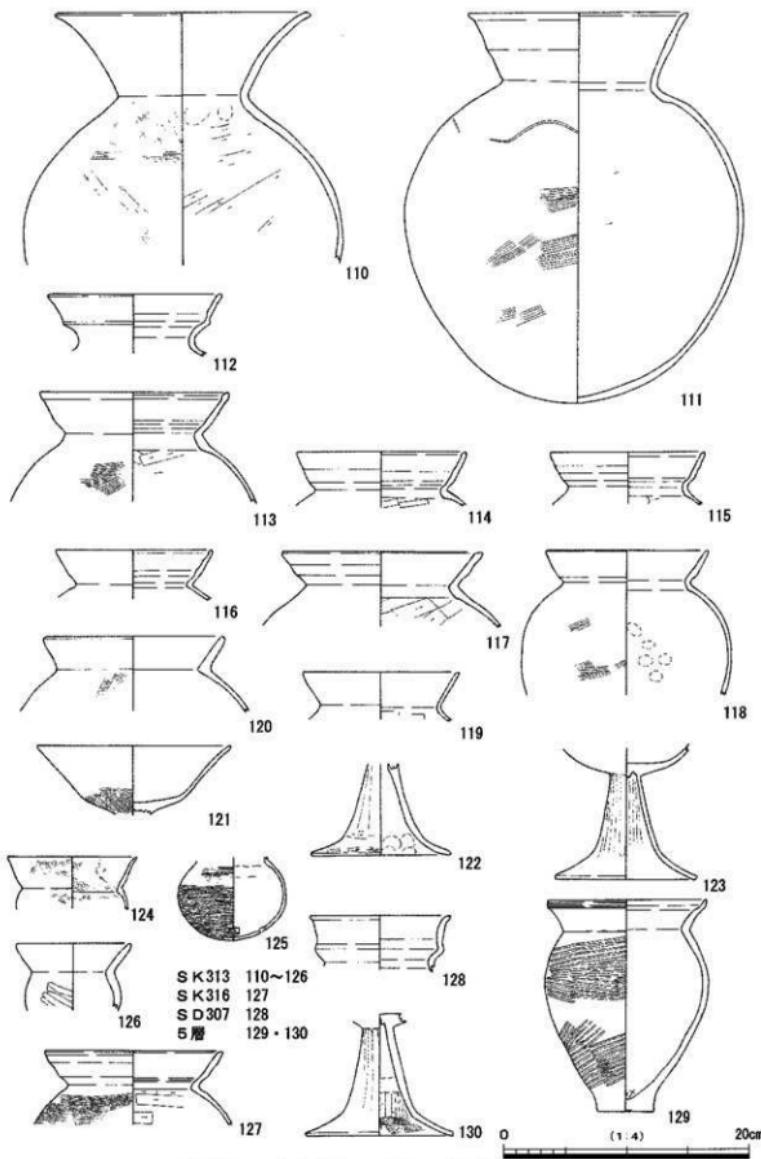
| 遺構番号 | 地区 | 平面形状 | 長径 (m) | 短径 (m) | 径 (m) | 断面形状 | 深さ (m) | 埋土 | 出土遺物 |
|--------|---------|----------------|-----------|-----------|----------|------|-----------|--|-------|
| S K301 | 2 C | 円形 S K301を切る | - | - | 0.8 | 逆台形 | 0.25 | 7.5Y4/3暗オリーブ色粘土 | 古式土師器 |
| S K302 | 2・3 C・D | 楕円形 | 1.75 | 1.4 | - | 逆台形 | 0.15 | 7.5Y4/3暗オリーブ色粘土 | 古式土師器 |
| S K303 | 2 D | 円形 S P303に切られる | - | - | 1.0 | 逆台形 | 0.1 | 7.5Y4/3暗オリーブ色粘土 | 古式土師器 |
| S K304 | 2 D | 椭円形 | 1.8 | 0.7 | - | 逆台形 | 0.1 | 7.5Y4/3暗オリーブ色粘土 | 古式土師器 |
| S K305 | 2 E | 円形 撥乱で切られる | - | - | 0.8 | 逆台形 | 0.15 | 7.5Y4/3暗オリーブ色粘土 | 古式土師器 |
| S K306 | 3 E | 円形 撥乱で切られる | - | - | 1.8 | 逆台形 | 0.1 | 7.5Y4/3暗オリーブ色粘土 | 古式土師器 |
| S K307 | 3 E | 椭円形 | 1.2 | 1.0 | - | 逆台形 | 0.1 | 7.5Y4/3暗オリーブ色粘土 | なし |
| S K308 | 2 E・F | 不定形 | 3.4 | 2.0 | - | 逆台形 | 0.2 | 7.5Y4/3暗オリーブ色粘土 | 古式土師器 |
| S K309 | 3 G | 不定形 | 1.6 | 1.2 | - | 逆台形 | 0.15 | 7.5Y4/3暗オリーブ色粘土 | 古式土師器 |
| S K310 | 2 D・E | 不定形 撥乱で切られる | 4.0 | 1.5 | - | 逆台形 | 0.1 | 7.5Y4/3暗オリーブ色粘土 | なし |
| S K311 | 3 D・E | 不定形 撥乱で切られる | 4.5 | 2.1 | - | 逆台形 | 0.15 | 7.5Y4/3暗オリーブ色粘土 | 古式土師器 |
| S K312 | 2 F | 円形 撥乱で切られる | - | - | 1.1 | 逆台形 | 0.1 | 7.5Y4/3暗オリーブ色粘土 | 古式土師器 |
| S K313 | 3 G・H | 不定形 | 5.0 | 3.5 | - | 逆台形 | 0.4 | 7.5Y4/3暗オリーブ色粘土 58G2/1青黒色細粒砂泥粘土 56A/1緑灰色粘土 | 古式土師器 |
| S K314 | 2 G・H | 不定形 西部は調査区外 | 0.9 | 0.4 | - | 逆台形 | 0.2 | 7.5Y4/3暗オリーブ色粘土 | 古式土師器 |
| S K315 | 3 H・I | 椭円形 | 1.0 | 0.6 | - | 逆台形 | 0.2 | 7.5Y4/3暗オリーブ色粘土 | なし |
| S K316 | 3 H | 椭円形 | 1.3 | 1.0 | - | 逆台形 | 0.25 | 10Y5/1灰白色粘土 10Y2/1黑色細粒シルト 売含む 10Y8/1褐色粘土 10Y2/1黑色細粒シルト 売含む 58A/1暗青灰色粘土 | 古式土師器 |
| S K317 | 4 H | 不定形 | 1.2 | 0.8 | - | 逆台形 | 0.15 | 7.5Y4/3暗オリーブ色粘土 | 古式土師器 |

表15 第3面小穴一覧表

| 遺構番号 | 地区 | 平面形状 | 長径 (m) | 短径 (m) | 径 (m) | 断面形状 | 深さ (m) | 埋土 | 出土遺物 |
|--------|-------|--------------|-----------|-----------|----------|------|-----------|-----------------|-------|
| S P301 | 3 C | 椭円形 | 0.5 | 0.3 | - | 逆台形 | 0.15 | 5Y5/1灰色細粒砂粘土 | なし |
| S P302 | 3 D | 椭円形 | 0.3 | 0.1 | - | 逆台形 | 0.1 | 5Y5/1灰色細粒砂粘土 | 古式土師器 |
| S P303 | 2 D | 円形 S K303を切る | - | - | 0.3 | 直状形 | 0.05 | 5Y5/1灰色細粒砂粘土 | なし |
| S P304 | 3 F | 円形 | - | - | 0.5 | 逆台形 | 0.25 | 5Y5/4オリーブ色粘土 | 古式土師器 |
| S P305 | 3 F | 椭円形 | 0.6 | 0.4 | - | 逆台形 | 0.35 | 5Y5/4オリーブ色粘土 | 古式土師器 |
| S P306 | 3 F | 円形 | - | - | 0.2 | 逆台形 | 0.1 | 5Y5/4オリーブ色粘土 | なし |
| S P307 | 3 F | 円形 | - | - | 0.25 | 逆台形 | 0.3 | 5Y5/4オリーブ色粘土 | なし |
| S P308 | 3 F・G | 椭円形 | 0.4 | 0.3 | - | 逆台形 | 0.45 | 5Y5/4オリーブ色粘土 | 古式土師器 |
| S P309 | 2 F | 椭円形 | 0.7 | 0.4 | - | 逆台形 | 0.1 | 5Y5/1灰色粗粒シルト混粘土 | 古式土師器 |
| S P310 | 2 G | 椭円形 | 0.7 | 0.3 | - | 逆台形 | 0.1 | 5Y5/1灰色粗粒シルト混粘土 | 古式土師器 |
| S P311 | 2 G | 円形 | - | - | 0.15 | 逆台形 | 0.1 | 5Y5/4オリーブ色粘土 | 古式土師器 |
| S P312 | 3 H | 円形 | - | - | 0.18 | 逆台形 | 0.18 | 5Y5/1灰色粘土 | 古式土師器 |
| S P313 | 3 H | 不定形 | 0.6 | 0.2 | - | 逆台形 | 0.15 | 5Y5/1灰色粘土 | 古式土師器 |
| S P314 | 3 H・I | 椭円形 | 0.6 | 0.3 | - | 直状形 | 0.05 | 5Y5/1灰色粘土 | 古式土師器 |
| S P315 | 4 I | 不定形 | 0.6 | 0.3 | - | 逆台形 | 0.15 | 5Y5/1灰色粘土 | 古式土師器 |

表16 第3面溝一覧表(1)

| 遺構番号 | 地区 | 平面形状 | 幅 (m) | 断面形状 | 深さ (m) | 埋土 | 出土遺物 |
|--------|-----------|-----------------------------|-------|------|--------|---------------------|-------|
| S D301 | 3 D | 南北・北西方向に直線に伸びる | 0.2 | 直状形 | 0.05 | 2.5Y4/6オリーブ褐色細粒砂泥粘土 | 古式土師器 |
| S D302 | 3 C・D | 南北・北西方向に直線に伸びる | 0.3 | 直状形 | 0.04 | 2.5Y4/6オリーブ褐色細粒砂泥粘土 | 古式土師器 |
| S D303 | 3・4 C | 南北・北東方向に直線に伸びる | 0.2 | 直状形 | 0.05 | 2.5Y4/6オリーブ褐色細粒砂泥粘土 | なし |
| S D304 | 3 C | 南北・北西方向に直線に伸びる S D303を切る | 0.15 | 逆台形 | 0.08 | 5Y5/6オリーブ色細粒シルト混粘土 | 古式土師器 |
| S D305 | 3 C | 南北・北西方向に直線に伸びる | 0.8 | 逆台形 | 0.4 | 5Y6/1オリーブ色細粒砂泥粘土 | 古式土師器 |
| S D306 | 2 D・E | 南北・北東方向に直線に伸びる | 0.18 | 直状形 | 0.06 | 2.5Y4/6オリーブ褐色細粒砂泥粘土 | なし |
| S D307 | 3 F | 東西方向に直線に伸びる | 0.6 | 逆台形 | 0.18 | 5Y4/3暗オリーブ色細粒砂泥粘土 | 古式土師器 |
| S D308 | 2 F | 東西方向に直線に伸びる | 0.26 | 逆台形 | 0.05 | 2.5Y4/6オリーブ褐色細粒砂泥粘土 | なし |
| S D309 | 2 F・G 3 F | 東西方向に直線に伸びる S D311を切る | 0.9 | 逆台形 | 0.16 | 5Y4/3暗オリーブ色細粒砂泥粘土 | 古式土師器 |



第19図 SK313・316、SD307、5層出土遺物実測図

表17 第3面溝一覧表(2)

| 遺構番号 | 地区 | 平面形状 | 幅(m) | 断面形状 | 深さ(m) | 埋土 | 出土遺物 |
|-------|----------|------------------------------------|------|------|-------|-----------------------|-------|
| SD310 | 2F・G | 南北方向に直線に伸びる SD 309に切られる | 0.55 | 逆台形 | 0.12 | 2.5Y6/1黄灰色細粒砂混粘土 | 古式土師器 |
| SD311 | 2・3F・G | 東西に直線に伸び、内部は北西方向に折れ曲がる SD 309に切られる | 0.42 | 逆台形 | 0.1 | 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒シルト混粘土 | 古式土師器 |
| SD312 | 2G | 東西方向に直線に伸びる | 0.62 | 逆台形 | 0.15 | SY5/4オリーブ色細粒シルト混粘土 | 古式土師器 |
| SD313 | 2G | 南北方向に直線に伸びる | 0.65 | 逆台形 | 0.2 | 2.5Y6/1黄灰色細粒砂混粘土 | なし |
| SD314 | 2H | 東西方向に直線に伸びる | 0.5 | 逆台形 | 0.22 | SY5/4オリーブ色細粒シルト混粘土 | なし |
| SD315 | 3H・I | 南北・北東方向に直線に伸びる | 0.2 | 逆台形 | 0.1 | SY4/4暗オリーブ色細粒砂混粘土 | 古式土師器 |
| SD316 | 3H | 南北方向に直線に伸びる | 0.18 | 逆台形 | 0.1 | SY4/4暗オリーブ色細粒砂混粘土 | なし |
| SD317 | 3H・I | 南北・北東方向に直線に伸びる | 0.26 | 皿状形 | 0.08 | SY4/4暗オリーブ色細粒砂混粘土 | なし |
| SD318 | 3H・I | 南北・北東方向に直線に伸びる | 0.32 | 皿状形 | 0.08 | SY4/4暗オリーブ色細粒砂混粘土 | 古式土師器 |
| SD319 | 3・4H | 南北・北東方向に直線に伸びる SD 320に切られる | 0.4 | 皿状形 | 0.05 | SY4/4暗オリーブ色細粒砂混粘土 | なし |
| SD320 | 3・4G 4II | 南北・北東方向に直線に伸びる SD 319を切る | 0.5 | 逆台形 | 0.2 | SY5/1灰色細粒シルト混粘土 | なし |
| SD321 | 4G | 南北・北東方向に直線に伸びる SD 301に切られる | 0.32 | 皿状形 | 0.1 | SY5/1灰色細粒シルト混粘土 | なし |

表18 出土遺物観察表(11)

| 遺物番号 部品番号 | 遺構 | 器種 | 法量(cm) | 形態・調整等 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|--------------|-------|---------------|-------------------------------|--|----------------------|------------------|----|----|
| 102 | SK301 | 古式土師器 壺 | 口径14.0 | 口縁部は折れ曲がり内凹して伸びる。端部は内側に肥厚し、上面を形成する。口縁部の内面ナデ、外面はヨコナデを施す。内部の内面はハラケズリ、外縁はヨコナデを施す。内面の色はヘラケズリは端部におよんでない。 | 10YR5/3 黄褐色 | 4mm以下の砂粒を多量に含む。 | 良好 | |
| 103 | SK303 | 古式土師器 鉢 | 口径10.8 | 口縁部は内凹する。口縁部は「く」の字に屈曲し内凹しながら外上方へ伸びる。端部は尖り方に丸く終わる。口縁部の内面はヨコナデを施す。体部の内面はヒビナデを施す。体部の内面はヘラミガキ、外面はヨコナデヨコナデを施す。 | 10YR7/6 明黃褐色 | 1mm以下の砂粒を含む。 | 良好 | |
| 104 | SK304 | 古式土師器 壺 | 口径13.6 | 口縁部は「く」の字に屈曲する。端部は内上方へつまみ出し面を形成する。口縁部の内面ナデヨコナデを施す。体部の内面はヒビナデ、外面はハケナデを施す。外面に黒斑がある。 | 10YR5/1 褐灰色 | 2.5mm以下の砂粒を少量含む。 | 良好 | |
| 105 | SK304 | 古式土師器 壺 | 口径14.8 | 口縁部は「く」の字に屈曲したのち外反する。端部は両面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヒラナデ、外面はハケナデを施す。口縁部の外面に粘土合物の跡と黒斑がある。 | 10YR5/1 褐灰色 | 3mm以下の砂粒を含む。 | 良好 | |
| 106 | SK309 | 古式土師器 製陶工具 | 底径3.2 | 底部は「く」の字に聞く。体部の内面はヘラナデ、外縁は左上部のタタキのちユビナデを施す。底部の外縁はヒビナデを施し、底面にはヘラ・工具の痕跡がある。器壁は非常に薄く、一次焼成をうける。 | 10YR7/4 4mm以下の黄褐色 | 4mm以下の砂粒を多量に含む。 | 良好 | |
| 107 | SK309 | 古式土師器 壺 | 口径17.0 体部最大径24.0 | 口縁部は折れ曲がり内凹して伸びる。端部は内側に肥厚し、上面を形成する。口縁部の内面ナデ、外面はヨコナデを施す。体部の内面は上面にヘラケズリ、下位ニビナデを施す。体部の外縁は左方と左上部のハケナデを施した後、横方向のハケナデを施す。体部の外面上位にはヘラによる網突文がある。外面上には全件的に煤が付着。 | 10YR5/1 褐灰色 | 3mm以下の砂粒を含む。 | 良好 | |
| 108 | SK309 | 古式土師器 壺 | 口径13.8 | 口縁部は折れ曲がり内凹して伸びる。端部は内側に肥厚し、上面を形成する。口縁部の内面ナデ、外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外縁はヨコナデを施す。 | 10YR5/1 褐灰色 | 2mm以下の砂粒を含む。 | 良好 | |
| 109 | SK309 | 古式土師器 壺 | 口径14.0 | 口縁部は折れ曲がり内凹して伸びる。端部は内側に肥厚し、上面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヒラケズリ、外面はナデを施す。外面上には煤が付着。 | 10YR5/1 褐灰色 | 1mm以下の砂粒を多量に含む。 | 良好 | |
| S 1 17 | SK309 | 唐銅大型火石斧 | | 刃部は両刃である。断面は舟形を呈す。 | | | | |
| 110 | SK313 | 古式土師器 壺 | 口径20.0 | 口縁部は外反する。口縁部の外側面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリとユビナデ、外面はヘカナデを施す。 | SYR7/8 褐色 | 3mmの砂粒を含む。 | 良好 | |
| 111 17 | SK313 | 古式土師器 壺 | 口径17.4 器高31.9 体部最大径27.3 | 口縁部は球形である。口縁部は外反する。端部は尖りぎみで丸く終わる。口縁部の内面はヨコナデを施す。体部の内面はヒラケズリのちユビナデ、外面はハケナデを施す。体部の外面上位にはヘラ・工具による波状文を施している。 | 7.5YR5/2 灰褐色 | 3mm以下の砂粒を含む。 | 良好 | |

表19 出土遺物観察表(12)

| 遺物番号 図版番号 | 遺構 | 器種 | 法量 (cm) | 形態・調査等 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|--------------|--------|----------------|--|---|-----------------|--------------------------|----|----|
| 112 17 | S K313 | 古式土師器 複合口縁壺 | 口径13.6 | 口縁部は外反したち段を有し、さらに外上方へ外反する。端部は丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。 | 10YR6/6 明黄褐色 | 2 mmの砂粒 を含む。 | 良好 | |
| 113 | S K313 | 古式土師器 壺 | 口径15.0 | 口縁部は内湾する。端部は肥厚し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面はオケナデを施す。外山には黒斑がある。 | 10YR4/2 灰黄褐色 | 2 mm以下の 砂粒を含む。 | 良好 | |
| 114 | S K313 | 古式土師器 壺 | 口径13.6 | 口縁部は内湾する。端部は肥厚し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリを施す。外面には揉が付着している。 | 7.5YR6/6 橙色 | 3.5 mm以下の 砂粒を含む。 | 良好 | |
| 115 | S K313 | 古式土師器 壺 | 口径12.4 | 口縁部は内湾する。端部は肥厚し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリを施す。外面には揉が付着している。 | 10YR4/2 灰黄褐色 | 1.5 mmの砂粒 を含む。 | 良好 | |
| 116 | S K313 | 古式土師器 壺 | 口径12.4 | 口縁部は内湾する。端部は肥厚し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリを施す。外山には揉が付着している。 | 10YR4/2 灰黄褐色 | 2 mmの砂粒 を含む。 | 良好 | |
| 117 | S K313 | 古式土師器 壺 | 口径15.0 | 口縁部は内湾する。端部は肥厚し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面はユビイ褐色を施す。 | 10YR5/1 褐色 | 3 mm以下の 砂粒を多量に 含む。 | 良好 | |
| 118 | S K313 | 古式土師器 壺 | 口径12.8 | 口縁部は内湾する。端部は肥厚し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリとユビナデ、外山灰黄褐色を施す。外山には揉が付着している。 | 10YR4/2 灰黄褐色 | 3 mm以下の 砂粒を含む。 | 良好 | |
| 119 | S K313 | 古式土師器 壺 | 口径12.6 | 口縁部は内湾する。端部は丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。外山には揉が付着している。 | 7.5YR6/6 橙色 | 1.5 mmの砂粒 を含む。 | 良好 | |
| 120 | S K313 | 古式土師器 壺 | 口径14.0 | 口縁部は「く」の字に組曲し外上方へ伸びる。端部は丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面は褐色へラケズリ、外山にはオケナデを施す。 | 7.5YR7/8 褐色 | 3 mm以下の 砂粒を多量に 含む。 | 良好 | |
| 121 | S K313 | 古式土師器 高杯 | 口径15.6 | 口縁部は外反する。端部は丸く終わる。杯部の内面はヨコナデ、外山の上辺はヨコナデ、下辺はオケナデを施す。 | 7.5YR6/6 橙色 | 3 mmの砂粒 を含む。 | 良好 | |
| 122 | S K313 | 古式土師器 高杯 | 口径11.0 | 脚部は直線的に外下方に広がる筒状である。脚部は脚部がらゆるやかに曲がり「く」の字に広がる。端部は丸く終わる。脚部の内外面は表面を整純しており溝溝は不明である。脚部の内面はユビナデを施し、しばり目がある。外面はオケナデを施す。脚部の内外面はユビナデ、外山にはオケナデを施す。 | 5YR6/8 褐色 | 2 mm以下の 砂粒を含む。 | 良好 | |
| 123 | S K313 | 古式土師器 高杯 | 口径11.2 | 脚部は直線的に外下方に広がる筒状である。脚部は脚部がらゆるやかに曲がり「く」の字に広がる。端部は丸く終わる。脚部の内外面は表面を整純しており溝溝は不明である。脚部の内面はユビナデを施し、しばり目がある。外面はオケナデを施す。脚部の内外面はユビナデを施す。 | 7.5YR7/6 褐色 | 4 mm以下の 砂粒を多量に 含む。 | 良好 | |
| 124 | S K313 | 古式土師器 小型丸底壺 | 口径10.4 | 体部は横長の球形になると思われる。口縁部は直線し内湾する。端部は丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデと体部の内外面はオケナデを施す。体部の内面には粘土質の痕跡がある。 | 7.5YR7/3 褐色 | 1 mm程度の 砂粒を含む。 | 良好 | |
| 125 17 | S K313 | 古式土師器 小型丸底壺 | 体高 最大 8.7 | 体部は横長の球形である。体部の内面はナデ、外山の上辺はオケナデを施す。体部の内面はヨコナデを施す。体部の内面には粘土質の痕跡がある。 | 7.5YR6/6 褐色 | 3 mm以下の 砂粒を少量 含む。 | 良好 | |
| 126 | S K313 | 古式土師器 小型丸底壺 | 口径9.2 | 口縁部は直線し内湾ぎみ外上方に伸びる。端部は丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はユビナデ、外山にはオケナデを施す。外山には黒斑がある。 | 10YR7/8 黄橙色 | 2 mm以下の 砂粒を含む。 | 良好 | |
| 127 | S K316 | 古式土師器 壺 | 口径14.2 | 口縁部は内湾する。端部は肥厚し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面はオケナデを施す。口縁部の内面には黒斑がある。口縁部と体部との外側には揉が付着している。 | 7.5YR5/3 褐色 | 2.5 mm以下の 砂粒を含む。 | 良好 | |
| 128 | S D307 | 古式土師器 複合口縁壺 | 口径11.4 | 口縁部は外反したち段を有し、さらに外上方へ外反する。端部は丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリを施す。 | 7.5YR5/1 褐色 | 3 mm以下の 砂粒を少量 含む。 | 良好 | |
| 129 17 | 5層 | 古式土師器 壺 | 口径12.9 高17.3 底部径4.6 体高 最大 13.3 | 底部は突出する上げ底。体部は縦長。口縁部は「く」の字に開曲し、外反する。脚部は上方へつまみ出し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面にはナデ、外山の右辺にタキナキを施す。底部の内面には「ラ」字状工具による痕跡がある。底部の外山はユビナデを施す。体部の外山には粘土質の痕跡と黒斑がある。 | 10YR4/2 灰黄褐色 | 4 mm以下の 砂粒を含む。 | 良好 | |
| 130 17 | 5層 | 古式土師器 高杯 | 口径11.8 | 脚部は直線的に外下方に広がる筒状である。脚部は脚部がらゆるやかに曲がり「く」の字に広がる。端部は面を形成する。脚部の内面はユビナデとヘラケズリ、外山はオケナデを施す。脚部の内面はヨコナデ、外山はユビナデを施す。 | 7.5YR6/6 褐色 | 2 mm以下の 砂粒を含む。 | 良好 | |

第3章　まとめ

今回の調査では古墳時代初頭～近世までの遺構が検出された。以下では各時代の遺構および遺物について検出面毎に記載する。

第3面（古墳時代初頭～前期[庄内式古相～布留式中相]）

古墳時代初頭[庄内式古相]には調査地北部で検出した堅穴住居2棟(S I 301・302)がある。南部には同時期の遺構の検出がないことから、同時期の居住域は北部に広がっている可能性が高いと考えられる。

古墳時代前期[布留式古相(布留I)]には南東部で井戸(S E 301)を、北部で土坑(S K 303・304)を検出したことから、同時期の居住域は本調査地の周辺に存在していたと推測できる。

北西側約100m地点の研究会第71次調査(KH2006-71)では、13区の第5層から布留式古相の土器が出土しており(樋口他2007)、北西側約200m地点のセンターの調査では、生産域が検出されている(亀井他2007)。このことから、同時期の居住域の北西への広がりは、東西に伸びる府道加美旭町・久宝寺線から久宝寺線地内の南部あたりまでであったと推測できる。東部への広がりは、調査例が少なく不明である。なお、本調査地の東部の研究会第6次調査(KH90-6)では、布留式古相の堅穴住居が検出され、さらに庄内式古相の井戸も検出しており、古墳時代初頭～前期にかけての居住域の存在が明らかになっている(原田1993)。また、研究会第35次調査(KH2000-35)でも、土坑などが検出されている(森本2002)。この2件の調査地と本調査地との距離は約400mを測り、かなり離れていることから一連の居住域と断定することは難しく、別の居住域があったと考えるのが妥当であろう。

布留式中相[布留II～III]では北部で土坑(S K 301)を、南部で土坑(S K 309・313・316)を検出した。S K 309・313からは完形近くまで復元可能な土器が出土している状況から、同時期の居住域が本調査地の周辺に存在していたと推測できる。

第2面（古墳時代前期[布留式古相～中相]）

古墳時代前期[布留式古相～中相]には、調査地全域で疎らに遺構を検出した。このうち、河川(N R 201)は調査地の南端で検出した。東西方向に流路をもち、古墳時代前期の布留式古相を中心とし、中相までの遺物が多くコンテナ箱約10箱程度廃棄されていた。出土遺物から布留式古相に流れはじめ、中相に埋没したと考えられる。

N R 201の廃絶時期の布留式古相には土坑を数基と溝1条を検出したのみで、遺構の数が減り、居住域は廃絶したと見られる。

第1面（奈良～平安時代、鎌倉時代、近世）

S E 101は近世の農耕に関係する灌漑用の井戸の可能性があり、また、S D 101は中世の農耕に関係する灌漑用の溝の可能性がある。さらに、S D 102～108は奈良時代から平安時代にかけての、農耕に関連した素掘りの溝と推測される。このことから、奈良時代以降近世までは本調査地には生産域が広がっていたと推測される。

N R 201内出土の環形付木製品について

今回出土した環形付木製品(以下本木製品と記す)の類例には、大阪府堺市下田遺跡、奈良県宇陀市戸石・辰巳前遺跡、滋賀県東近江市斗西遺跡がある(藤田1996・鈴木2000)。4例とも古墳時代のものであり、本木製品と時期は同じである。

本木製品は多くの土器が廃棄された河川からの出土で、出土状況が似ている例には下田遺跡がある。下田遺跡の環形付木製品の出土状況は、古墳時代前期[布留式期]の大溝の中から、多量の古式上部器や木器などとともに出土した(西村1996)。

下田遺跡出土の環形付木製品は「軸部は片手で掴む「握り」の部分と考えて良いだろう。木製品の軸の先端部に別の部材がついて完成品となる。(中略)あえて類品を推測すれば团扇か塵尾ないしは払子の類が挙げられる。」と言う考え方方が報告されている(藤田1996)。

本木製品は軸の先端がないこと以外は、下田遺跡出土のものに形状が似ていることから、团扇か塵尾ないしは払子の可能性があると考えられる。

参考文献

- ・原田 昌則 1993「III 久宝寺遺跡第6次調査(KH90-6)」(財)八尾市文化財調査研究会報告37 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・藤田 憲司 1996「第3章 戒儀具(塵尾)について。『堺市下田所在 下田遺跡』-都市計画道路常盤浜寺線建設に伴う発掘調査報告書- (第二分冊)第III部 考察篇 (財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第18集 (財)大阪府文化財調査研究センター
- ・西村 歩他 1996『堺市下田所在 下田遺跡』-都市計画道路常盤浜寺線建設に伴う発掘調査報告書- (財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第18集 (財)大阪府文化財調査研究センター
- ・鈴木 審明 2000 2000年度春季特別展『權威の象徴』-古墳時代の戒儀具- 横原考古学研究所付属博物館特別展図録第53冊 奈良県立横原考古学研究所付属博物館
- ・森本めぐみ 2001「3.久宝寺遺跡第32次調査(KH99-32)」「平成12年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・森本めぐみ 2002「I.久宝寺遺跡第35次調査(KH2000-35)」「八尾市立埋蔵文化財調査センター報告3」八尾市教育委員会 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・龜井 啓他 2007『八尾市 久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書VII-寝屋川流域下水道竜華水みらいセンター水処理施設等建設事業に伴う発掘調査他-』(財)大阪府文化財センター調査報告書 第156集 財團法人大阪府文化財センター
- ・鴫川 薫 2007『久宝寺遺跡第71次調査』大阪府工業用水道改良事業配水管布設工事Φ400(八尾中央線分歧)に伴う埋蔵文化財発掘調査 (財)八尾市文化財調査研究会報告107 (財)八尾市文化財調査研究会

図 版



調査地周辺【中央は生駒山地】(西から)



調査前(南から)

図版
2



北区 第1面全景(北から)



南区 第1面全景(北から)



北区 第2面全景(北から)



南区 第2面全景(北から)

図版 4



北区 第3面全景(北から)



南区 第3面全景(北から)



S E201(南から)



S K201(南から)

図版
6



N R201(東から)



N R201遺物出土状況(南から)



N R201掘削状況(北から)



N R201環形付木製品出土状況(西から)



環形付木製品出土状況(西から)

図版 8



S I 301(北西から)



S I 302(北西から)



S E 301(西から)



S E 301遺物出土状況(西から)



第3面掘削状況(南から)



S K313(南から)



5



7



9



10



14



16



17

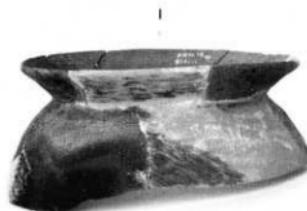
SK201(5・6)、NR201(7・9・10・14・16・17)出土遺物

圖版 12





44



41



45



46



47



48



56

NR201出土遺物

圖版
14



1



58



57



60



68



69



70



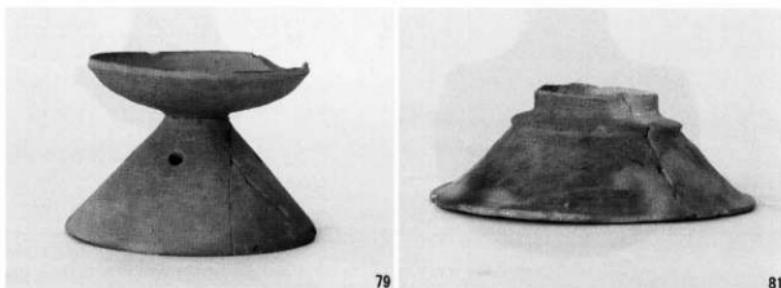
71



77



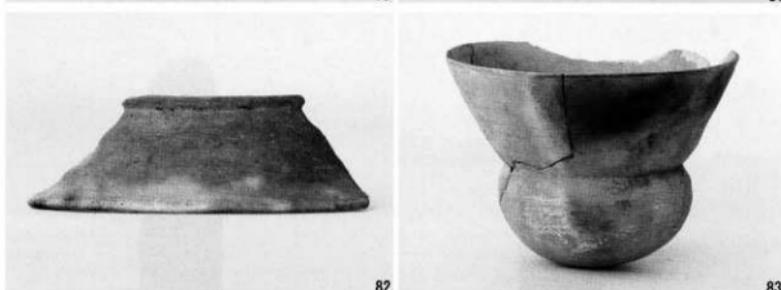
78



79



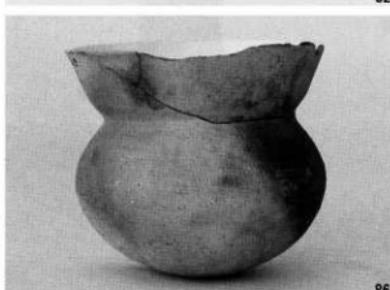
80



81



82



83



84

N R201出土遺物

図版 16



A面



右侧面



B面

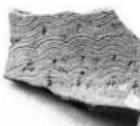


左侧面
W1

NR201出土遺物



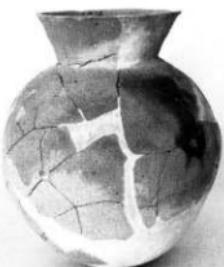
97



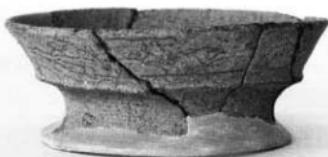
98



99



111



112



125



129



130



A面



B面



側面

刃部
S 1

S 1302(97)、SE301(98・99)、SK309(S 1)、SK313(111・112・125)、5層(129・130)出土遺物

II 久宝寺遺跡第14次調査 (K H92-14)

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市神武町190-1、及び大阪市平野区加美東7丁目1-1で実施した店舗付共同住宅建設に伴う久宝寺遺跡第14次調査(KH92-14)の発掘調査報告書である。
1. 本調査は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1. 調査は当調査研究会 坪田真一が担当した。
1. 現地調査は、平成4年5月26日に着手し、同年8月10日に終了した。調査面積は約660m²である。
1. 現地調査には、垣内洋平・坂下 学・能勢直樹・濱田千年・山内千恵子の参加を得た。
1. 内業整理は下記が参加し、現地調査終了後に着手して平成20年8月31日をもって終了した。
遺物復元-岩本順子・垣内・坂下・都築聰子・能勢・濱田
遺物実測-田島和恵・山内
遺物トレース-市森千恵子・村井俊子
遺構デジタルトレース-鈴木裕治・坪田
遺物写真撮影-垣内
その他-梶本潤二・田島宣子
1. 本書の執筆及び編集は坪田が行った。

本文目次

| | |
|-----------------------|----|
| 第1章 はじめに..... | 35 |
| 第2章 調査概要..... | 36 |
| 第1節 調査方法..... | 36 |
| 第2節 基本層序..... | 36 |
| 第3節 検出遺構と出土遺物の概要..... | 37 |
| 第3章 まとめ..... | 73 |

挿図目次

| | | | |
|---------------------------|----|------------------------------|----|
| 第1図 調査地位置図..... | 35 | 第24図 S E 303平断面図..... | 54 |
| 第2図 地区割図..... | 36 | 第25図 S E 303上層出土遺物..... | 55 |
| 第3図 基本層序..... | 37 | 第26図 S E 303下層出土遺物..... | 56 |
| 第4図 第1面平面図..... | 38 | 第27図 S E 304平断面図..... | 57 |
| 第5図 S B101平断面図..... | 39 | 第28図 S E 305~307出土遺物..... | 58 |
| 第6図 第2面平面図..... | 40 | 第29図 S E 305平断面図..... | 59 |
| 第7図 S I 201平断面図..... | 41 | 第30図 S E 306平断面図..... | 59 |
| 第8図 S I 201出土遺物..... | 42 | 第31図 S E 307平断面図..... | 60 |
| 第9図 S E 201出土遺物..... | 42 | 第32図 S E 308平断面図..... | 60 |
| 第10図 S E 201平断面図..... | 43 | 第33図 S E 309平断面図..... | 60 |
| 第11図 S E 202平断面図..... | 44 | 第34図 S E 309・310出土遺物..... | 61 |
| 第12図 S K206平断面図..... | 44 | 第35図 S E 310平断面図..... | 62 |
| 第13図 S E 202出土遺物..... | 45 | 第36図 S E 311平断面図..... | 63 |
| 第14図 S K206・207出土遺物..... | 45 | 第37図 S E 311出土遺物..... | 64 |
| 第15図 第3面平面図..... | 47 | 第38図 S E 312平断面図..... | 65 |
| 第16図 S I 301~304平断面図..... | 49 | 第39図 S E 312出土遺物..... | 65 |
| 第17図 S I 301~304出土遺物..... | 50 | 第40図 S K309~311・314出土遺物..... | 66 |
| 第18図 S B301平断面図..... | 50 | 第41図 S K312平断面図..... | 67 |
| 第19図 S B302平断面図..... | 51 | 第42図 S K312出土遺物①..... | 68 |
| 第20図 S E 301出土遺物..... | 52 | 第43図 S K312出土遺物②..... | 69 |
| 第21図 S E 301平断面図..... | 53 | 第44図 S D301出土遺物..... | 71 |
| 第22図 S E 302平断面図..... | 53 | 第45図 S D322出土遺物..... | 73 |
| 第23図 S E 302出土遺物..... | 53 | | |

図版目次

- 図版1 調査地周辺空中写真
- 図版2 東区第1面(南から) S B101(南から)
- 図版3 西区第2面(北から)
S E201(南から) S E202(南西から)
- 図版4 S I201(南から)
同K1(南から) 同遺物出土状況(北西から)
- 図版5 西区第3面(北から) 西区第3面(南から)
- 図版6 S I301~304(西から) 同上(南から)
- 図版7 S B301(北東から) S E301遺物出土状況(南東から)
S E303上層遺物出土状況(北から) S E303(南から)
S E303完掘(西から) S E305(北西から)
- 図版8 S E306(北から) S E311遺物出土状況(南から)
S E311木器(153~155)出土状況(北から) S E312(北から)
S D301北部遺物出土状況(南西から) S D311中部遺物出土状況(南西から)
- 図版9 S K312(南東から)
同上(北東から) 同細部(東から)
S K314(南東から) S P338(南西から)
- 図版10 出土遺物 S I201
- 図版11 出土遺物 S I201、S E202、S I301
- 図版12 出土遺物 S E301、S E302、S E303
- 図版13 出土遺物 S E303
- 図版14 出土遺物 S E303、S E305
- 図版15 出土遺物 S E305、S E306、S E307、S E309
- 図版16 出土遺物 S E309、S E310
- 図版17 出土遺物 S E311、S E312、S K310、S K311
- 図版18 出土遺物 S K314、S K312
- 図版19 出土遺物 S K312
- 図版20 出土遺物 S K312、S D301
- 図版21 出土遺物 S D301、S D322
- 図版22 出土遺物 S E301、S E305、S E311

第1章 はじめに

久宝寺遺跡は八尾市の西端に位置し、現在の行政区画によると、八尾市内では北久宝寺1～3、久宝寺1～6、西久宝寺、南久宝寺1～3、神武町、北龜井町1～3、龍華町1・2、渋川町1～7丁目がその範囲となっており、さらに西の大阪市域・北の東大阪市域に広がっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川の左岸にあたり、同地形上で南側に跡部遺跡・龜井遺跡・太子堂遺跡が存在する。なお西側の大阪市域では加美遺跡として調査が実施されているが、両遺跡は同一の遺跡として捉えられている。

当遺跡発見の契機は、昭和10年に八尾市久宝寺5丁目で行われた道路工事の際に、弥生土器・土師器・丸木船の残片が出土したことによる。昭和48年度には、大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センターによる近畿自動車道天理～吹田線関連の総延長13.5kmに及ぶ発掘調査が開始され、このほぼ中位に位置する久宝寺遺跡は、北地区・南地区に分割され、昭和55年度から昭和61年度にわたって調査が実施された。また、東大阪市文化財協会・八尾市教育委員会・当調査研究会においても多次にわたる発掘調査が実施されている。これらの調査成果から、当遺跡は縄文時代晚期～近世にわたる遺跡であることが確認されている。

このような情勢下の平成4年、八尾市神武町190-1における店舗付き共同住宅建築工事の届出書が、八尾市教育委員会文化財課に提出された。これを受けた同文化財課では、当該地が周知の遺跡範囲内にあたることから、平成4年2月17日に遺構確認調査を実施した^{註1}。その結果、古墳時代前期の遺構・遺物包含層が確認され、同文化財課では発掘調査が必要であると判断し、事業者にその旨を通知した。そして、発掘調査を実施することが両者で合意され、調査にあたっては、事業者・文化財課・当調査研究会の三者協定により、当調査研究会が主体となって実施することになった。



第1図 調査地位置図

第2章 調査概要

第1節 調査方法

今回の調査は店舗付共同住宅建設に伴う調査で、当調査研究会が久宝寺遺跡内で実施した第14次調査(KH93-14)にあたる。

調査区平面形は西辺・南辺がほぼ直角を成す台形に近い不整形を呈している。

調査に当たっては、掘削排土処理の都合上、調査区を東西に二分割し、西区から調査を行い、埋め戻し後に東区の調査を実施した。なお調査地は大阪市と八尾市に跨っており、概ね西区が大阪市域、東区が八尾市域となる。また調査区の西・北・東辺には簡易矢板による土留めが施されたため、周囲に幅約50cmの畦を残しての調査となった。

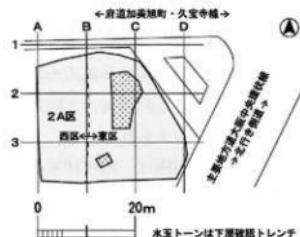
調査は、西区では地表下約1.6mまで、東区では約1.7mまでを機械掘削とし、以下の約0.5~0.6mを対象として人力掘削により実施した。また、下層確認調査として東区の北部・南部に2か所のトレンチを設定し、機械・人力掘削併用により平面・断面の観察を行った。

地区割については、調査区平面形に合わせて10m方眼を任意に設定した。そして南北ラインにアルファベット(西からA~D)、東西ラインに数字(1~3)を冠し、10m四方の地区名は北西交点のポイント(1 A~3 C)に代表させた。なお現地における平板平面図と1/2500地形図との合成によると、この南北ラインは座標北から西に約0.5度振っている。

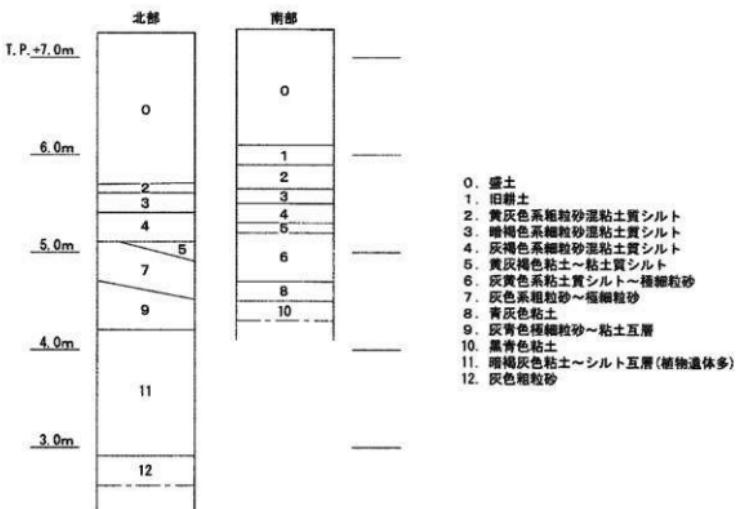
調査で使用した標高値の基準は、調査地の南西約550mに所在する大阪市立加美南部小学校内の水準点(T.P.+7.08m)より移動した。

第2節 基本層序

調査地の現地表面はT.P.+7.2~7.3mを測る。第0層は盛土で、層厚1.2~1.5m。第1層は旧耕土で、北部では見られなかった。第2層の粘土質シルトは、北部ほど砂質優勢となり細粒砂層となっている。第3層は古墳時代初頭~前期の土器を多量に含む包含層で、層厚10~20cmを測る。第4層も同様の遺物包含層で、層厚20~30cmを測り、西部ほど砂粒の含有が少なくなっている。中央部~南部では上面に部分的に薄く灰褐色細粒砂の堆積が見られた。第3層上面が第1面、第4層上面が第2面である。第5層は南部を中心に確認された。第6層は、南部ほど層厚が厚く、北部では第7層の砂層が隆起しているため見られない。第7層は北部から北東部でのみ見られた流水層と考えられる砂層である。第5~7層の上面が第3面である。第8~10層は一連の土層と考えられ、西部では粘土、東部では粘土質シルト~極細粒砂となっている。下層確認調査では第9層上面・第11層上面で精査を行ったが、遺構は検出されず、また第5層以下からは遺物は出土しなかった。



第2図 地区割り図



第3図 基本層序

第3節 検出遺構と出土遺物

調査では第1～3面の3面を確認した。

〈第1面(T.P.+5.6～5.7m)〉

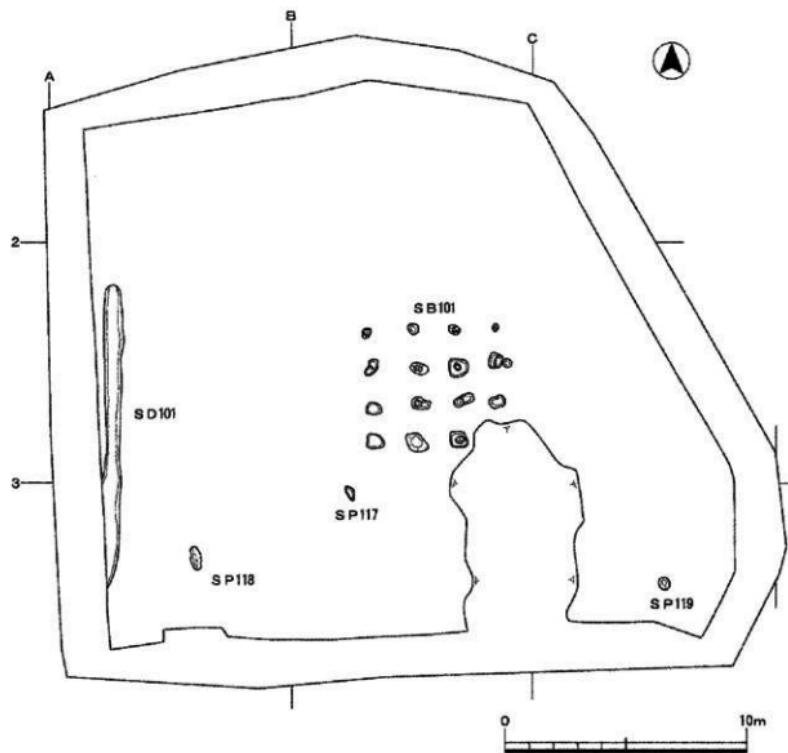
古墳時代前期までの遺物包含層である第4層上面で、掘立柱建物1棟(SB101)、溝1条(SD101)、ピット3個(SP117～119)を検出した。SD101から飛鳥～奈良時代に比定される須恵器片が出土しており、これを第1面の遺構の時期として捉えておきたい。

SB101

調査区中央の2B区で検出した総柱の掘立柱建物で、SP101～116で構成され、南東角の柱穴は擾乱により削平されている。検出面のレベルはT.P.+5.6～5.7mを測り、規模は南北3間(約4.7m:柱間約1.6m)×東西3間(約5.3m:柱間約1.8m)で、主軸は西-約2.0°～北である。柱穴は平面が隅丸方形を成すもの(SP107・115)もあるが、不定形が多い。規模は直径30～80cmを測り、深さは内部のSP106・107・110・111が30～45cmと深くなっている、外周のものは5～33cmと浅い。なおいずれにも柱根は遺存していない。遺物はSP103・108・110・112・115から庄内式・布留式土器の細片が出土している。

SD101

調査区西部2～3A区で検出した南北方向に直線的に伸びる溝で、検出長12.5m・幅50～80cm・深さ約10cmを測る。断面皿状を成し、埋土は灰黄色細粒砂混粘土質シルトの単層である。遺物は飛鳥～奈良時代に比定される須恵器片が出土している。他に鉄錆の塊が1点出土しているが詳細は不明である。



第4図 第1面平面図

SP117~119

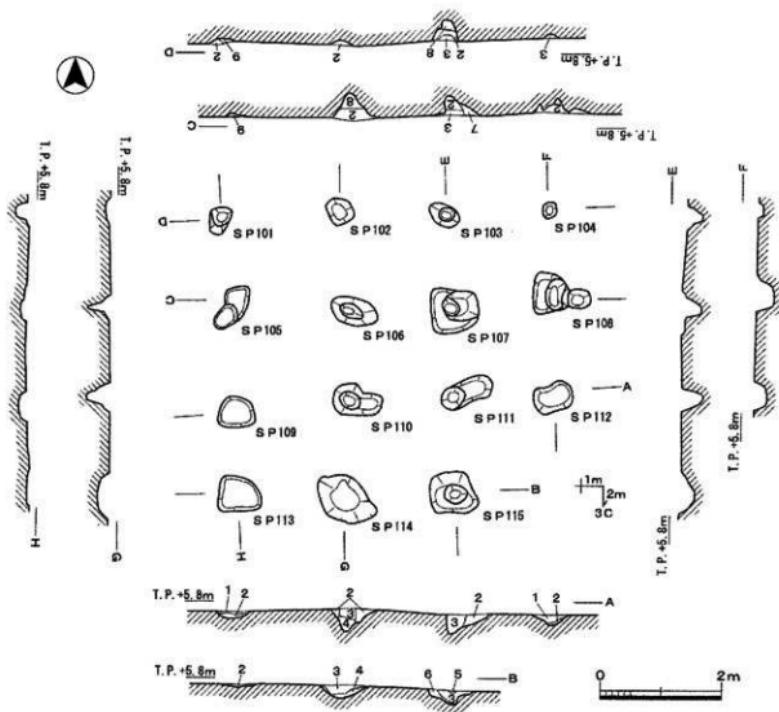
SP117・118は3A・B区で検出したもので、深さ5cm程度を測る。埋土はSD101と同じであり、同様の溝の残欠と思われる。遺物は出土していない。SP119は3C区に位置し、平面形は直径約20cmの円形を成す。深さ約30cmを測り、埋土は黄灰褐色細粒砂混粘土質シルトである。SB101と同様の建物関連のピットと考えられる。布留式土器の細片が出土している。

(第2面(T.P.+5.4~5.5m))

第5層上面で、竪穴住居1棟(SI201)、井戸2基(SE201・202)、土坑8基(SK201~208)、溝2条(SD201・202)、ピット5個(SP201~205)を検出した。これらの遺構の時期は出土遺物から布留式期前半と考えられる。

SI201

調査区南西部の3A区で検出した竪穴住居である。平面形は方形を成し、主軸は西-約6.5° -



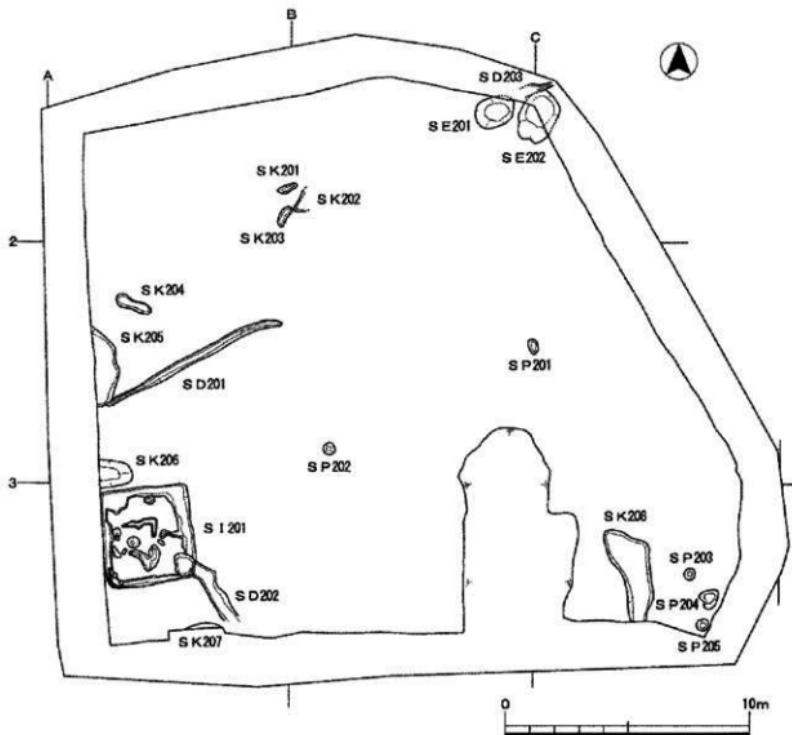
1. 淡灰黄色細粒砂混シルト
2. 黄灰褐色細粒砂混粘土質シルト
3. 青灰色細粒砂混シルト質粘土

4. 灰黄色細粒砂混シルト質粘土
5. 暗灰褐色細粒砂混粘土質シルト
6. 暗灰色細粒砂混粘土

7. 黄灰色細粒砂混シルト
8. 暗灰色粘土質シルト
9. 暗灰褐色粘土質シルト

第5図 S B101平面図

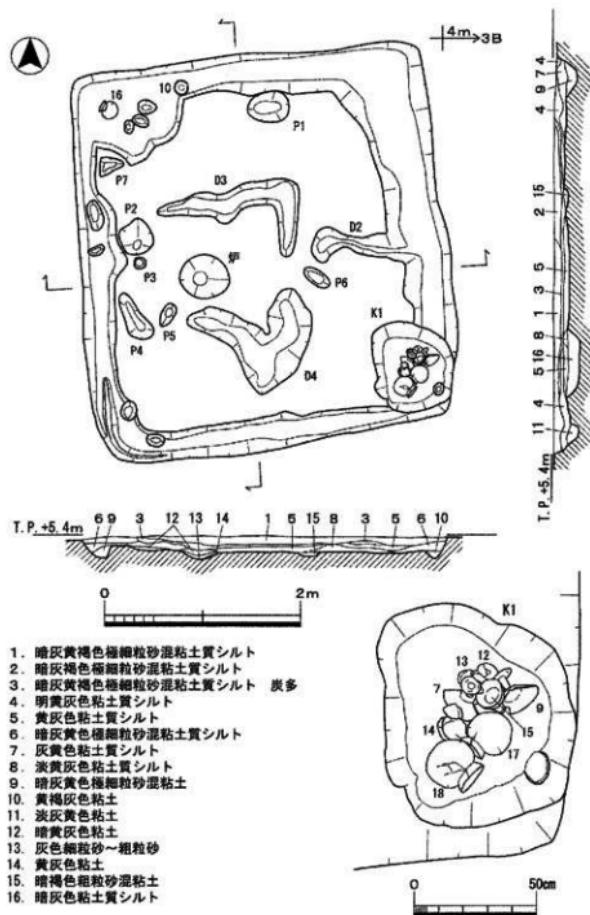
北である。規模は南北約4.0m・東西約3.7mを測る。検出面のレベルは約T.P.+5.35m、床面のレベルは約T.P.+5.25mを測る。床面では壁溝の他、炉、土坑1基(K1)、ピット7個(P1~7)、溝3条(D2~4)を検出した。なお一般的な四本柱の竪穴住居にみられるような主柱穴は認められず、上屋構造は不明である。炉は中央やや西に位置する平面円形の土坑である。規模は50×45cm・深さ10cmで断面皿状を呈し、底部には全面に煤が付着する。また炉の周囲から南東角のK1にかけての床面には砂が敷きめられた状況が見られ、この砂はD3やP3~6の埋土に及んでいる。壁溝は全周しており、幅25~40cm・深さ5~10cmを測る。西壁溝内底部の数箇所には小さな窪みが見られた。D2は東壁溝中央から内側に伸びる溝で、深さ約10cmを測り、断面逆台形で埋土は暗灰色粘土質シルトである。D3・4はL字型を成し、炉を囲む状況である。埋土はD3が暗褐色粗粒砂混粘土、D4



第6図 第2面平面図

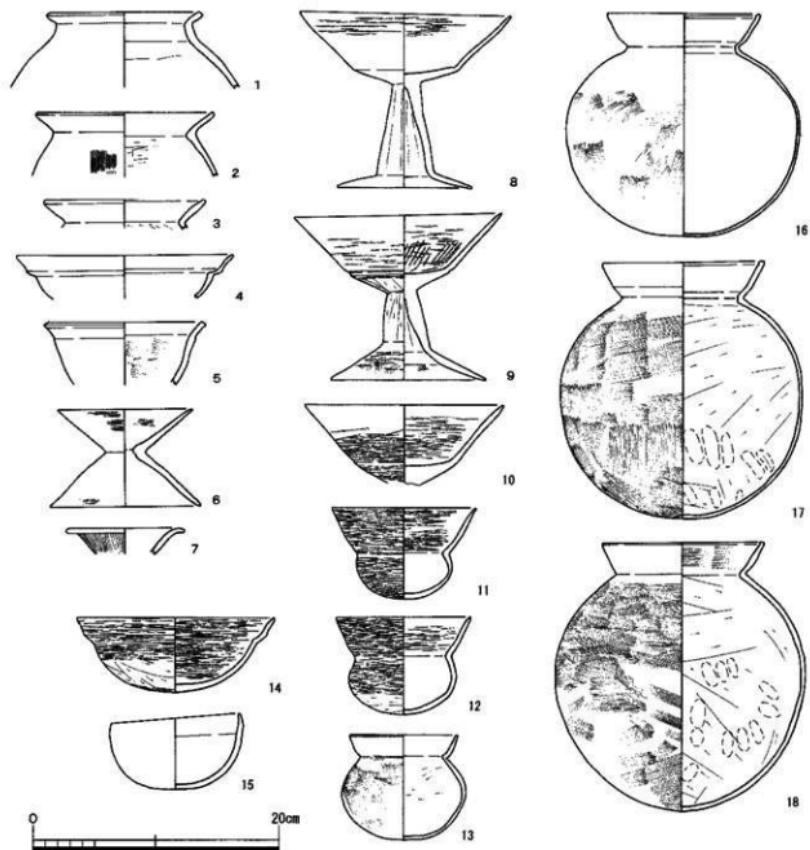
が暗灰色粘土質シルトである。ピットはP2～5については位置関係から見てD3・4と同様、炉に付随する遺構と捉えられる。埋土はP2・7が暗褐色粘土質シルト、他はD3と同じく暗褐色粗粒砂混粘土である。K1は南東角の壁溝と重複し、規模は80×90cm・深さ約25cmを測る。埋土は淡灰色粘土質シルトである。底部からは完形の土器9点(壺2・高杯2・小形丸底壺3・小形鉢2)がまとまって出土しており、埋納されたものと思われる。

遺物は1～18を図化した。1～7は住居埋土、8・9・11～15・17・18はK1、10・16は北西部壁溝内の出土である。1～3は壺である。1は形態に四国系の特徴を持つ。2・3は庄内式壺である。2は肩部のタタキがほぼ垂直方向に施される。4は精製の有段口縁鉢、5は口縁部が外反する鉢である。6は鼓型器台で、口径10.8cm・底径12.0cm・器高7.8cmを測る。口縁部内外面、及び脚部外面は横位のヘラミガキである。7は器種不明の口縁部で、外面縦位のヘラミガキを施す。小形器台か。8～10は有稜高杯で、9は稜部に沈線が生じている。調整はヘラミガキを多用し、

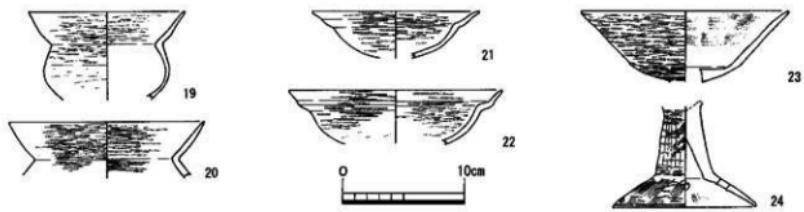


第7図 S1201断面図

9は杯底部～脚部の外面がヘラケズリで、裾部にはハケが見られる。口径・器高・底径は8が16.8・13.9・10.7cm、9が16.5・13.2・12.3cmを測る。11～13は精製の小形丸底壺である。11・12はヘラミガキを多用し、12の底部外面はヘラケズリである。13は口縁部ヨコナデ、底体部外面ハケ、内面ヘラケズリである。口径・器高・体部最大径は11が11.5・7.3・7.7cm、12が10.7・7.8・8.6cm、13が8.6・8.3・9.9cmである。14はヘラミガキを多用する精製の有段鉢で、底部外面はヘラケズリである。口径15.7cm・器高6.0cmを測る。15は手捏ね成形による小型鉢で、調整は口縁部ヨコナデ、底体部ナデ。口径10.3cm・器高5.6cmを測る。16～18は球形の体部を成す布留式壺である。



第8図 S I 201出土遺物



第9図 S E 201出土遺物

口縁端部の内側への肥厚は、16・17が丸みをもち、18は尖り気味で端面に沈線が生じる。調整はいずれも口縁部ヨコナデ、底体部外面ハケ、内面ヘラケズリで、18は口縁部内面にヨコハケが見られる。口径・器高・体部最大径は16が12.2・17.8・18.6cm、17が13.0・20.5・19.2cm、18が13.0・21.5・19.9cmである。これらの土器は布留式古相に位置付けられる。

S E201

1B区に位置し、北部は側溝掘削により削平したが、平面形は南北約1.2m×東西約1.6mの楕円形を呈すると思われる。断面逆台形を呈し、深さは約0.7mを測る。埋土は粘土質シルト～シルト質粘土主体の9層から成り、中層以下に炭・灰が認められる。遺物は布留式期古相の土器が出土しており、6点(19~24)を図化した。いずれもヘラミガキを多用する精製の器種である。19・20は壺で、口径は12.0・14.8cmを測る。19は底部外面ヘラケズリである。21・22は有段鉢で、口径は12.8・16.4cmを測る。23・24は有稜高杯である。23は杯内面横位のハケ、24も外面ヘラミガキの前にハケを施す。

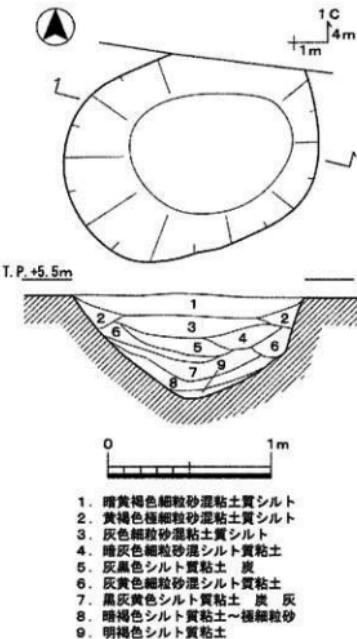
S E202

S E201の東側に隣接している。中央部は側溝掘削により削平したが、平面形は南北約2.2m×東西約1.5mの壺の楕円形を呈する。断面逆台形を成し、深さ約0.5mを測る。埋土はブロック状の4層から成り炭を含む。遺物は布留式期古相の土器が出土しており、25~35を図化した。25は小型丸底壺で、調整はハケの後、口縁部内面に斜放射状にヘラミガキを加える。26は粗製で薄手の壺で、製塩土器の可能性がある。胎土中にクサリ礫を多量に含み、色調は淡灰褐色。27~29是有段口縁鉢である。調整は27がヘラミガキ、28・29はヨコナデである。30・31是有稜高杯である。30は口縁部外面縱方向に、31は内外面下位に乱方向にヘラミガキを施す。32は四国系の特徴を備えた甕である。33~35は布留式甕である。口縁端部は33が内側に小さく巻き込み、34・35は内側に肥厚し内傾する端面を成す。34は肩部外面に3個の刺突文を施す。

なお26・29・34は西側のS E201からも破片が出土している。このことから両遺構は同時期頃に埋まつたものと思われる。

S K201~204

調査区西北部で検出した土坑群である。平面形は不定形～溝状を成し、埋土は黄灰褐色粘土質シルトである。S K201・202・204は、平面形から見て溝の残穴である可能性が高い。遺物は出土していない。



第10図 S E201断面図

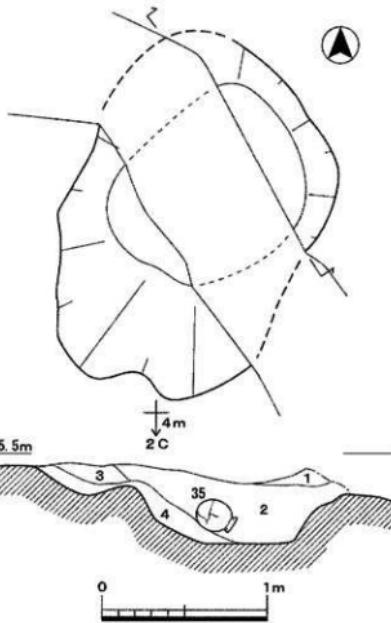
S K205

2 A区で東部を検出した土坑で、西は調査区外に至るため詳細は不明であるが、調査区西壁にわずかに及ぶ程度の規模である。検出部分の規模は南北約3.4m・東西約1.0m・深さ約10cmを測る。断面皿状を呈し、埋土は灰褐色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

S K206

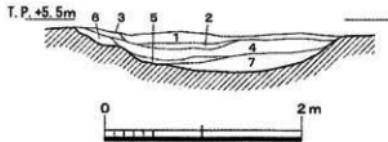
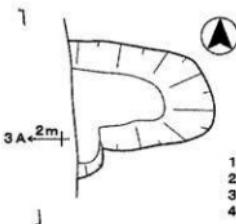
2・3 A区、S I 201北側に隣接して検出した土坑で、西は調査区外に至るため詳細は不明である。検出部分の規模は東西約1.5m・南北約1.4m・深さ約20cmを測るが、西部では規模を増しておらず、西壁では南北約2.7m・深さ約45cmが確認できる。断面椀形を呈し、埋土は粘土質シルト～シルト質粘土から成る7層が底面に沿って堆積している。中位には炭・灰を多量に含んでいる。遺物は布留式期古相までの土器が出土しており、36～46を図化した。36・37・41は布留式傾向窓とした。36は頸部内面が尖り、37は肩部にタタキを施す。41は口径17.1cm・器高21.9cm・体部最大径21.6cmを測る。ハケ調整、

球形の底体部、底部内面の指頭圧痕といった布留式窓の属性が顕著に見られるが、口縁端部の摘み上げや、内面ヘラケズリが頸部内面に及ぶといった庄内式窓の特徴を残している。生駒西蘆産の胎土である。38～40は布留式窓である。42は形態的に四国産の可能性がある。43は鉢、44は有段口縁鉢で、共に精良な胎土である。45は大形の有段口縁鉢で、口径18.2cm・器高8.2cm以上を測る。全面横位のヘラミガキで、底部外面中央にはヘラケズリが見られる。46は鼓型器台である。



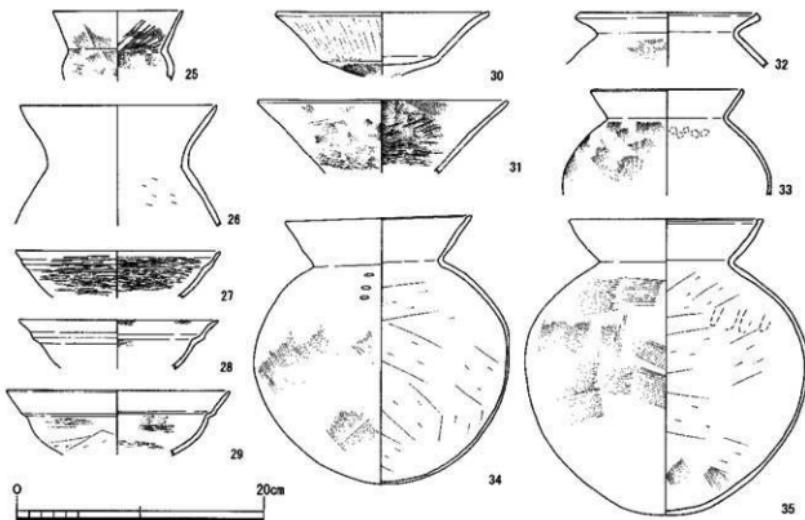
第11図 S E 202平面図
1. 暗褐色細粒砂混粘土質シルト
2. 暗灰褐色細粒砂混粘土質シルト 炭
3. 暗褐色細粒砂混粘土質シルト
4. 暗灰色細粒砂混粘土質シルト 炭

第11図 S E 202平面図

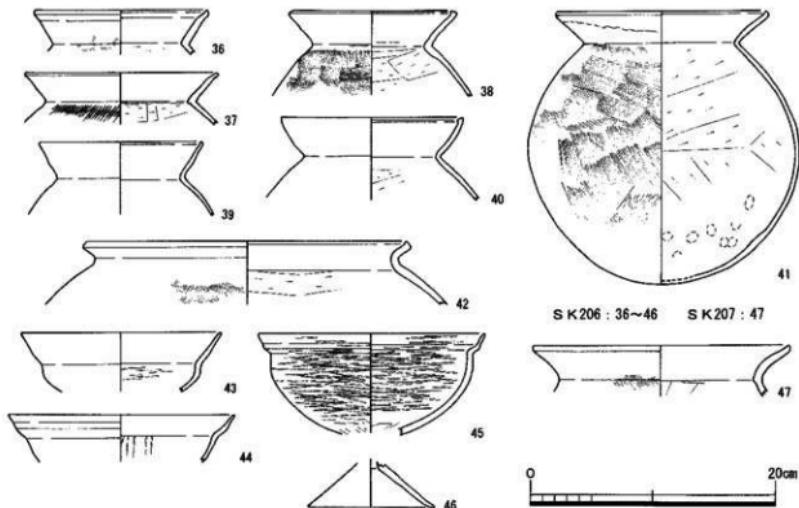


1. 黄褐色細粒砂混粘土質シルト
2. 暗灰褐色粘土
3. 暗褐色細粒砂混粘土質シルト
4. 黒灰色炭・灰
5. 灰色シルト質粘土
6. 暗褐色細粒砂混粘土質シルト
7. 暗灰褐色シルト質粘土

第12図 S K206平面図



第13図 S E 202出土遺物



第14図 SK 206・207出土遺物

S K207

3 A 区で弧状を成す掘方の北部のみを検出したもので、南は調査区外に至る。検出部分の規模は東西約1.6m・南北約0.3mを測る。深さは南壁で約50cmを測り、断面逆台形を呈する。埋土は粘土質シルトを基調とし、底面に沿って8層が堆積する。下部には炭を多く含む。遺物は布留式期古相までの土器が出土しているが、図化したのは土師器甕(47)のみである。体部外面は最上位にハケ調整が確認できるが、器壁が厚く、V様式系甕の可能性がある。

S K208

3 C 区で検出した南北に長い土坑で、南は調査区外に至る。規模は南北約4.0m・東西0.7~1.7m・深さ約10cmを測る。断面皿状を呈し、埋土は暗灰褐色粘土質シルトの単層である。時期不明の土師器片が出土しているが、図化したものはなかった。

S D201

2 A 区で検出した北東~南西方向に直線的に延びる溝で、北端で東にややカーブする。検出長約7.9m・幅約35cm・深さ約5.0cmを測る。断面皿状で、埋土は黄灰褐色粘土質シルトの単層である。遺物は出土していない。

S D202

3 A 区に位置する北西~南東方向の溝で、S I 201の南東角に取り付く状況であり、何らかの関連が考えられる。規模は検出長約3.0m・幅約0.6m・深さ約10cmを測る。断面皿状を成し、埋土は暗灰褐色粘土質シルトの単層である。弥生時代後期~古墳時代前期に比定される土器が出土しているが、図化したものはなかった。

S P201

2 B・C 区に位置し、平面形は南北65cm・東西38cmの楕円形を成す。深さ約5cmを測り、断面皿状で、埋土は暗褐色粘土質シルトの単層である。遺物は出土していない。

S P202

2 B 区に位置し、平面形は直径約50cmのほぼ円形を成す。深さ約24cmを測り、断面逆台形で、埋土は暗褐色細粒砂混粘土の単層である。遺物は出土していない。

S P203

3 C 区に位置し、平面形は南北55cm・東西45cmの楕円形を成す。深さ約10cmを測り、断面逆台形で、埋土は灰褐色粘土質シルト~シルト質粘土である。遺物は出土していない。

S P204

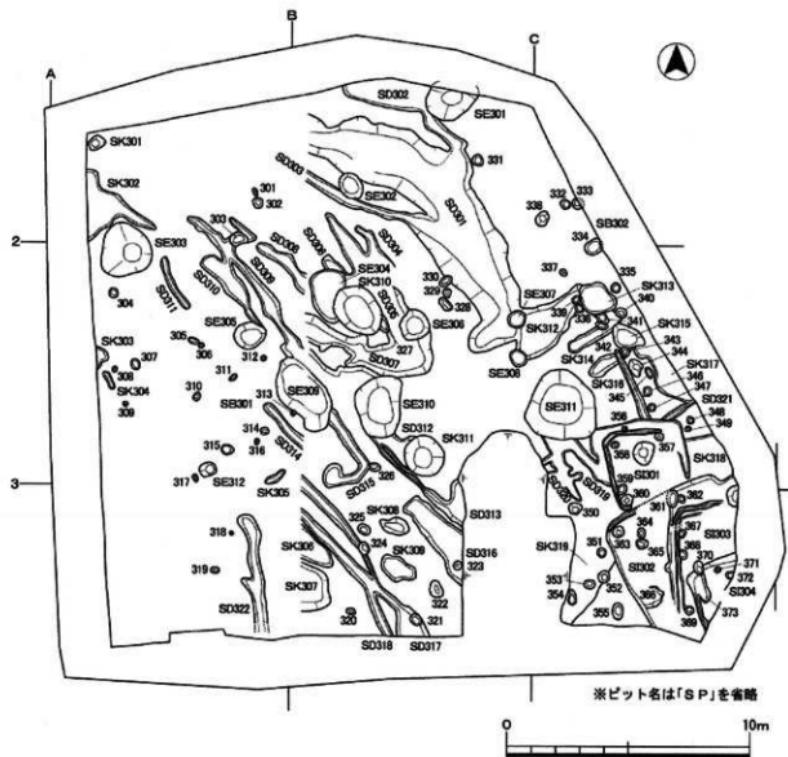
S P203の南側に位置し、平面形は南北80cm・東西80cmの不定形を成す。深さ約10cmを測り、断面逆台形で、埋土はS P203と同じである。遺物は出土していない。

S P205

S P204の南側に位置し、平面形は直径約50cmのほぼ円形を成す。深さ約18cmを測り、断面逆台形で、埋土はS P203と同じである。遺物は出土していない。

(第3面(T.P.+5.1~5.3m))

堅穴住居4棟(S I 301~304)、掘立柱建物2棟(S B 301・302)、井戸12基(S E 301~312)、土坑17基(S K 301~308)、溝22条(S D 301~322)、ピット73個(S P 301~373)を検出した。これらの遺構の時期は出土遺物から古墳時代初頭後半~前期前半が中心と考えられ、わずかに弥生時代



第15図 第3面平面図

後期に遡るものもある。

S I 301～304は2～3C区で検出した竪穴住居群で、さらに調査区南部・東部に広がる状況である。切り合っており全容の知れるものではなく、各々の先後関係も明確ではない。井戸は全て素掘り井戸としての検出で、直径1.5～3.0mを測るものと、直径0.7m程度の小規模なものがある。後者は、掘方が垂直に近いもので、底部が湧水層に達していることから井戸とした。溝はほとんどが北西～南東方向のものである。なお、S I 301北側で検出した直角に屈曲するSD321についても竪穴住居の壁溝である可能性がある。

S I 301

南東部が不明であるが、一辺3.8m程度の平面方形を呈すると思われる。主軸は西-12°-北である。壁溝は幅20～35cm・深さ5～10cmを測る。炉は中央やや北に位置し、平面形は95×80cmの円形に近い。断面逆台形を呈し、深さ約25cmを測る。ビットは北壁溝外側で1個(S P 356)、床面で4個(S P 357～360)を検出した。いずれも壁溝に近接するもので、平面形は円形・橢円形を呈

し、平面規模・深さはS P 356-22×18・14cm、S P 357-33×30・27cm、S P 358-30×26・8cm、S P 359-53×39・15cm、S P 360-55×46・16cmである。遺物は床面、炉、S P 359・360から出土しており、床面出土の48、炉出土の49～51を図化した。48はV様式系壺、49は庄内式壺である。50は有稜高杯で、口径15.2cmを測る。口縁部外面に縱位、内面に横位のハケを施す。51は粗製の小形壺で、全体に歪で器壁が厚い。全体に火を受けている。ほぼ完形で口径11.7cm・器高11.5cmを測る。これらの土器は庄内式期新相に比定されよう。

S I 302

西部のみ検出した状況で、主軸は西-28°一北である。北辺の東部が屈曲しており、東辺が張り出するような平面形態での可能性がある。規模は東西5.9m以上を測る。壁溝は北辺西部と西辺南部で遺存しており、幅12～24cm・深さ5cm程度を測る。炉は北東角に位置し、規模は南北79cm・東西38cm以上・深さ約10cmを測る。断面楕形を呈し、埋土中には炭層が見られる。ピットは床面で6個(S P 361～366)を検出した。平面形は円形・橢円形・不定形を呈し、平面規模・深さはS P 361-68×42・17cm、S P 362-33×32・9cm、S P 363-49×43・15cm、S P 364-42×34・28cm、S P 365-52×38・10cm、S P 366-92×79・5cmである。遺物はS P 364・365から庄内式期～布留式期に比定される土器片が少量出土しているが、図化しえるものはなかった。

S I 303

北西部のみを検出した状況で、主軸は西-5°一北、規模は南北4.3m以上を測る。壁溝は幅15～40cm・深さ5cm程度を測る。ピットは床面で4個(S P 367～370)を検出した。平面形は円形・不定形を成し、平面規模・深さはS P 367-34×30・20cm、S P 368-40×39・20cm、S P 369-34×31・33cm、S P 370-57×31・22cmである。S P 367～379は西壁溝に近接して並んでいる。遺物はS P 367～369から庄内式期～布留式期に比定される土器片が少量出土しているが、図化しえるものはなかった。

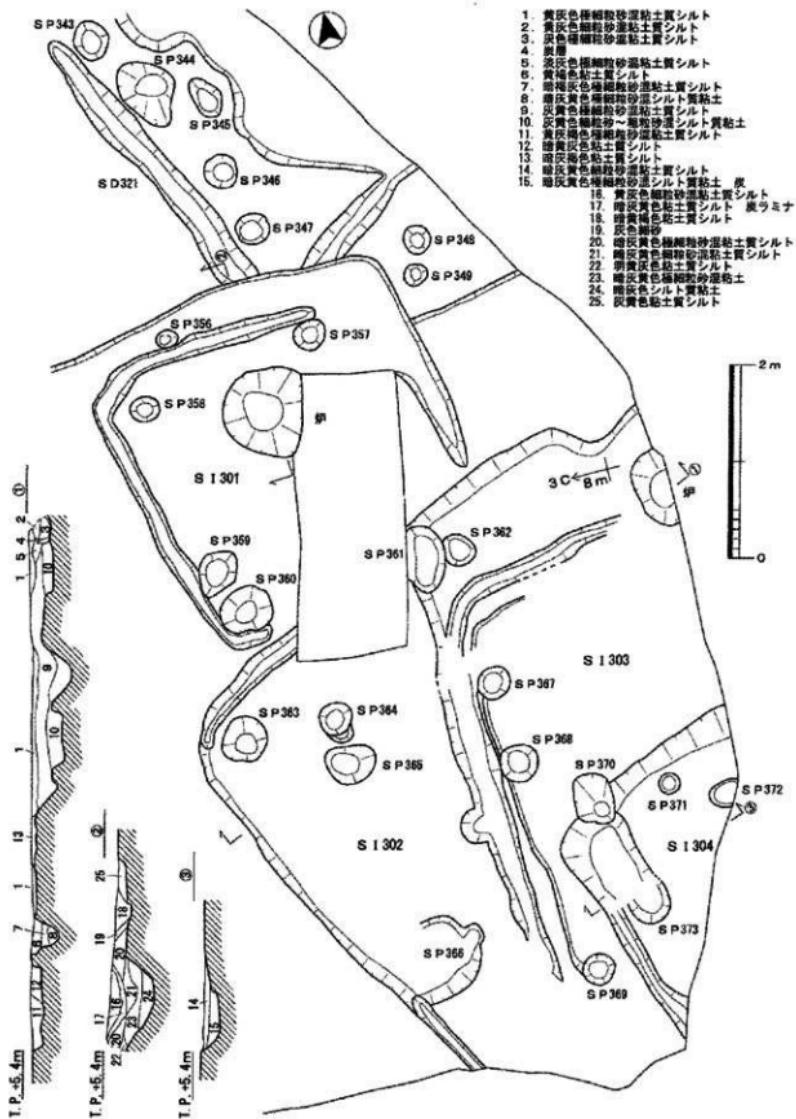
S I 304

北西部のみの検出で、主軸は西-22°一北、規模は南北2.6m以上を測る。壁溝は西辺南部にのみ遺存しており、幅18～27cm・深さ5cm程度を測る。ピットは床面で3個(S P 371～373)を検出した。平面形は円形・橢円形を成し、平面規模・深さはS P 371-21×21・13cm、S P 372-35×28・48cm、S P 373-43×32以上・17cmである。S P 373には長さ68cm・直径約10cmの柱根が遺存している。遺物はS P 370から庄内式期に比定される土器片が少量出土しているが、図化しえるものはなかった。

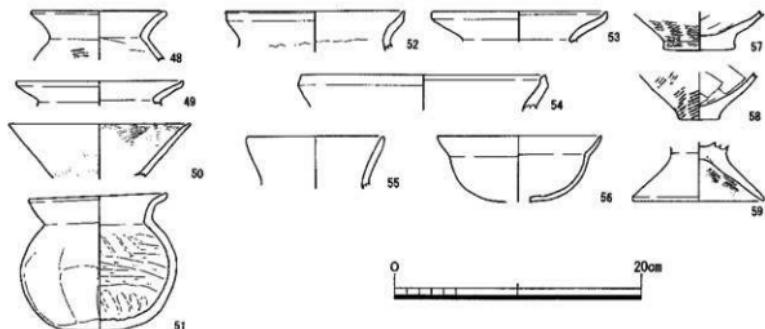
S I 302～304検出時に出土した遺物については、明確に岐別できていないため一括して取り扱う。52～59を図化した。52はV様式系壺、53は庄内式壺である。54は口縁端部が内上方に短く屈曲するもので、壺と考えられる。55は広口短頸壺である。56は精製の小形鉢で、口径13.8cmを測る。調整は磨耗のため不明。57は壺底部と考えられ、外面上にタタキを施す。58は壺あるいは鉢の底部で、外面上にタタキをナデ消している。59は竪穴住居の可能性があるS D 321の内側から出土したもので、台付き壺の脚台部と思われる。淡灰色の胎土で搬入品の可能性が高く、東海地方が考えられる。これらの土器は布留式期古相までに比定されよう。

S B 301

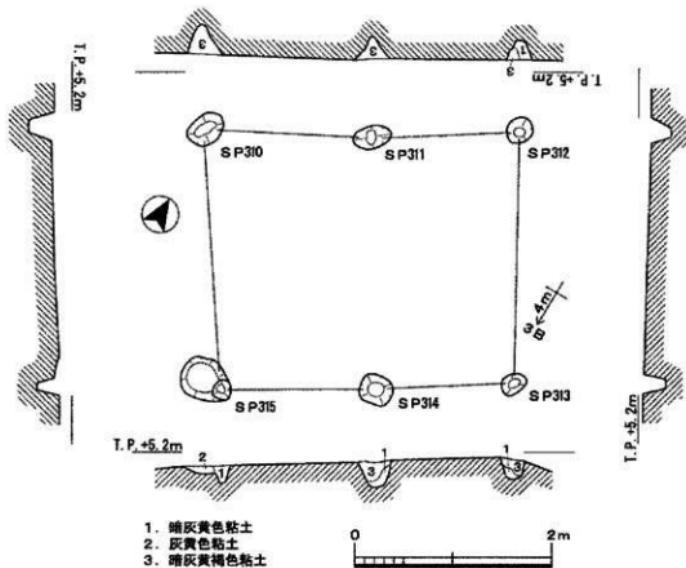
2A～B区で検出した掘立柱建物で、S P 310～315で構成される。主軸は西-30°一北で、規



第16圖 S1301~304平斷面圖



第17図 S I 301~304出土遺物

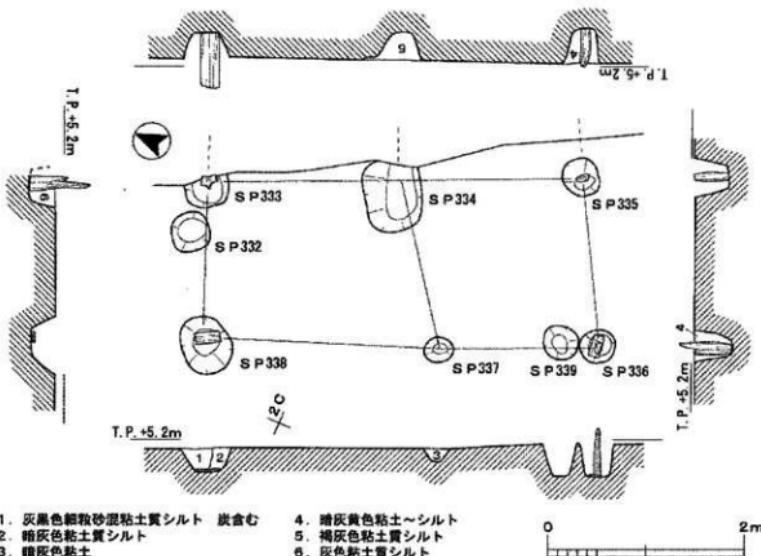


第18図 SB 301平面面図

模は南北1間(2.6m)×東西2間(3.2m:柱間約1.6m)である。柱穴はSP 314が平面方形に近い他は、円形・梢円形を成し、径20~55cm・深さ18~30cmを測る。遺物はSP 310・311・313から布留式期の土器片が出土している。

S B 302

1~2C区に位置し、SP 333~338で構成される。主軸は西-26°-北で、規模は南北2間(約

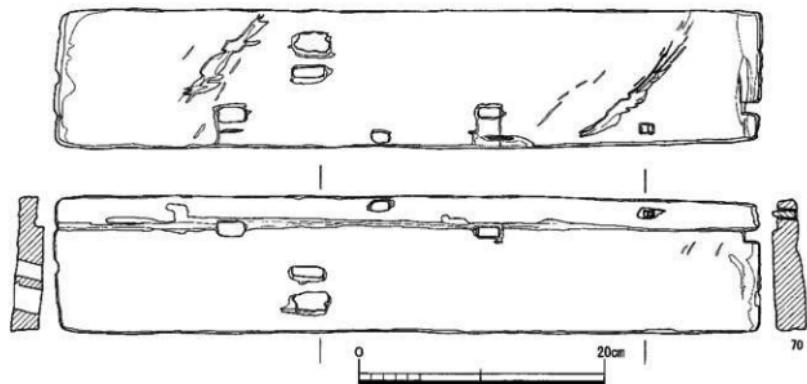
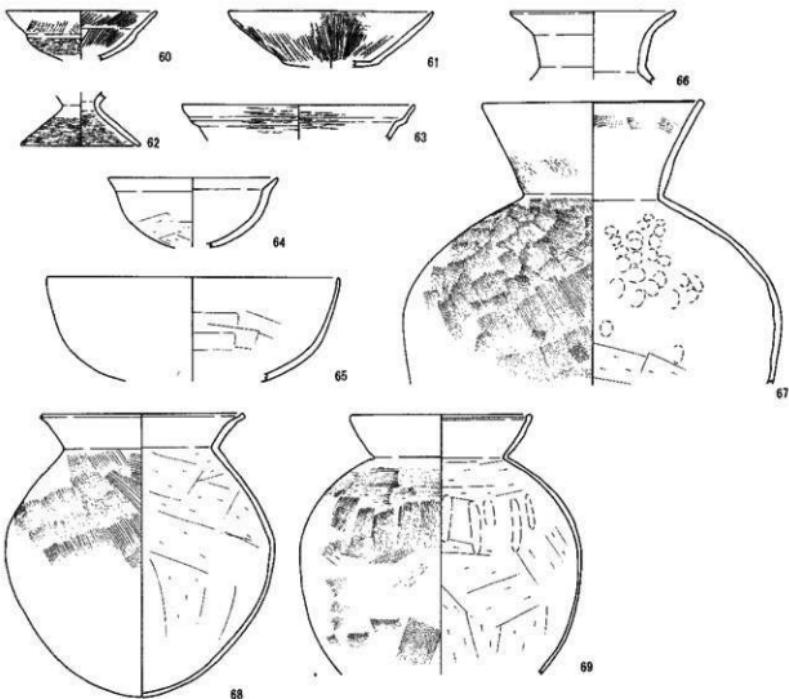


第19図 S B302平断面図

3.9m : 柱間1.6~2.4m)、東西は2間(柱間約1.7m)以上の総柱の建物であると考えられる。柱穴は直径25~70cmの円形から隅丸方形で、深さ15~40cmを測る。SP333・335・336に柱根、またSP336・338には礎板が遺存している。柱根は長さ35~60cm・径10~18cmを測る。礎板は長さ約24.0cm・幅約11.0cm・厚さ1.9~2.7cmの長方形の板材である。柱穴から土器は出土していない。

S E301

1B区で南部を検出したもので、北側は側溝掘削時に削平した。平面形は梢円形を呈すると思われ、検出部の規模は東西2.0m・南北1.7mを測る。断面逆台形に近く、深さ約0.8mを測る。埋土は、粘土質シルトを基調とする6層が底面に沿って堆積している。遺物は布留式期古相までの土器の他、木製品が出土しており、60~70を図化した。60は小形の高杯と思われ、口径12.2cmを測る。ヘラミガキを多用し、杯部内面は底部放射状、口縁部斜放射状に施す。61は有稜高杯で、口径16.4cmを測る。口縁部調整は継位ヘラミガキで、内面には先行するハケが見られる。胎土は精良で、色調は淡灰褐色である。調整や口縁部がわずかに内溝する特徴から、東海地方からの搬入品と考えられる。62・63は精製の鼓型器台・有段口縁鉢である。64は小形の丸底鉢で、口径13.6cmを測る。65は粗製の鉢で、外面にはクラックが認められ、胎土中には2~3mm大の砂粒を多く含んでいる。66は口縁部が中位で屈曲する壺である。67は大形の直口壺で、口径17.8cmを測る。調整はハケを多用する。68は布留式の影響を受けた庄内式壺に位置付けられる。外面ハケ調整で、口径16.4cm・器高23.2cm・体部最大径21.6cmを測る。69は布留式壺で、口径14.6cmを測る。70は

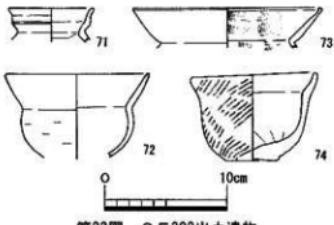


第20図 S E301出土遺物

不明木製品で、長さ70.6cm・幅約13.5cm・厚さ2.5~3.0cmを測る板材である。片面の側部には幅約3.0cm・深さ約6mmの段を施しており、6箇所に長方形の枘穴を穿つ他、一端に方形の刺り込みを施す。また枘穴の一つには楔状の木片が遺存している。

S E 302

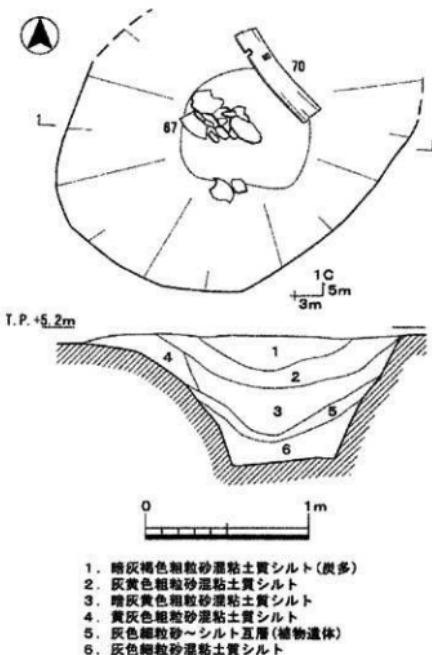
1B区で検出した井戸で、平面形は長辺約1.2m・短辺0.9mの橢円形を呈する。断面ほぼ逆台形で、深さ72cmを測り、埋土は粘土質シルトを基調とする4層から成る。上層には炭を多く含んでいる。遺物は71~74を固化した。71・72は小形丸底壺である。71は複合口縁を成し、口径6.8cmを測る。72は口径11.4cmを測り、磨耗のため調整は不明である。73は口縁端部を小さく巻き込む布留式甕である。口縁部内面に横位のハケを施す。74は小形の鉢で、口径10.2cm・器高6.9cm・底径4.2cmを測る。外面全面タタキ調整の後、ヨコナデにより口縁部を形成している。これららの土器は布留式期古相までに比定される。



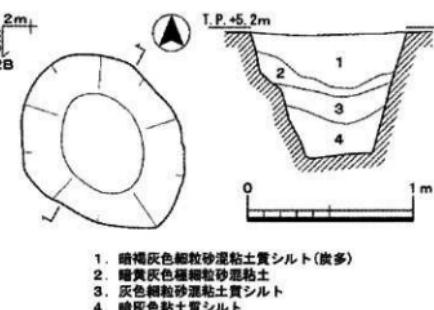
第23図 S E 302出土遺物

S E 303

1・2A区に位置し、平面形は南北2.3m×東西2.0mの不整円形を成す。断面椀形を呈し、深さ約0.8mを測る。埋土は細粒砂混粘土を基調とする5層



第21図 S E 301平面面図



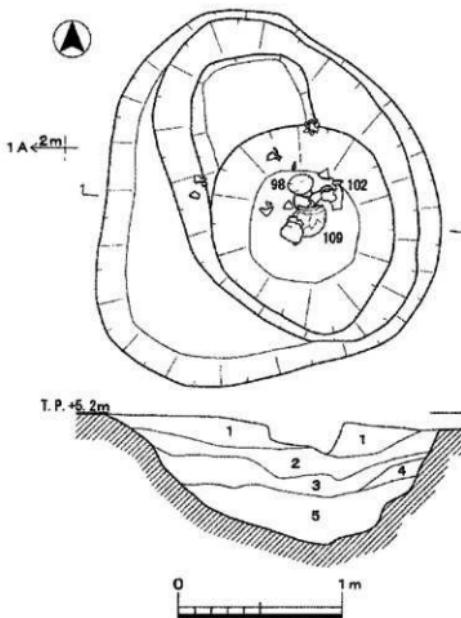
第22図 S E 302平面面図

から成り、1～4層はブロック状を呈する。

遺物は1・2層から庄内式期新相に比定される土器が多量に出土しており、布留式期古相に下る土器もわずかに含む。なお検出時には当遺構上部を土器集積として捉えており、これらを上層出土土器とした。上層には布留式期古相に下る土器が下層よりも多く含まれている。上層出土土器(75～97)、下層(1・2層)出土土器(98～109)を図化した。

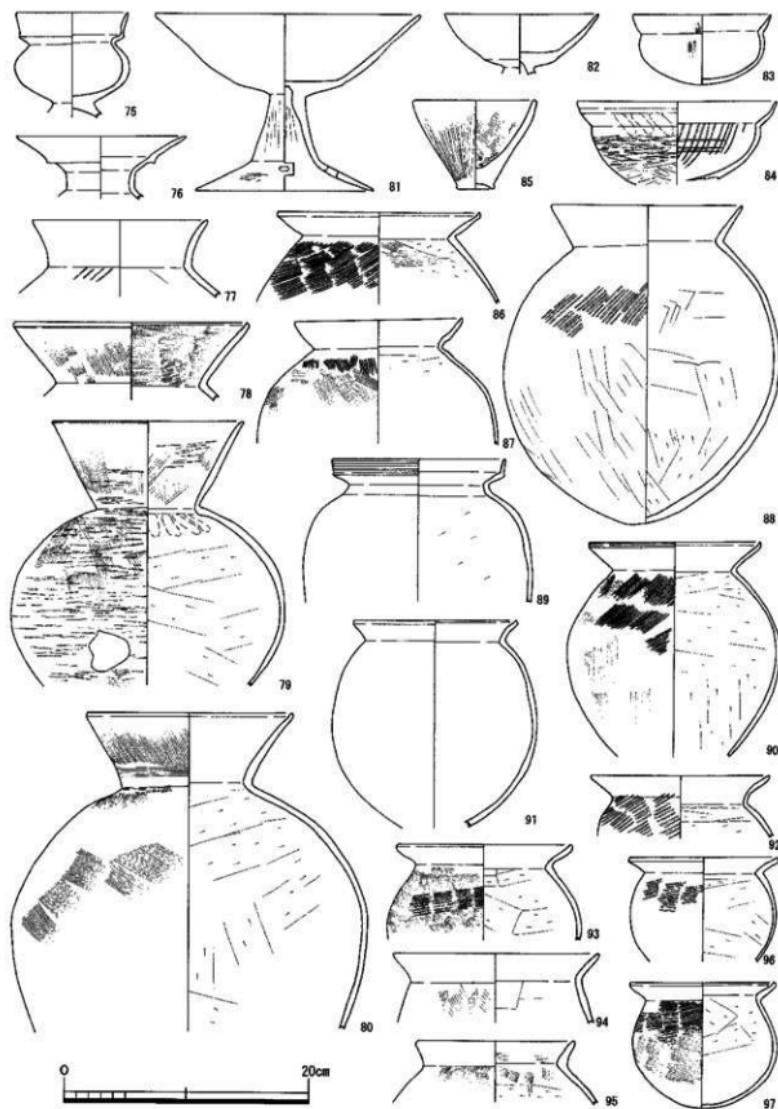
上層-75は脚台付きの小形複合口縁壺で、口径9.2cmを測る。色調は淡灰褐色で、形態から見て山陰地方からの搬入品と考えられる。76は複合口縁壺で、口縁部外面中位に断面三角形の稜を成す。77は広口壺で、肩部外面にタタキが認められる。78～80は直口壺である。78は口縁部内外面、80は口縁部～体部外面ハケ調整である。79は口径16.0cmを測り、調整は口縁部～体部外面ハケ後横位ヘラミガキ、体部内面ヘラケズリである。体部下半に黒斑を有する他、穿孔と思われる直径約3cmの焼成後の

欠損部が見られる。81・82は大形・小形の有稜高杯で、口径は22.0cm・12.6cmを測る。いずれも口縁部に黒斑を有する。83はほぼ完形の小形丸底鉢で、口径11.5cm・器高5.8cmを測る。口縁部～体部に縦位のハケを施し、体部に黒斑を有する。84是有段口縁鉢で、口径16.4cmを測る。85は鉢で、口径10.2cm・器高7.5cm・底径3.3cmを測る。外面縦位ヘラミガキ、内面ハケ調整である。86～97は甕である。86・90・96・97は庄内式新相、87・93～95は布留式古相に比定されよう。96・97は小形甕で、97は口径12.1cm・器高10.5cm・体部最大径12.0cmを測る。87は肩部に縦位のタタキを施している。93は布留式傾向甕に位置付けられる。94・95は、体部外面ハケ調整であるが、形態に典型的な布留式甕の要素を備えておらず詳細は不明である。88は口縁部が直口状を成し、タタキは肩部下位にのみ認められ、器壁がやや厚い。在地甕とは趣が異なり搬入品であろう。89は吉備地方からの搬入品である。91は磨耗のため調整不明である。色調は淡褐色を呈し、形態的に搬入品と思われる。92はタタキが粗く、庄内式古相に比定される。

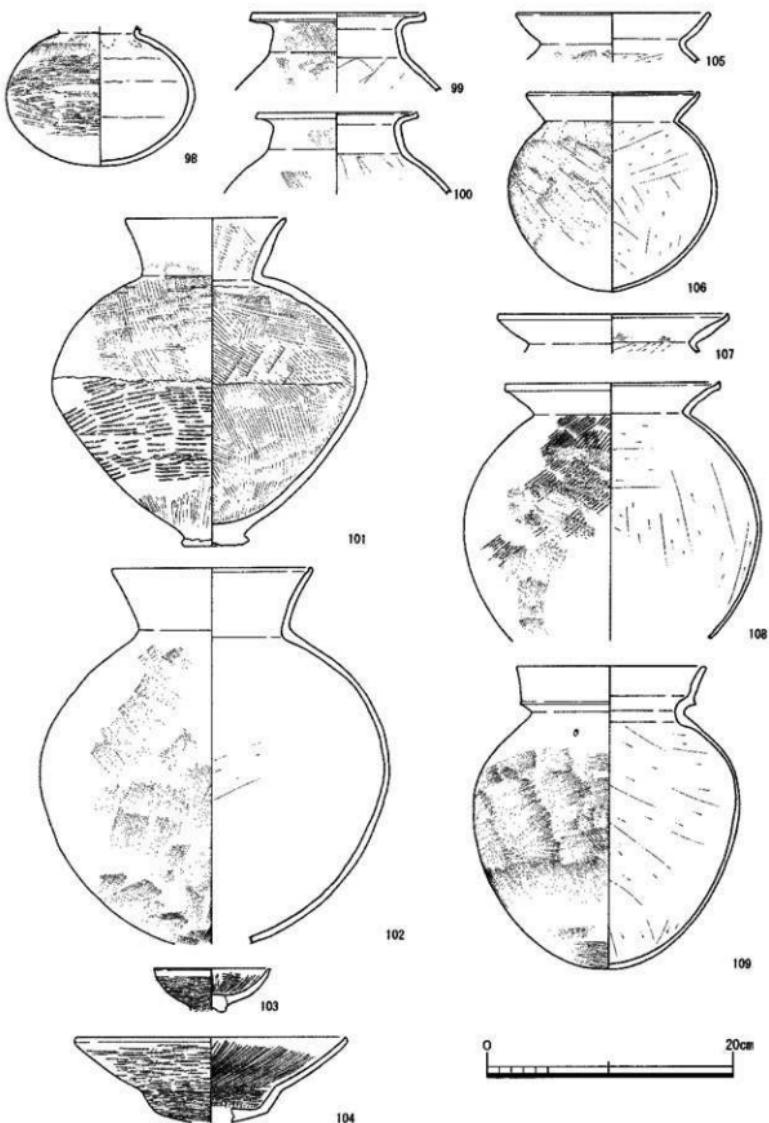


第24図 S E 303平面図

1. 淡灰青色細粒砂混粘土質シルト ブロック状
2. 淡灰色粗粒砂混粘土 ブロック状
3. 淡黄灰色細粒砂混粘土 ブロック状
4. 灰黄色細粒砂混粘土 ブロック状
5. 灰色細粒砂混粘土



第25図 S E303上層出土遺物



第26図 S E 303下層出土遺物

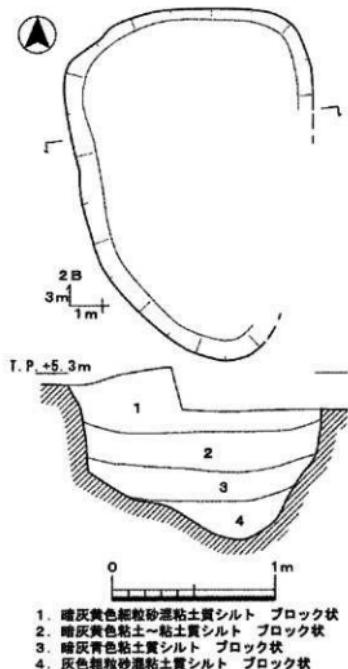
下層-98は精製の壺で、底体部完存である。体部にヘラミガキを施す。99・100は、内傾する頭部から口縁部が屈曲し、端部はつまみ上げる。形態的に四国からの搬入品であろう。101・102は直口壺である。101は口径13.0cm・器高26.2cmを測る。底体部外面にヘラミガキを施すが、粗いため先行する上半のハケ、下半のタタキが明瞭に認められる。102は球形の底体部を呈し、口径16.2cmを測る。外面ハケ調整で、底部に黒斑を有する。103は小形器台で、外面に横位、内面に放射状ヘラミガキを施す。104は有段高杯で、口径21.0cmを測る。調整はハケ後ヘラミガキである。105は布留式甕、106は布留式影響の庄内式甕、107・108は庄内式甕である。106はほぼ完形に復元され、口径14.0cm・器高16.0cm・体部最大径16.7cmを測る。体部は球形化し、外側調整はハケである。底部のみ煤けている。109はほぼ完形で、口径15.3cm・器高24.4cm・体部最大径21.3cmを測る。外側ハケ調整で、肩部に1個の刺突文を施す。山陰地方からの搬入品である。

S E304

2B区に位置し、平面形は南北約2.2m×東西約1.5mの楕円形に近い。断面ほぼ逆台形で、深さ約1.0mを測り、埋土はブロック状を呈する砂混粘土質シルトを基調とする4層が水平に堆積する。東部はSK301に削平されている。遺物は出土していない。

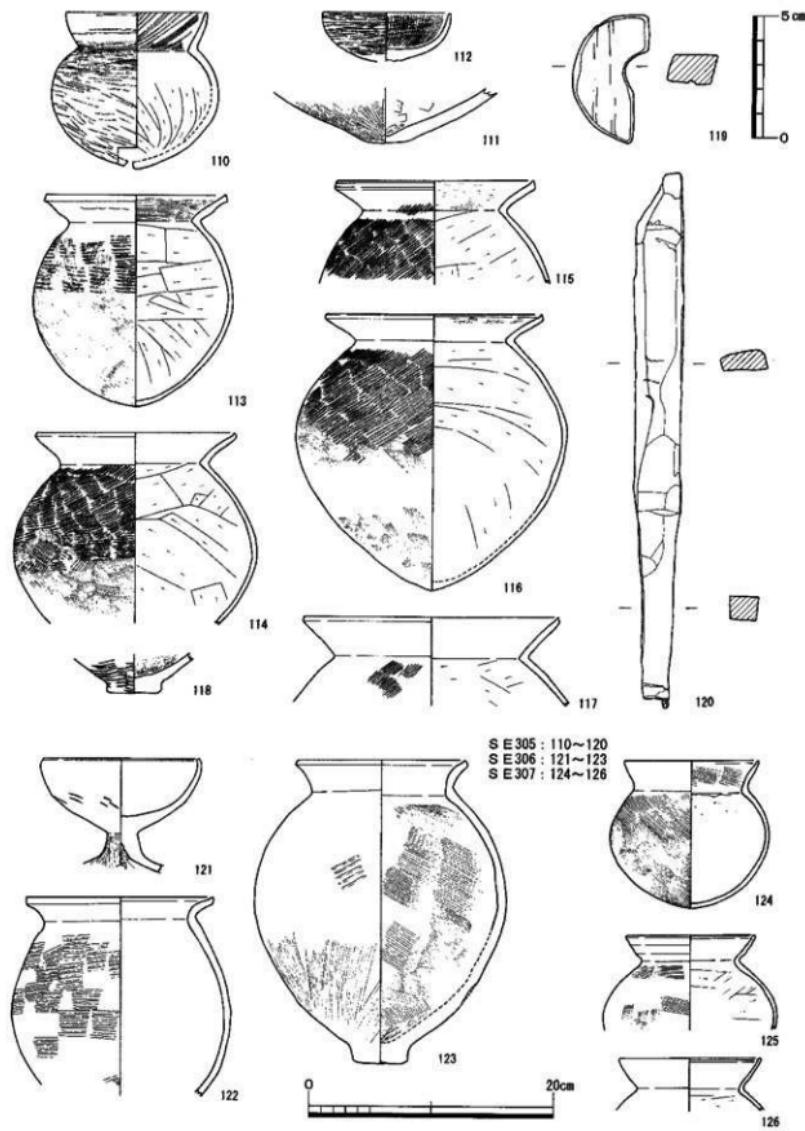
S E305

2△区に位置し、平面形は約1.3×1.1mの楕円形に近い。断面ほぼ逆台形を呈し、深さ約0.5mを測る。埋土は粘土質シルトを基調とする6層から成り、1~3層はブロック状を呈する。遺物は4層以下から庄内式期新相までに比定される土器の他、木製品が出土している。110~120を図化した。この内110~120は底部付近の出土である。110はヘラミガキを多用する精製の短頸直口壺で、ほぼ完形である。口径11.4cm・器高12.7cmを測る。尖り気味の底部のほぼ中央に、直径5mm程度の焼成前の穿孔を施している。111は大形の壺底部と思われ、底部外面に黒斑を有する。112は精製の楕型高杯で、調整は横位ヘラミガキの後、内面に放射状ヘラミガキを加える。113~117は庄内式甕で、口径は14.8cm(113)~20.6cm(117)を測る。113は肩部タタキがほぼ水平方向に施される。116は口径17.6cm・器高22.5cm・体部最大径21.9cmを測り、全体に厚く煤けている。体部外側のハケは、一部が肩部に及ぶものの、ほぼ体部中位までである。118はタタキを施す甕底部で、底径4.4cmを測る。V様式系甕と思われる。119は不明木製品で、輪状を成す製品の一部と考えら



27図 S E304断面図

1. 暗灰黄色粗砂混粘土質シルト ブロック状
2. 暗灰黄色粘土～粘土質シルト ブロック状
3. 暗灰青色粘土質シルト ブロック状
4. 灰色粗粒砂混粘土質シルト ブロック状



第28図 S E 305~307出土遺物

れる。残存長5.2cm・厚さ約1.2cmを測る。120は棒状木製品で、用途は不明である。残存長43.5cmを測り、下端部は欠損している。断面形状は、下方は2.0cm×2.2cmの方形、先端部は幅広になり3.8cm×1.6cmの長方形を成す。幅広部分の表面には削りの痕跡が明瞭に観察できる。

S E 306

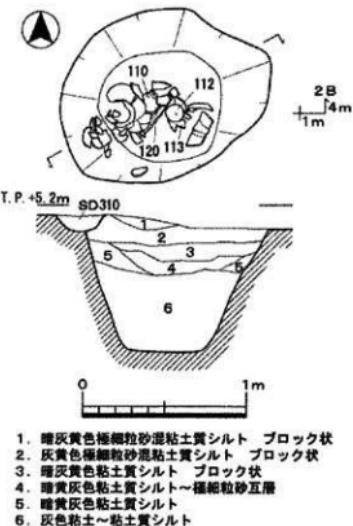
2B区に位置し、平面形は直径約1.2mの不整円形を呈する。断面逆台形を呈し、深さ約0.8mを測る。埋土は粘土質シルトを基調とする5層から成り、1・2層はブロック状を呈する。遺物は上層から庄内式期古相に比定される土器が出土している。121～123を図化した。121は椀形高杯で、杯部が完存し、口径12.8cmを測る。口縁端部に段を成し、調整は杯部ナデ、脚部はヘラミガキで4方孔を施す。122・123はV様式系壺である。122の外面のタタキはほぼ水平に施される。123は口径14.0cm・器高24.6cmを測る。調整は外面下半板ナデで、上半はタタキをナデ消しており、内面はハケである。体部下半が煤ける。これらの土器は弥生時代後期末に比定することもできると考えられる。しかし他の出土土器片の中に、細目のタタキを施す壺の破片が含まれていることから、庄内式期古相とした。

S E 307

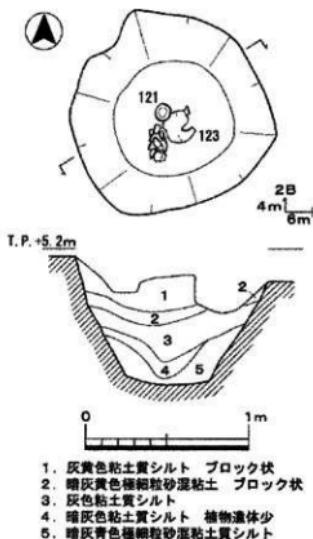
2B区に位置し、平面形は一辺約0.7mの隅丸方形に近い。断面逆台形を呈し、深さ約0.5mを測る。埋土は粘土～粘土質シルトを基調とする3層が、ほぼ水平に堆積する。遺物は布留式期古相に比定される土器が出土している。124～126を図化した。124はほぼ完形の直口壺で、口径10.9cm・器高12.0cmを測る。調整はハケを多用し、底部に黒斑を有する。125・126は布留式壺である。共に口縁端部が内側に小さく肥厚する。

S E 308

2B区、S E 307の南側に位置し、平面形は0.8m×0.6mの梢円形を呈する。断面逆台形を呈



第29図 S E 305平断面図



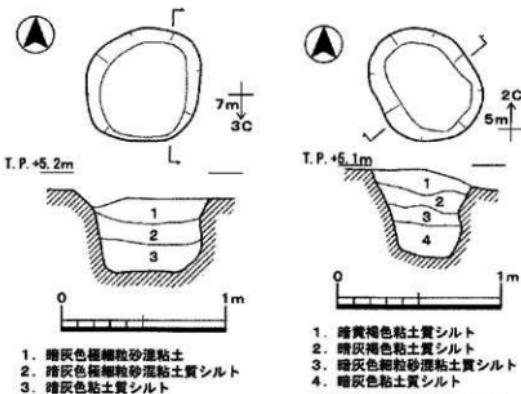
第30図 S E 306平断面図

し、深さ約0.5mを測る。埋土は粘土質シルトを基調とする4層が、ほぼ水平に堆積する。遺物は布留式期古相に比定される土器片が少量出土しているが、図化しえるものは無かった。

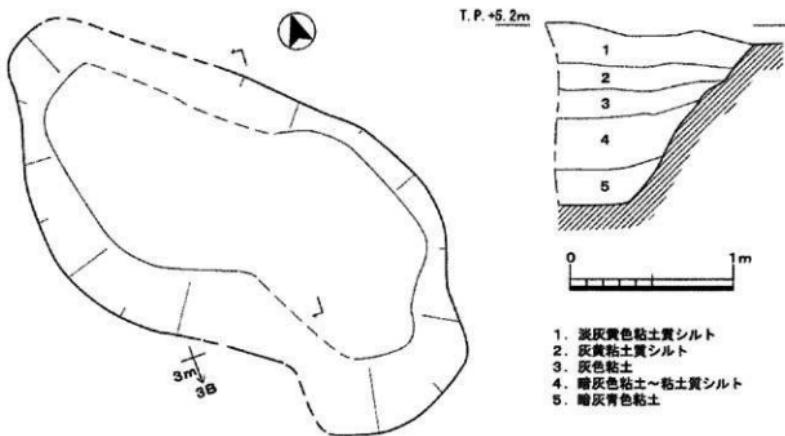
S E309

2 A～B区に位置し、平面形は南北約3.3m×東西約1.7mの亞な長円形を呈する。断面逆台形を呈し、深さ約1.1mを測る。埋土は粘土～粘土質シルトを基調とする5層が、ほぼ水平に堆積する。遺

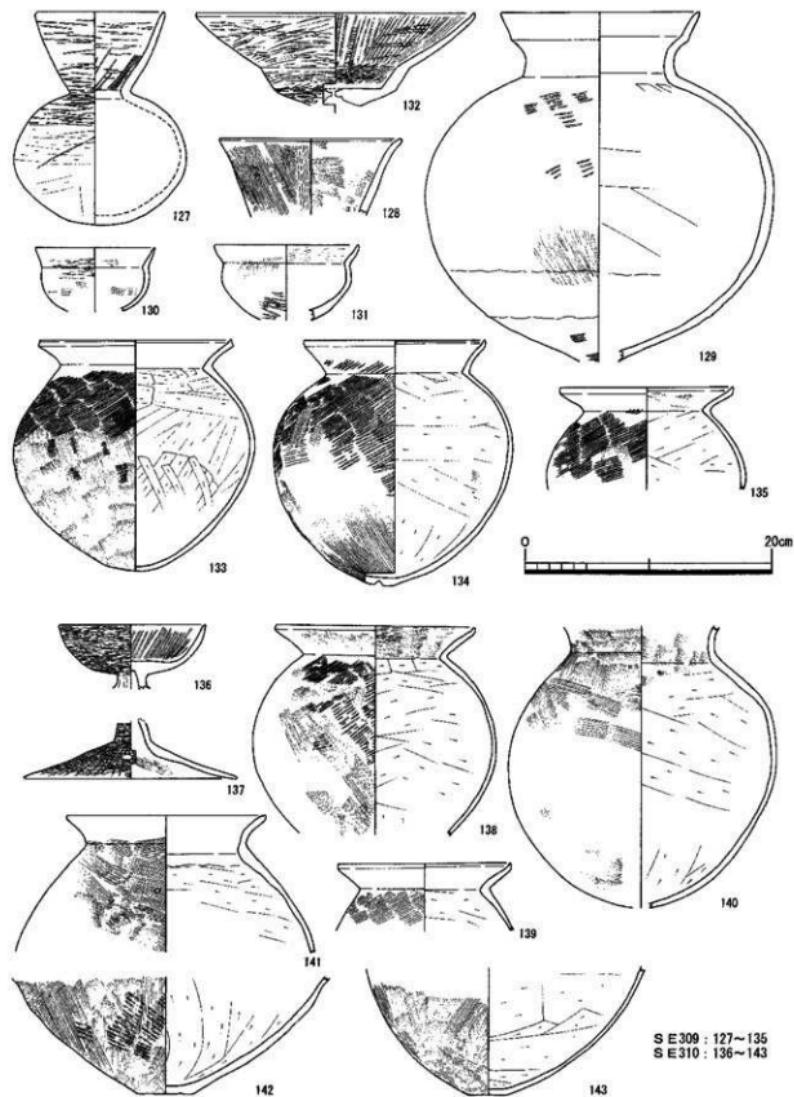
物は庄内式期新相に比定される土器が出土しており、127～135を図化した。127は精製の直口壺で、口縁部はやや内湾する。口径10.8cm・器高18.0cmを測り、口縁部の一部を欠く。調整はヘラミガキを多用し、口縁部内面に斜放射状ヘラミガキを加える。128は直口壺口縁部で、端部がやや開く。口径15.0cmを測り、調整はハケである。129は複合口縁壺で、口径16.5cmを測る。磨耗のため調整は不明瞭であるが、体部外面下半にヘラミガキ、上半にはタタキが認められる。130・131は小形



第32図 S E308平断面図



第33図 S E309平断面図



第34図 S E309・310出土遺物

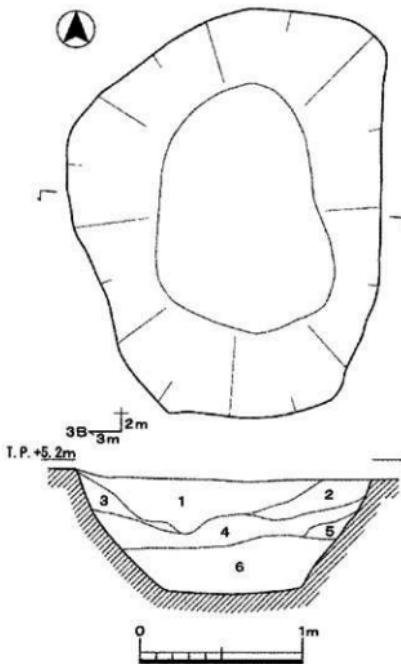
の丸底鉢で、口径10.0cm・12.0cmを測る。調整はハケ後ヘラミガキで、131は底部のみ粗いヘラミガキを加える。132は有段高杯で、口径23.2cmを測る。調整はヘラミガキを多用し、杯底部中央には直径約4mmの焼成後の穿孔を施している。口縁部に黒斑を有する。133～135は庄内式壺である。133・134は口径16.3・15.2cm、器高19.4・20.6cm、体部最大径20.2・20.0cmを測る。調整は体部上半タタキ、下半ハケで、134の底部中央に直径約7mm・深さ約5mmの窪みが見られる。体部最大径の位置は134がやや高く、古い様相といえる。共に厚く煤ける。

S E310

2B区に位置し、平面形は南北2.5m×東西1.9mの歪な梢円形を呈する。断面逆台形を呈し、深さ約0.7mを測る。埋土は粘土～粘土質シルトを基調とする6層から成る。遺物は庄内式期新相に比定される土器が出土しており、136～143を図化した。136・137は精製の椀形高杯で、ヘラミガキを多用し、137は脚部内面ハケで、4方孔を有する。136は口径12.2cm、137は底径18.0cmを測る。138・139は庄内式壺で、口径16.6・14.6cmを測る。138は厚く煤ける。140は口縁部を欠き詳細は不明である。肩部のハケ調整や頭部の形態からみて、山陰地方の複合口縁壺の可能性がある。全体に煤けており煮沸に使用している。141は壺、あるいは甕で、口径16.8cmを測る。外面調整は左上りのタタキ後ハケである。142・143は、底径4.6・3.0cmの小さな平底を有するもので、壺と考えられる。調整は外面ハケ、内面ヘラケズリで、142はハケに先行するタタキが残る他、底面にもハケが及んでいる。

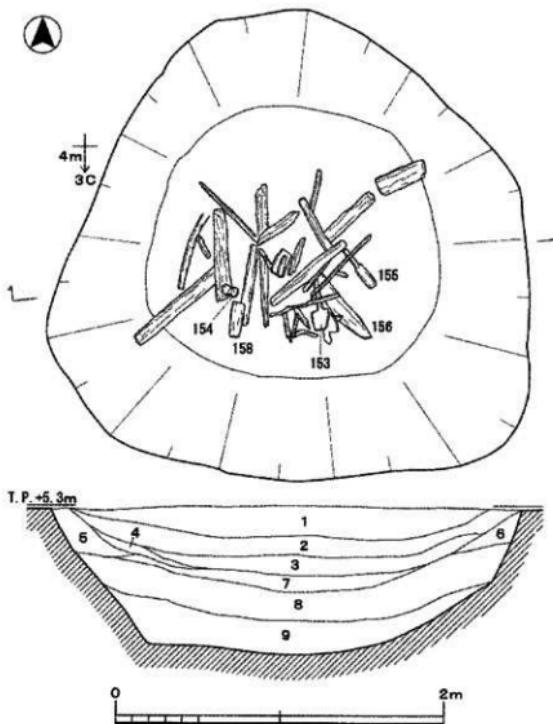
S E311

2B～C区に位置し、平面形は南北2.9m×東西2.9mの不整円形を呈する。断面逆台形を呈し、深さ約0.9mを測る。埋土は粘土質シルトを基調とする9層から成り、3・4層には炭を含む。遺物は8・9層に多く含まれており、布留式期古相を主とする土器の他、木製品・自然木が多く出土している。土器(144～152)・木製品(153～158)を図化した。144は複合口縁壺の口縁部と思われる。調整はヨコナデで、口縁端部を上下に肥厚させる。145は複合口縁壺で、口径16.6cmを測る。胎土中に砂粒を多く含む。146・147は直口



1. 緩灰黄色シルトブロック混粘土質シルト
2. 緩灰黄色粘土質シルト
3. 灰黄色粘土質シルト
4. 緩灰黄色粗繊粒砂混粘土質シルト
5. 浅灰色粘土
6. 灰色粘土～粘土質シルト

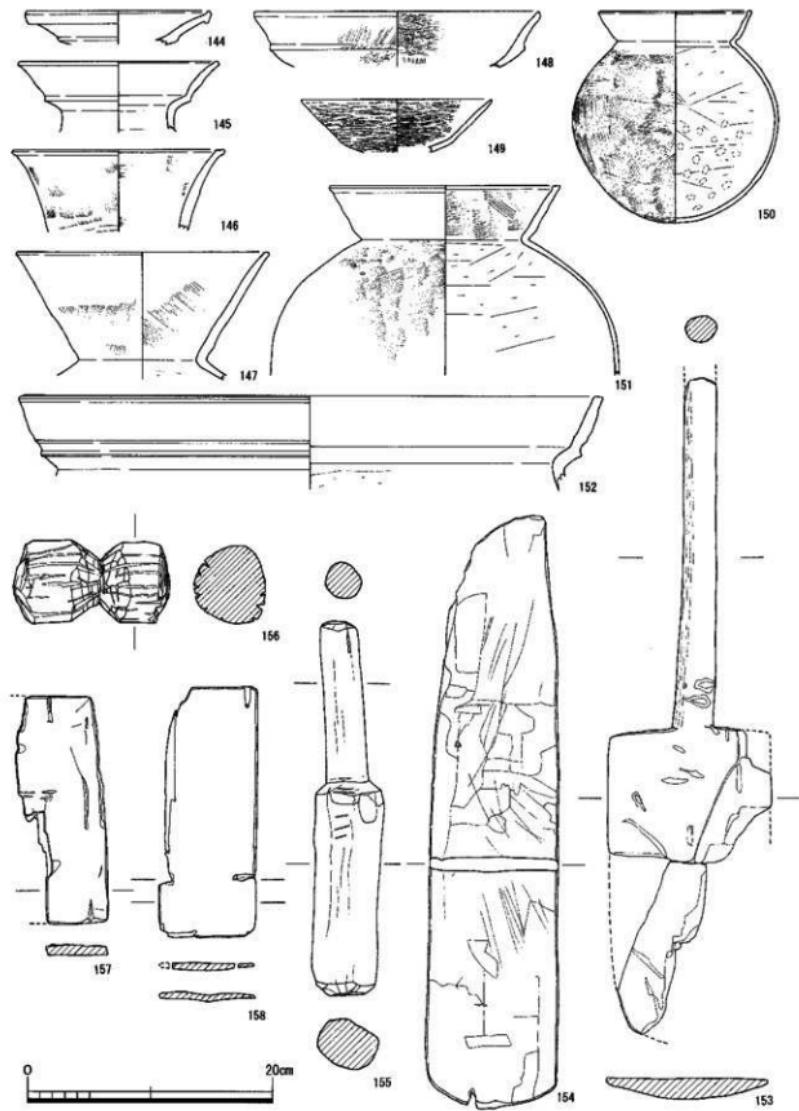
第35図 S E310平面断面図



- | | | |
|-------------------|------------------|------------------|
| 1. 灰黄褐色細粒砂混粘土質シルト | 4. 雪灰色粘土質シルト 炭含む | 7. 雪灰色細粒砂混粘土質シルト |
| 2. 雪灰色細粒砂混粘土質シルト | 5. 雪灰色細粒砂混粘土質シルト | 8. 雪灰色細粒砂混粘土質シルト |
| 3. 灰色粘土質シルト 炭含む | 6. 灰色粘土質シルト | 9. 灰青色粘土質シルト |

第36図 S E311断面図

壺で、調整は共にハケを多用する。148・149は有稜高杯である。148は砂粒を多く含む胎土で、形態的に弥生時代後期のものに近く古相を呈する。調整は共にヘラミガキである。150・151は布留式壺である。150はほぼ完形に復元され、口径12.7cm・器高17.7cm・体部最大径17.0cmを測る。口縁端部は内側に肥厚し、上端面に沈線を生じている。肩部にはハケに先行する継位のタタキがわずかに残る。151は大形で、口径19.0cm・体部最大径28.8cmを測る。口縁端部は外・内に肥厚し、肩部には3個の刺突文を施す。形態的にやや新相に位置付けられる。152は大形の複合口縁鉢で、口径48.2cmを測る。形態的に山陰地方からの搬入品と考えられる。153は一木鋤で、側面観からは直伸鋤に分類される。残存長54.6cmを測る。身は角肩を成し、断面は前面中央が膨らみ、後面が平坦である。身幅13.4cm・身厚1.8cmを測る。柄は断面円形を成し、柄径2.5～3.3cmを測る。154は曲柄平鋤の身部と考えられ、残存長49.4cmを測る。身はなだらかな肩部から先端部に向かって



第37図 S E311出土遺物

徐々に幅広になる形状で、身先端部で幅11.1cmを測る。身横断面は長方形を成し、厚さは約1.1cmを測る。表面には加工痕が明瞭に残る。155は横楕で、全長31.1cmを測る。身は断面偏円形を成し、直径3.6~5.2cmを測る。側面は使用痕が顕著で全体に瘦せており、先端は面取りされ中央が膨らむ。柄は長さ13.5cmを測り、断面は直径約3.2cmの円形を成す。身と同様に、先端が面取りされ中央が膨らむ。156は木鍤で、側面鼓形を成す4類に分類される。断面偏円形を成し、両端面は面取りされ中央が膨らむ。法量は長さ12.8cm・幅3.5~6.6cmを測る。157・158は平面長方形を成す用途不明の板状木製品である。長さ・幅・厚さは157=18.8×7.4×0.8cm、158=20.9×8.1×0.6cmを測る。157は一部火を受ける。158は縁辺の3箇所(推定4箇所)に直径約4mmの円孔を有する。

S E312

2 A区に位置し、平面形は直径65cm程度の隅丸方形に近い。断面逆台形を呈し、深さ約0.6mを測る。埋土は粘土～粘土質シルトを基調とする4層から成り、1・2層はブロック状を呈する。遺物は、布留式期古相までの土器が出土しており、底部付近出土の159を図化した。159はほぼ完形に復元され、口径15.7cm・器高21.4cm・体部最大径20.5cmを測る。ハケ調整であるが、口縁部に庄内式壺の特徴を残すもので、布留式傾向壺に位置付けられる。外面全体が煤ける。

S K301

1 A区で検出した土坑で、平面形は東西55cm・南北50cmの方形に近い。断面皿状を呈し、深さ7~12cmを測り、埋土は淡灰黄色粘土の単層である。遺物は出土していない。

S K302

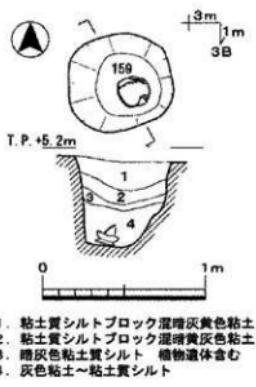
1 A区、S K301の南部に位置し、西側は調査区外に続く。検出部分の平面形は不定形で、規模は東西2.6m・南北2.8mを測る。断面皿状を呈し、深さ約16cmで、埋土は暗灰色粘土の単層である。東部は溝状を成しており、その状況から見てS D310と繋がっていた可能性がある。遺物は出土していない。

S K303

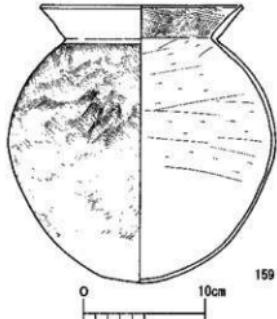
2 A区に位置し、西側は調査区外に続くため詳細は不明である。検出部分の平面形は不定形で、規模は東西48cm・南北86cmを測る。断面逆台形を成し、深さ約10cmを測り、埋土は淡褐色粘土の単層である。遺物は出土していない。

S K304

2 A区、S K303南側に位置する。平面形は溝状を成し、規模は東西25cm・南北80cmを測る。断面楕形を成し、深さ約7cmで、埋土はS K303と同じである。遺物は出土していない。



第38図 S E312断面図



第39図 S E312出土遺物

S K305

2 A 区に位置し、平面形は北東一南西方向の溝状を成す。規模は長さ95cm・幅33cmを測る。断面楕円形を成し、深さ約13cmで、埋土は褐灰黄色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

S K306

3 B 区で遺構の東部を検出した。平面形は不定形を成し、検出部分の規模は東西1.3m・南北1.4mを測る。断面皿状を成し、深さ約15cmで、埋土は灰褐色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

S K307

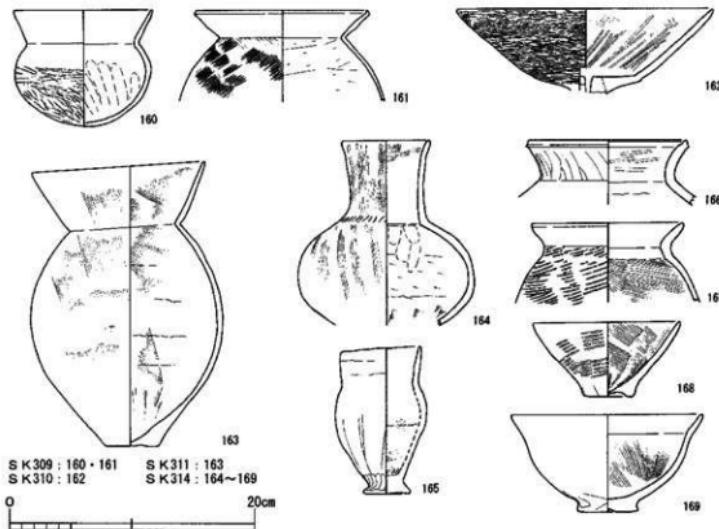
3 B 区、S K306南側で遺構の東部を検出した。平面形は不定形を成し、検出部分の規模は東西1.2m・南北2.0mを測る。断面皿状を成し、深さ約27cmで、埋土はS K306と同じである。遺物は出土していない。

S K308

3 B 区で検出した土坑で、平面形は不定形を成し、規模は東西1.2m・南北0.7mを測る。断面逆台形を成し、深さ約22cmを測り、埋土は暗灰褐色粘土質シルトである。遺物は庄内式期新相頃に比定される土器の他、長さ25cm・幅約5cmを測る木片が出土している。図化しえるものはない。

S K309

3 B 区、S K308南側で検出した土坑で、平面形は不定形を成し、規模は東西1.6m・南北0.9mを測る。断面逆台形を成し、深さ約20cmで、埋土は灰褐色粘土質シルトである。遺物は布留式



第40図 SK309~311・314出土遺物

期古相までの土器が出土しており、160・161を図化した。160は小形丸底壺で、口径12.0cm・器高10.1cm・体部最大径11.8cmを測る。調整は口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、底部外面ヘラケズリで、中位以下にヘラミガキを加える。体部外面に黒斑を有する。布留式期古相に比定される。161は庄内式甕で、口径15.0cmを測る。庄内式期新相に比定される。

S K310

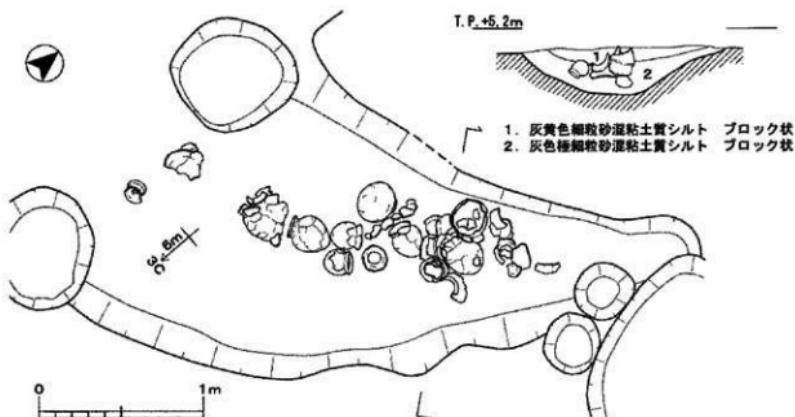
2B区で検出した土坑で、平面形は長辺2.3m・短辺1.7mを測る楕円形を呈する。断面皿状を成し、深さ19cmで、埋土は暗灰黄色粘土質シルトである。遺物は庄内式期新相に比定される土器が出土しており、162を図化した。162は有稜高杯で、口径22.0cmを測る。調整はハケ後ヘラミガキで、杯底部には脚柱部に貫通する直径約5mmの円孔を有する。口縁部に黒斑を有する。

S K311

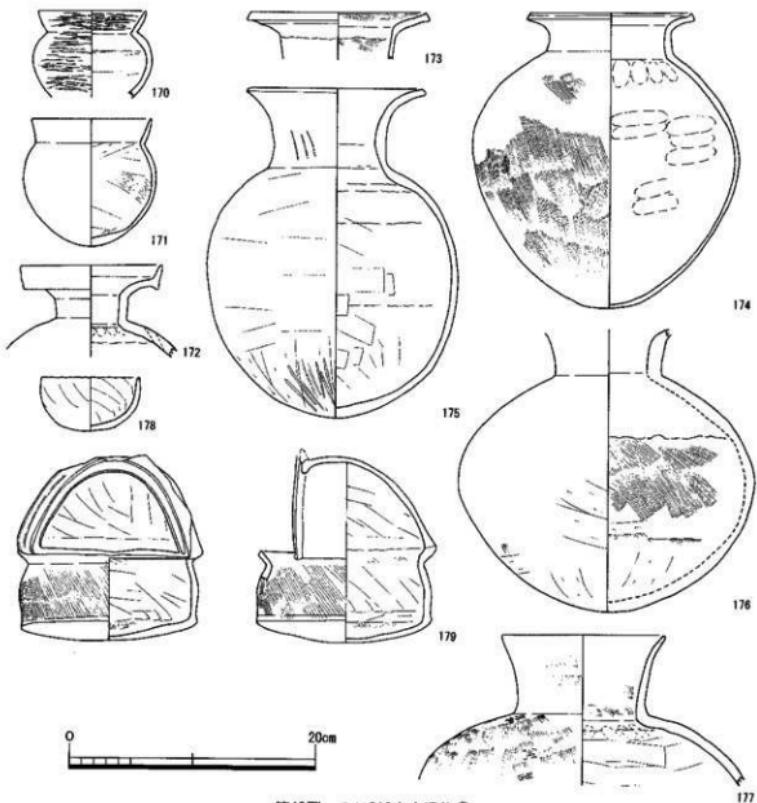
2B区に位置し、平面形は直径約1.6mの円形を呈する。断面ほぼ逆台形を成し、深さ約50cmを測る。埋土は上から暗褐色細粒砂混粘土質シルト・灰褐色細粒砂混粘土質シルト・暗灰黄色細粒砂混粘土質シルト・灰色粘土質シルトの4層で、1～3層はブロック状を呈する。なお検出時点で上部を削平してしまっており、本来第2面遺構であった可能性がある。遺物は庄内式期頃に比定される土器が出土しており、163を図化した。163は長胴の直口壺で、口径15.0cm・器高24.3cmを測る。調整はハケを多用し、底面には葉脈痕が認められる。形態的に見て製塙土器の可能性があり、底部外面が淡赤色を呈していることも示唆的である。

S K312

2B～C区に位置し、平面形は北東～南西方向に長い溝状を成す。規模は長さ3.9m・幅0.9～2.0m・深さ約30cmを測る。断面逆台形に近く、埋土はブロック状を呈する砂混粘土質シルトの2層から成る。遺物は庄内式期新相に比定される土器が多く出土しており、出土状況は遺構に沿つて中心ラインに並ぶような状況であった。170～189を図化した。170・171は小形丸底壺である。

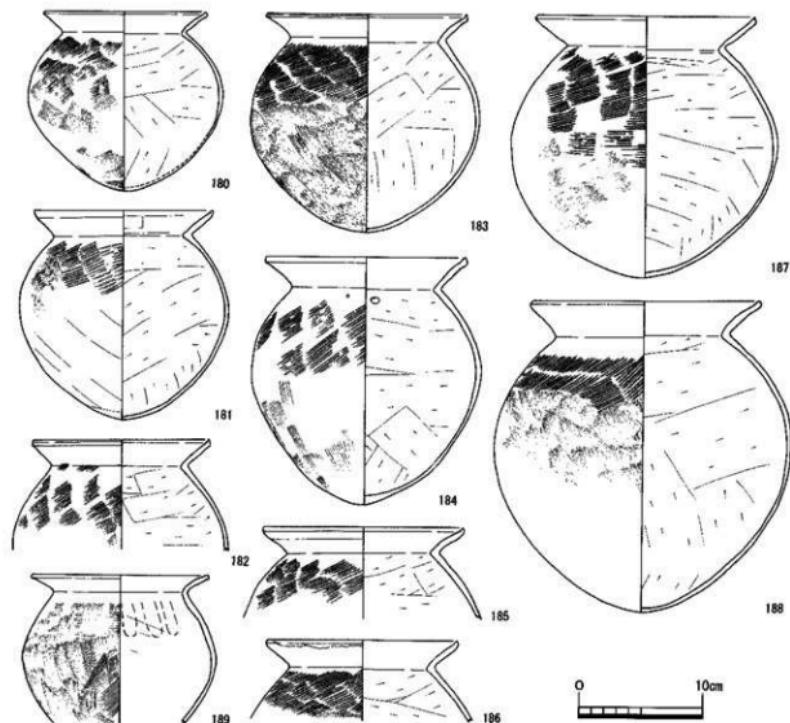


第41図 S K312平面・断面図



第42図 S K312出土遺物①

170は精製でヘラミガキを多用する。171は完形で、口径10.2cm・器高10.8cm・体部最大径11.2cmを測る。磨耗のため調整は不明瞭であるが、体部内面には上部のヘラケズリ、下部のハケが確認できる。胎土中には極めて多量の砂粒を含む。172は複合口縁壺で、口径12.0cmを測る。胎土中には5mm大までの砂粒を多く含む。173～175は広口壺である。口縁部形態は、173・174は口縁部が中位で外上方に屈曲し、175は緩やかに外彎する。口縁端部はいずれも上方に断面三角形に小さく肥厚する。調整は173・174がハケを多用し、175は底部外面へラケズリで、不明瞭であるが体部にはヘラミガキを施しているようである。175は底部に黒斑を有する。174は口径14.1cm・器高25.1cm、175は15.2cm・28.1cmを測る。これらは形態的に四国地方からの搬入品と考えられる。176は口縁端部を欠損する壺である。調整は外表面の底体部下半へラケズリ、内面体部ハケ、底部へラケズリが確認できる。非常に器壁が厚く、胎土中に砂粒を多く含む。177は直口壺で、口径13.8cmを測る。調整はハケを多用し、肩部には先行するタタキがわずかに認められる。肩部に黒斑を有す



第43図 S K312出土遺物②

る。178は小形鉢で、口径8.4cm・器高4.6cmを測る。精良な胎土で、成形は手捏ねにより、調整はナデで、底部外面にクラックが顕著に見られる。179は手焙形土器で、覆部の一部を欠損する。口径15.1cm・器高15.7cm・底径15.0cmを測る。覆部は口縁部の上面に張り付けられ、覆部前端部は幅約2cmの帯状に肥厚し、前面には2条の沈線を施す。調整は外面及び底部内面ハケ、内面及び底部外面ナデである。180～188は圧内式壺である。法量からは口径約14cmの小形(180～182)、約16cmの中形(183～186)、約18cmの大形(187・188)に分類できる。口縁端部は181が上方にわずかに屈曲するもので、他は上方につまみ上げる形状である。189は口径14.5cmを測る。外面ハケ調整で、頭部は緩やかに屈曲し、口縁端部は外傾する面を成す。調整・形態からみて四国地方からの搬入品と考えられる。

S K313

2C区で検出した土坑で、S K312の東部を切っている。平面形は隅丸方形に近く、規模は東西約1.4m・南北約1.3mを測る。断面逆台形を成し、深さ約40cmで、埋土は上層が暗黄褐色細粒砂混粘土質シルト、下層が暗灰黄色細粒砂混粘土質シルトである。遺物は出土していない。

S K314

2 C 区に位置し、平面形は北東—南西方向に長い溝状を成す。規模は長さ2.6m・幅約0.6m・深さ約10cmを測る。断面逆台形で、埋土はブロック状を呈する暗褐色粘土質シルト(炭含む)の単層である。遺物は弥生時代後期末に比定される土器が出土しており、164～169を固化した。164は扁球状の体部を有する長頸壺で、口径7.6cm・頸部高7.0cm・体部最大径15.2cmを測る。調整は外縁部ヘラミガキで、頸部最下位に刺突文を巡らせる。内面は口縁部及び底部ハケ、体部ヘラケズリである。165は壺で、口径7.0cm・器高12.6cm・底径4.1cmを測る。調整は板ナデを基調とし、底部外面には連続する細かい指頭圧痕が明瞭である。166は広口壺で、調整は口縁部外面板ナデ、内面ヘラミガキである。167は甕で、口径13.0cmを測る。口縁部に歪む部分があり、片口を有する可能性がある。168・169は鉢で、168は口径12.6cm・器高6.4cm、169は16.4・8.4cmを測る。調整は外側が168はタタキ、169はナデ、内面は共にハケである。これらの内166・169は生駒西麓産の胎土である。

S K315

2 C 区、S K313の南東部で検出した土坑である。平面不定形を成し、規模は東西約1.3m・南北約0.9mを測る。断面逆台形を成し、深さ約34cmで、埋土は上から暗灰黄色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト、暗褐色細粒砂混粘土、暗灰青色極細粒砂混粘土の3層から成る。遺物は庄内式期頃に比定される土器が少量出土している。

S K316

2 C 区に位置し、平面形は北東—南西方向に長い溝状を成すもので、S K314の南側で平行する状況である。また S K315・S D321に切られている。規模は長さ約2.0m・幅約0.6mを測る。断面皿状を呈し、深さ約10cmで、埋土はS K314と同様の暗褐色粘土質シルト(炭多く含む)である。遺物は出土していない。

S K317

2 C 区で長さ約3.2m西側の肩を検出したもので、北東に向かって緩やかに落ち込んで行き、調査区外に至る。深さ約10cmを測り、埋土は暗褐色細粒砂混粘土質シルトである。遺物は庄内式期古相に比定される土器が少量出土している。

S K318

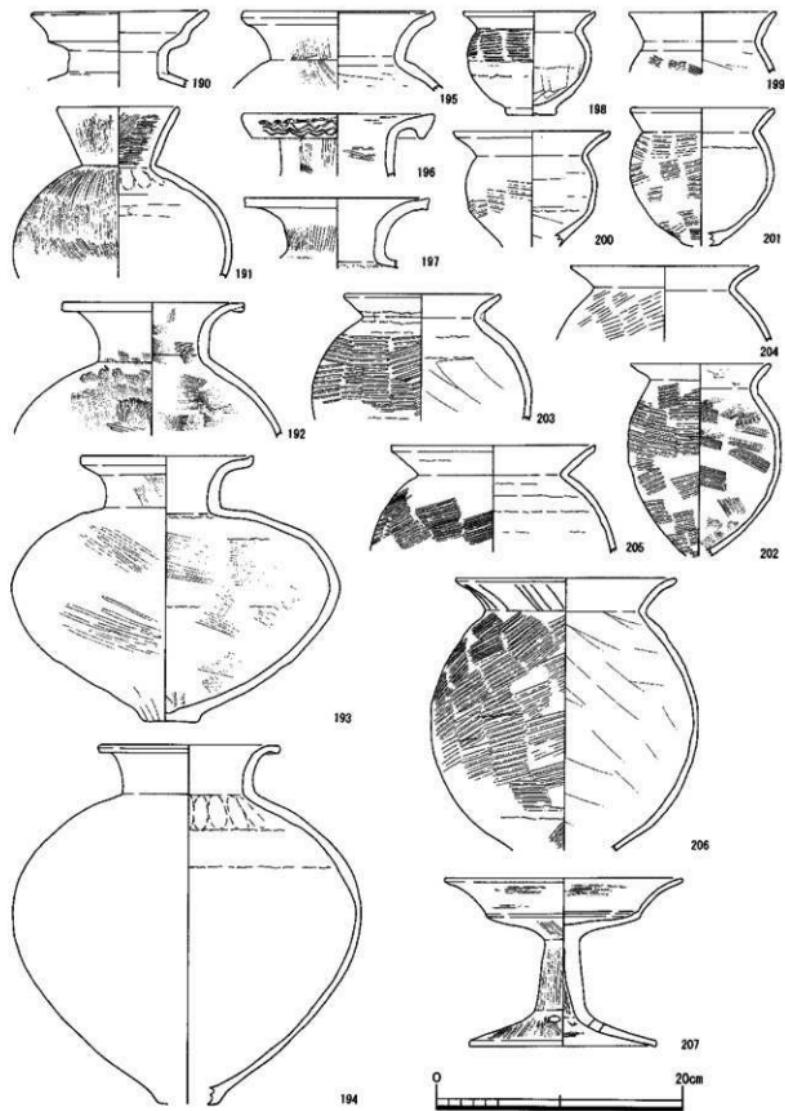
2 C 区で北側の肩を検出したもので、西はS I 301、南はS I 302に切られており、東は調査区外に至る。検出部分の規模は東西1.2m・南北1.9m・深さ約20cmを測り、埋土は暗褐色極細粒砂混シルト質粘土である。遺物は出土していない。

S K319

3 C 区で長さ3.2mに亘って北東—南西方向の肩を検出したもので、北西に落ち込んでいる。深さ約20cmを測り、埋土は暗褐色細粒砂混粘土質シルトである。遺物は出土していない。

S D301

1～2 B 区で検出した北西—南東方向の溝で、やや弧状を成し、南端では西に屈曲する状況である。中部では北肩から S D302が、南肩からは S D303が派生している。規模は検出長約12.5m・幅1.3～2.8m・深さ35～45cmを測り、底部には起伏がある。埋土は上から灰黄褐色細粒砂混粘土質シルト・暗黃灰色細粒砂混粘土質シルト～シルト質粘土・灰黄色細粒砂混シルト質粘土の3層



第44図 SD301出土遺物

から成り、南部では砂粒の含有が少ない。遺物は弥生時代後期末に比定される土器が、北部・中部で多く出土しており、2箇所で集積する部分がみられた。190～207を図化した。190は複合口縁壺で、口頭部のみ完存する。口径14.6cmを測り、調整は頭部外面のタテハケ以外は不明瞭である。191は直口壺で、口径10.2cmを測り、調整はヘラミガキを多用する。192～197は広口壺である。192は口径15.0cmを測り、調整はハケ後体部外面にヘラミガキを加える。口縁端部は粘土帶の貼付けにより下方に肥厚させている。193は口径14.3cm・器高22.4cm・体部最大径27.2cmを測る。扁平な体部を成し、口縁端部は短く上方に屈曲する。体部調整は外側ヘラミガキ、内面ハケである。194は口径15.0cm・器高29.9cm・体部最大径24.0cmを測る。磨耗のため調整は不明。体部に黒斑を有する。193・194は生駒西麓産の胎土で、5mm大までの砂粒を多く含んでいる。195は口径16.0cmを測り、調整は口縁部外面ハケ、体部外面ヘラミガキ、内面板ナデである。196は直立した頭部から口縁部が外反し、端部は粘土帶貼付けにより下方に大きく肥厚する。調整はヘラミガキで、口縁部外端面には櫛描直線文の後、櫛描波状文を重ねて施す。197は口径15.4cmを測り、調整はヨコナデで、頭部外面に縦位の板ナデを施す。口縁部上面に黒斑を有する。198～206は甕である。法量的に見て198～201が小形、202～204が中形、205・206が大形に分類される。202・203は口径では小形となるが、器高や体部最大径が大きく、容量では中形となろう。小形は口径10.9cm(198)～13.0cm(200)、器高9.6cm(198)～11.5cm(201)を測る。体部外面のタタキはいずれもほぼ水平に施される。中形は口径11.8cm(202)～15.6cm(204)で、器高は202が16.5cm程度を測る。203は補強のため頭部外面に粘土帶を付加している。大形は口径16.8cm(205)・18.2cm(206)を測る。205は他のものに比してタタキが細い。206は口縁部外面に平行斜線のヘラ記号を有する。207は有稜高杯で、口径19.8cm・器高13.9cm・脚底径15.4cm・稜径12.6cmを測る。調整はヘラミガキを多用し、裾部内面は板ナデである。裾部上位に4方孔を施し、裾端部に黒斑を有する。

S D302・303

S D301の両肩から派生し、平行して北西に延びる溝である。S D302は検出長約5.7mで、幅は東部で約0.5m、西部では広くなり1.2m以上を測る。S D303は検出長約5.3m・幅0.3～0.9mを測る。共に断面皿状を成し、深さ10～20cmで、埋土はS D301の中層と同じである。遺物は出土していない。

S D304～320

調査区中央付近で検出した溝群である。方向は北西～南東方向を基調とするが、合流するもの(S D305・307、S D312・313)、屈曲するもの(S D315)、交差するもの(S D317・318)がある他、直交する溝により連結するもの(S D308～310)も見られる。幅は30～50cm程度を測るものが多く、S D305・307・316が1.0m前後を測り広い。断面皿状～逆台形で、深さは10cm程度、埋土は暗灰黄色粘土質シルトである。遺物はほとんど出土しておらず、S D316から庄内式期に比定される土器が少量出土しているのみである。

S D321

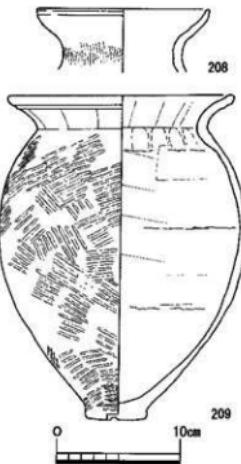
2C区で検出したほぼ直角に屈曲すると思われる溝である。S I 301～304から成る竪穴住居群に接続していることから、当溝についても竪穴住居の壁溝である可能性が高い。規模は南北長約3.2m・東西長約1.6m・幅約30cmを測る。断面楕円形を呈し、深さ5～10cmで、埋土は灰黄色粘土質シルトである。屈曲部をS I 301に切られている。遺物は出土していない。

S D322

3 A区で検出した南北方向の溝で、検出長約5.2m・幅0.4~0.9mを測る。断面椀形を成し、深さ10~20cmで、埋土は褐灰色細粒砂混粘土質シルトである。遺物は弥生時代後期末に比定される土器が出土しており、208・209を図化した。208は広口壺で、調整は頸部外面に縦位、内面に横位のハケを施す。209は壺で、口径16.8cm・器高24.3cmを測る。体部外面は三分割成形に応じてタタキの方向が異なり、最大径部分は乱方向のタタキを施している。外底面に米粒大の窪みを有する。

ピット

S P310~315はS B301を構成するピットで、近接するS P316も関連が考えられる。S P333~338はS B302を構成するピットで、S P332・339~342が近接し関連が考えられる。S P356~373はS I 301~304に付随するピットである。S P343~349は堅穴住居の壁溝である可能性があるS D321に隣接しており、同様に住居関連のピットと考えられる。これら以外に、調査区北西部にS P301~309、南部にS P317~326、北中部にS P327~331、南東部にS P350~355が散在しているが、企画性は認められず性格は不明である。遺物はS P302・319・321・324・325・331・353・355から弥生時代後期末~古墳時代前期に比定される土器片が出土している。



第45図 S D322出土遺物

第3章 まとめ

今回の調査では弥生時代後期~飛鳥・奈良時代の遺構・遺物が検出された。出土遺物はコンテナに35箱を数える。特に中心となる時期は古墳時代初頭~前期であった。

弥生~古墳時代では、第3面(弥生時代後期末~古墳時代前期前半)・第2面(古墳時代前期前半)の2面を確認し、堅穴住居・掘立柱建物・井戸等の多数の集落遺構を検出した。南東側の府センターによる「久宝寺南(その2)H地区」においても同時期の集落遺構が検出されており、その広がりが確認された。また北東部に当たる「同F地区」や、北部の「府教委1991年度調査地」、北西部の「大阪市文協84-1調査地(加美遺跡)」では、方形周溝墓を主とする当該期の墓域が確認されているが、当調査地では墳墓に関連する遺構は検出されず、当地までこの墓域は広がらないことが確認された。

第1面で検出した掘立柱建物(S B101)や溝(S D101)は、「久宝寺南(その2)」調査地で確認されている飛鳥~奈良時代の建物等と同一の方向を示しており、当時の集落の広がりが窺える。

註

註1 游 善 1993「2. 久宝寺遺跡(91-479)の調査」『八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書1』八尾市教育委員会

参考文献

- ・(財)大阪府文化財センター2003『古墳出現期の土師器と史年代 シンポジウム資料集』
- ・原田昌則1993「II 久宝寺遺跡(第1次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 (財)八尾市文化財調査研究会報告37』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・上原真人編1993『木器集成岡縁 近畿原始篇 奈良国立文化財研究所史料第36冊』奈良国立文化財研究所
- ・一瀬和夫他1987『久宝寺南(その2)ー久宝寺・加美遺跡の調査ー近畿自動車道天理~吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』財団法人大阪文化財センター

図 版

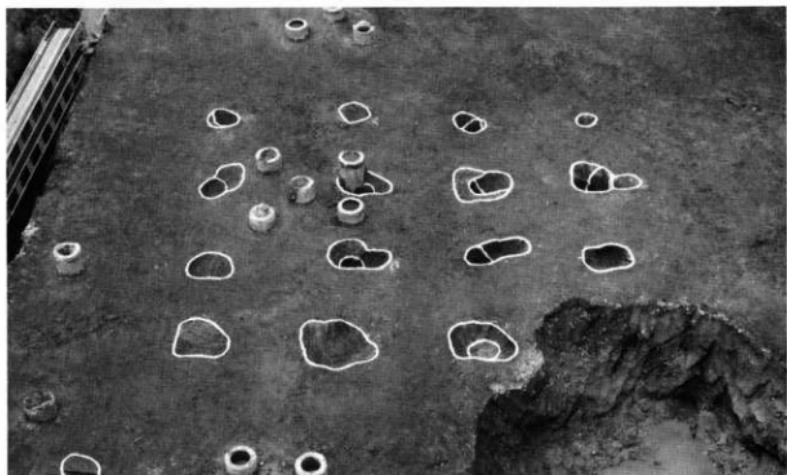


調査地周辺空中写真(平成8年3月6日撮影)

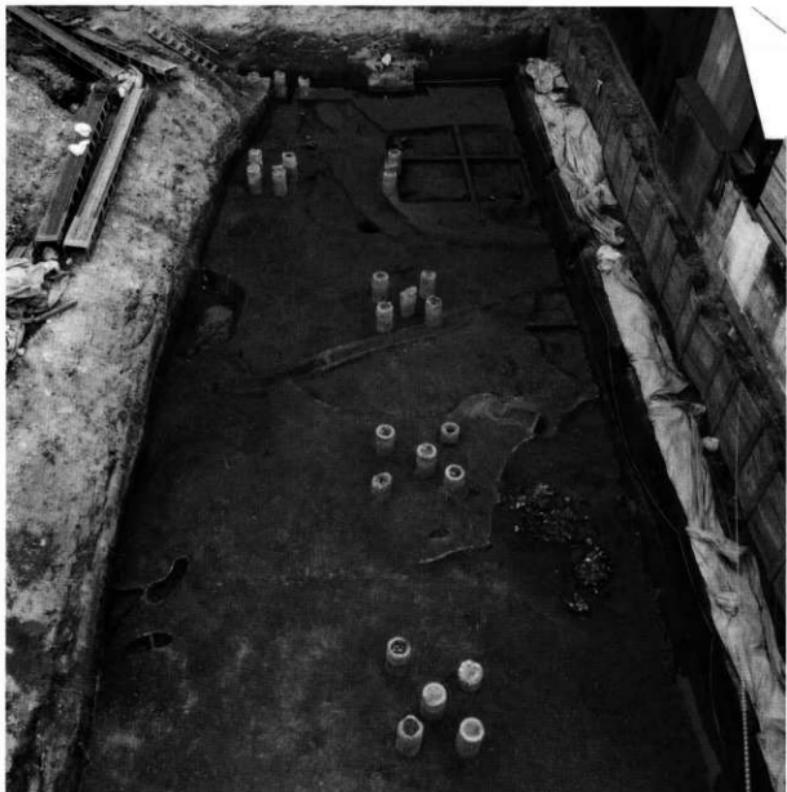
図版
2



東区第1面(南から)



S B101(南から)



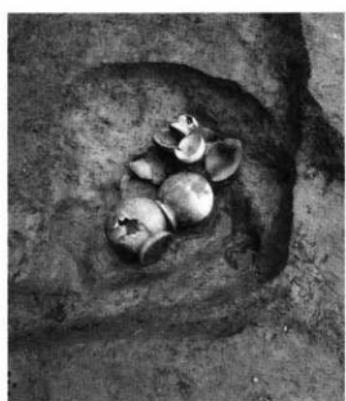
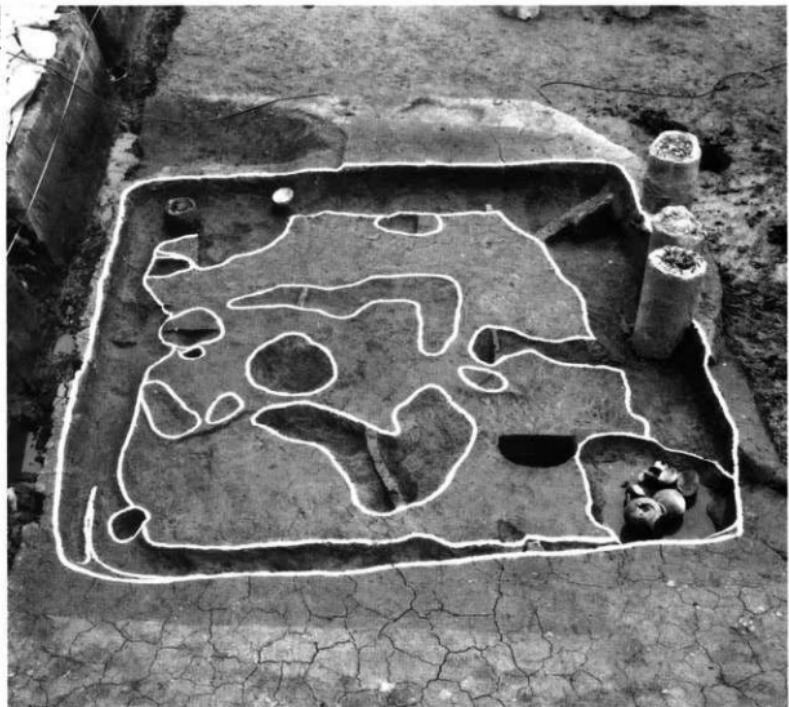
西区第2面(北から)



S E 201(南から)



S E 202(南西から)



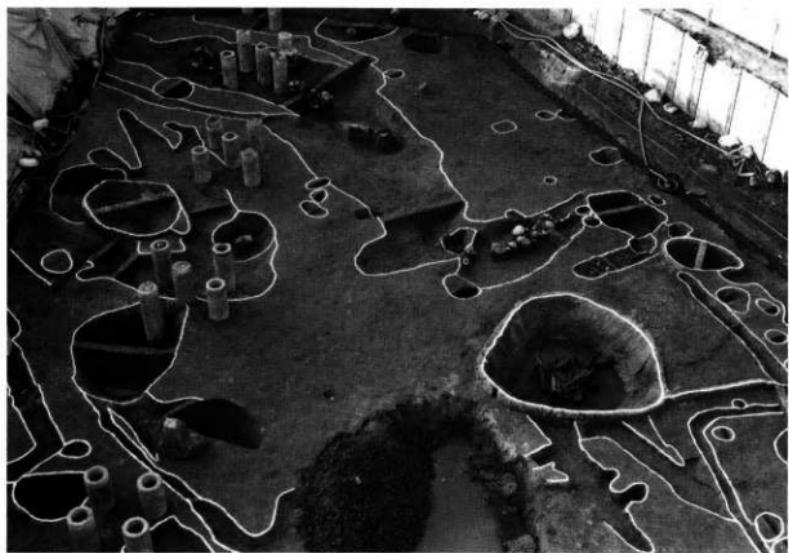
同K1(南から)



同遺物出土状況(北西から)



西区第3面(北から)



東区第3面(南から)

図版
6



S 1 301~304(西から)



同上(南から)



S B 301(北東から)



S E 301遺物出土状況(南東から)



S E 303上層遺物出土状況(北から)



S E 303(南から)



S E 303完掘(西から)



S E 305(北西から)